
とある一族の解析不能《レッドブレイド》

飯屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある一族の解析不能^{レッドフレイド}

【Nコード】

N9713Q

【作者名】

飯屋

【あらすじ】

木原一族にある少年が生まれた。生まれてからその少年は木原一族として育てられたが、その心は染まることは無かった。非道な実験を毎日目撃し、心が壊れかける。そのとき白髪の少年に出会う。白髪の少年は言う。「ここか逃げてエのか？なら手伝ってやる」・・・そして少年は逃げ出した。そのとき少年は不可思議な力を宿す。そんな少年の物語。

駄文ですが、読んでいただけるとうれしいです!!

少しずつ文章力を上げていくため頑張ります！！

幸？不幸？イギリス旅行編：上条当麻&インデックスと天地海斗&秋野綾は持ち前の運（？）でイギリスへの旅行に行くことになる。
そこで見るとは！？

~~~~~

この章で一旦この作品を終わらせて、

主人公等変えずに続編を出そうかと考えています。

理由はまあ・・・もともとそのつもりなんですけどね・・・。

少しこんがらがり過ぎたつてのが強いですね・・・すみません。

もっといい作品にしたいので、またよろしく願います。

後、続編のほうには世紀末帝王出す予定。

もう少し原作キャラを活躍させたいのでw

わかりにくかった所をわかりやすくしたいのもありますし。

今後とも、これを今読んでいただいている方、応援よろしく願います！

## 覚醒（前書き）

色々突っ込む場所があるでしょうが、なにとぞよろしくお願いします。

## 覚醒

激しい雨が降り注ぐ中、一人の少年が逃げ続けていた。

その少年の後から水溜りを踏む音が複数聞こえる。

追われている少年の名は『木原海斗』。

彼はある研究所から逃げ出した。手の中には折りたたみ式ナイフを持っている。

彼が逃げ出す機会は、

ある白髪紅眼の悪魔のような少年が能力の暴発を装って研究所の一部を吹き飛ばして作ってくれた。

たった一度のチャンス。無駄にはできない。

表向き海斗は普通の少年だが、裏では『木原一族』としてさまざまなものや叩き込まれた。

表での人間関係のおかげか海斗はまともな性格に育った。それが彼を苦しめた。

心が壊れる寸前の状況であの少年に出会った。そして今に至る。

「はぁッはぁッはぁッ!!もう・・・走れねえ・・・」

路地裏を走り続けている海斗だったがもう限界のようだ。

相手は研究員だが、数が多く巻ききれなかった。

パンツッ！…！という音が響き、海斗の右足から血があふれ、海斗は倒れこむ。

「があああああッ！…！く……そッ！…！」

悔しがる海斗を研究員が囲む。追い詰めたぞ！あそこだ！…！という声が聞こえる。



たくさん研究員の中から二人の研究員が海斗の前に出る。両親のようだ。

父親らしき人物が口を開く。

「あきらめる海斗。私達は研究をしてるだけなんだ。なにが不満だった？」

海斗はナイフを構え、睨みながら言い返す。

「ほざけ！なにが研究だ！！人の命を何だと思ってんだ！！！！！！」

父親らしき人物はふうつとため息をついて告げる。その声は冷酷だった。

「お前が逃げ出しても何も変わらない。ただ自分が逃げたいだけだろつ。」

単なるエゴだ……。お前も私達と変わらんだろう？終わりだ」

父親らしき人物の言葉が終わるとともに、研究員達が海斗に近づく。

海斗は叫ぶ。

「ああ・・・俺も自分のことしか考えてねえ！！あんたらみたいには

絶対なりたくねえ！！！！木原一族なんてクソの集まりじゃあねえか！！！！

「じぶすまでくたばる気はねえよ！……！！……！！」

次の瞬間、海斗の持っていたナイフが光を発した。

海斗に迫っていた研究員たちは驚いて立ち尽くす。

「ッ……！！……？……？……？」

海斗自身もおどろく中、海斗の手の中に一本の刀が現れる。

柄は西洋の剣のデザイン、刃は日本刀と同じ、そしてまるで血のよ  
うな赤色をした刀だった。

海斗は能力開発は受けていたがレベル0。そして今の状況はどう見  
ても超能力ではなかった。

ゆっくりと海斗は起き上がり、刀を振るう。

「あばよクソども………また会おうぜ………」

恐ろしい斬撃があたりを包み込んだ。



## 覚醒（後書き）

温かく見守っていただきたいと思います。



佐天涙子（前書き）

まさかのですねw

## 佐天涙子

海斗は街を歩いていた。時刻は正午。そして今日は日曜日だ。

あれから3年経ち海斗は14歳になった。

3年のうちに名字を変えたり、学校を探したり、能力をある程度把握したりして

過ごし、明日からは柵川中学に転校となっている。

ちなみに名字を変えたため、あまちかいと天地海斗となっている。

ふと海斗は視界の端に不良数人が女の子を囲んでいる光景がうつる。

（あれは・・・柵川中学の制服？ってことは同じ学校か・・・助けるか・・・）

そう考え、海斗はため息をはいて不良の一人に近づき声をかける。

「真昼間から何してんだよアホども・・・俺のドキドキワクワクライフを邪魔する気か？」

ああ！？何言ってるんだ？？といいながら不良はどこから取り出したかわからない

鉄パイプで海斗に殴りかかる。海斗は右に避けて拳をくりだし一人目を倒す。

「何だこいつ・・・おい！出て来いてめえら！！！！！」

鼻にピアスをした不良がそう叫ぶと、そろそろと20人ほど不良が集まってきた。

それを見た海斗はふん、と鼻で笑い折りたたみ式ナイフを取り出し言う。

「わらわらわらわらと・・・ゴキブリかよ。能力使つと疲れるんだけどな・・・」

「しかたねえ！」

突如、海斗の持っていたナイフが赤い刀に変わる。掛け声とともに襲ってくる不良達に

向けて、海斗は刀を振るう。

空を斬った刀身から烈風が放たれる。

ゴウッ！という音とともに不良全員が吹き飛ばされ、気絶した。

刀をしまった海斗はその場に座り込む。そこにさっきまで不良に囲まれていた女子、

いや、佐天涙子が声をかける。

「あ、ありがとうございます！！助かりました！！えっと・・・  
お名前は？」

わ、私は柵川中学1年、佐天涙子です！」

海斗は顔をあげ、佐天のほうを見て言う。

「俺は天地海斗。礼ならいいよ。俺も柵川中学だ。2年生だが……よろしくな佐天」

佐天は以外そうな顔で言う。

「そうなんですか！？でも天地さんを見たこと無いですけど……」

海斗は立ち上がりながら言う。

「ああ、俺は転校生って奴だ。じゃあな、佐天」

そついうと海斗は佐天に背を向けその場を立ち去ろうとする。

「ま、待ってください！」「ん？」「」

佐天は海斗を呼び止めた。海斗は佐天のほうを向く。

佐天は笑顔で海斗に言う。



「これから友達とファミレスに行くんですけど、一緒にどうですか？

お礼になにかおごりますから！」

海斗が断ろうとすると佐天が海斗の手を引っ張って歩き出す。

こうして二人はファミレスに向かった。



佐天涙子（後書き）

次回はオリ主紹介です。

オリキャラ紹介第一弾オリ主紹介（前書き）

説明ながッ！ですね。

## オリキャラ紹介第一弾オリ主紹介

オリキャラ紹介第一弾

・あまちかいと天地海斗（旧：木原海斗）

オリ主。14歳。柵川中学に転校した。レベル0。身長は170cm。茶髪。

木原一族に生まれた。表向きは普通の少年として幼稚園にも小学校（途中まで）行っていた。

そのなかでのよい人間関係（主に幼馴染）により性格は木原一族の色に染まらなかった。

だが、そのために非道な実験一回一回に実験をとめられない自分に罪悪感を感じ、

心が壊れかかる。そんなときに偶然研究所に来ていたアクセラレータ一方通行

と出会い、研究所から逃げ出す。その最中に『力』を手に入れる。

両親を初めて『力』が発現したときに殺している。その後の3年間  
は行方不明と

なっているが、自分の両親が仕切っていた研究所を潰し歩いていた。  
そのため喧嘩慣れしている。自分の寮に大量の折りたたみ式ナイフ  
のスペア持っている。

普段から護身用として折りたたみ式ナイフ、拳銃、そして治療用の  
包帯を所持している。

刃物の扱いがうまい。

能力名：解析不能

レッドフレイト

西洋の剣の柄に、日本刀と同じ刃で血のように赤い、長さ157c  
mの刀を

具現化する能力。

その刀を振ると烈風、電撃、業火、斬撃のうちの1つを繰り出せる  
(強弱あり)。

普通に刀としても使える。本来の力の断片に過ぎない(本人自覚な  
し)

強大な力のため幻想殺しでも打ち消すのに時間がかかる。  
イマジンブレイカー

超能力とは違うもので、研究所を破壊して回っているときに研究員達から

レットブレイド  
解析不能と呼ばれるようになった。

使用するとかなりの体力を消費する。折りたたみ式ナイフをよく『能力の媒体』にしている。

（刃物なら何でも媒体に使用可。媒体にしたものは能力を解除すれば元に戻る。）

追加事項：刀の重さは媒体にしたものとほとんど変わらない。

御坂美琴

海斗と佐天はファミレスの前にいた。

「ん？」

ふと海斗は頭に花を乗せた少女、初春飾利を見つけた。

ひとときわ目立つ少女に、海斗の横に居たはずの佐天が後ろから駆け寄る。

バサッ！！！佐天が初春のスカートを叫びながらめくる。

初春は佐天のほうに勢いよく振り返り顔を真っ赤にして、叫ぶ。



「佐天さん！！いきなり何するんですかッ！！！」

「いや、それよりも初春。天地さんって人も連れてきちゃたんだけどいいかな？」

佐天は詫びることもなく海斗を指差して話す。

初春は海斗のほうをみて近寄り、問う。

「み、見てませんよね・・・？」

周りの人はいまだ驚いているが、海斗は平然とした様子でつぶやく。

「白か・・・普通過ぎて面白くねえな・・・」

初春は顔をさらに真っ赤にして海斗に言う。

「なに言ってるんですかッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「まあまあ・・・落ち着きなって初春。」

怒る初春を佐天がなだめ、ようやく落ち着いたところで三人はファミレスに入った。

ファミレスの中に一人の少女が座っている席があった。あと5人は座れるだろう。

そこに待ち合わせていたかのように佐天と初春は座る。

すると先に座っていた少女、御坂美琴が口を開く。

「あ、佐天さんに初春さん！黒子は風紀委員ジャッジメントの仕事で忙しいらしいわ。

ところで、遅かったけど何かあったの？」

「いや、20人ほどの不良に襲われちゃって……天地さんに助けてもらいました」

と佐天が海斗を指差す。

初春と御坂は海斗に挨拶する。

「は、はじめまして、私は初春飾利です。風紀委員ジャッジメントの一人です。」

「初めまして、私は御坂美琴！不良20人を倒すなんてアンタ、やるわね。」

海斗はだるそうに言う。

「偶然だ。俺は天地海斗。御坂つつーことはレベル5のあの御坂か？」

「そうよ。天地さんのレベルは？」

御坂の問いに海斗は席に腰をかけてから答える。

「0だ」

ええッ！と佐天が驚くが海斗はそれをおいて、御坂のほうを向き、

真剣なまなざしで問う。

「……アクセラレータ一方通行の今すんでいる場所ってしってるか？」

「ツツ！ー！！」

御坂の表情が一気にこわばる。

「アンタ……まさか『アレ』の関係者！？」

海斗は『アレ』が何を指すのか知っていた。

だが初春や佐天が居るため、あえて触れないことにした。

「ああ、そうだ」

「アンタはあんな奴に会つて「違う」えっ!？」

御坂の言葉をさえぎり、海斗は言う。

「恩人なんだ。悪い奴じゃあねえ。ただ礼が言いたかったただけだ。

知らないんらいいぜ」

ちょうど話に区切りがついたところにメニューがくる。

「じゃあいただきますか」

海斗の一言とともに食事が始まった。

夕方、四人は川原に居た。

初春と佐天は坂の上から御坂と海斗を見下ろす形でたっている。

御坂と海斗は少し距離をおいて、対峙している。決闘のようだ。

原因は海斗の不良を倒す姿を佐天が熱弁し、御坂が勝負しろと言ったことからだ。

「さあ！いくわよ！！！！」

御坂はそういつと雷撃の槍を作りし放つ。

「手加減しろよ……」

そういつつ海斗は懐から折りたたみ式ナイフを取り出し、斜め前に投げ、

雷撃の槍をそちらへ誘導し起動をずらし、よける。

(くッ！うまいこと起動をずらしたわね！！)

海斗としてはあまり能力を見られたくないし、かなりの体力を使うので、

使うなら一瞬にしたいところだった。

(さすがレベル5、実力を出し切るまえに終わらせないと勝てない！)

海斗はナイフを拾い、御坂に向かって駆け出す。



「やるわね。これならどう!?!?!」

砂鉄が空中に漂う。しかし海斗が能力を使う様子はない。

「なんで能力を使わないのかしら?」

海斗は即答する。

「必要ないから」

(なら意地でも使わせてやるわ!?!?!?)

御坂は一枚のコインを取り出し、構える。

「なら、私の勝ちね。」

次の瞬間、レールガン超電磁砲が放たれると同時に砂鉄が海斗に襲い掛かる。

海斗はニイツと笑うと、能力を使用する。

爆音とともにあたりに砂埃が上がる。

(さすがにあればやりすぎちゃったかなッ!?)

見ていた初春たちも御坂自身も御坂が勝ったと確信するが・・・

「俺の勝ちだ」

トンツと御坂の後ろから刃をしまった折りたたみ式ナイフが突きつけられる。

「・・・刃をしまってなかったらお前は即死だ。御坂」

海斗が挑発した理由は能力を使う瞬間を一瞬にしたいこと、

負けと確信させること、そして隙を作るためだった。

「くっ！私のまげよ……」

海斗は悔しがる御坂に背を向けてポカンと口を開いている二人の横を素通りし、

「眠いから帰るぜ。じゃ・な」

海斗はそのままゆっくり歩き、帰宅した。



秋野綾（前書き）

更新します

## 秋野綾

御坂美琴と戦った日の翌日、海斗は柵川中学の職員室前にいた。

海斗の目の前には、女の教師が居る。

「あなたが転校生の天地君ね。私は泉雪<sup>いづみゆき</sup>。」

泉先生でいいわ。よろしく」

笑顔でそう言う泉先生に対し、海斗はあくびをしながら返す。

「よろしくな。泉先生。じゃあ教室に行きますか」

そうね。といいつつ泉先生は海斗をつれて歩き出した。

教室のドアの前に海斗は居た。久しぶりの学校生活。

何事も無く過ごしたい。そんな願いが海斗の心のどこかにあった。

教室に先に入った泉先生の声が聞こえる。

「皆！前から言っていた男の子の転校生が来ました！！！」

おお！！という声が廊下にまで響く。

「では、入ってきて！」

泉先生の声とともに海斗はドアを開けて教壇に立つ。

皆の視線が海斗に釘付けになる。

海斗は泉先生が促す前にクラスを見渡しながら自己紹介を始めた。

その最中にある見慣れた人物を見つける。

「天地海斗だ。レベルは0・・・げっ！あきのあや秋野綾・・・」

秋野と呼ばれた頭に赤い紅葉の髪飾りをした少女は

満面の笑みになり、席をたって叫ぶ。

「やっぱり！！海斗なんだ！！！！会いたかったよぉ〜海斗ぉ〜」

叫びながら席から駆け出し、海斗に抱きつく。



「は・な・せ！！このポケ野郎！！！！！」

「幼馴染との3年ぶりの感動の再開なんだからいいじゃない！！！」

そう彼女は唯一、海斗のことをすべて知っている。

表も裏も能力のことも。

海斗の性格が木原のそれにならなかったのは

彼女が海斗の幼馴染だったからといても過言ではなかった。

「これだからお前は苦手だ！」

「むむッ！その言葉は感心しないな」

秋野の抱きつく力が強くなり、メシメシという音が鳴り始める。

そこにコホンッと泉先生が咳をして言う。

「その感動の再開は後にして、授業を始めたいんだけど」

こうして海斗は秋野から開放された。

放課後、海斗は校門前で佐天と初春の二人と会う  
予定になっていた。

海斗は秋野に気付かれれば面倒なのでこっそり出てきた。

「待ちました？」

「天地さん！！昨日ぶりです」

警戒心を強めている海斗に二人が声をかける。

「ん？俺も今来たところだ。よし行くか」

そそくさと海斗が校門から離れようとしたとき、声が聞こえる。

「へえ〜海斗はこの私よりも年下の娘が好みなんだ〜」

冷や汗を流しながら海斗は後ろを向く。佐天たちもどうしたんですか？とiiiつつ振り向く。

そこには全身に黒いオーラをまとった秋野が居た。

「綾……居たの?」「あッ!秋野先輩!!」「」

海斗が恐る恐るたずねるが、横に居た二人の声によりかき消される。

話をそらすべく。海斗は初春に疑問をぶつける。

「……なんで二人とも綾のこと知ってたんだ?」

すると予想外の返事が返ってくる。

「秋野先輩はこの学校のアイドルってやつなんですよ!?!?!」

海斗はありえないという顔で言う。

「……なにかの間違いだろ」

そして佐天は秋野に言う。

「いまから三人で遊びに行くんですけど、よければ一緒に行きませんか？」

「ありがとう二人とも！！ご一緒させていただくわ」

そして初春と佐天は秋野に自己紹介をした。

「さあ行きましょう！」

佐天が右手を突き上げてそういつた瞬間、初春の携帯がなる。

「あ、白井さんからです」

そういつつ初春は歩きながら携帯電話を耳にあてる。

『初春！！！そちらは今何も起きてないんですの！？』

「え！？どどどうしたんですか？白井さん！！」

一同の間に不穏な空気が流れる。

『実は今朝、テレスティーナ・木原・ライフラインが逃げ出したんですわ！！』

目的はおそらく、わたくしたちへの復讐ですわ！！！！』

海斗は『木原』という言葉にピクツと反応する。

もう二度と聞きたくない言葉・・・そう思いながら初春の会話に

意識を集中する。

『テレステイナが脱走するときに警備員アンチスキルに似た装備の

連中がテレステイナを味方したそうなのですわ！

わたくしはもう少し調べてみようと思いますの！..!』

海斗にはその連中に心あたりがあった。

バウンズドッグ  
獵犬部隊・・・かつて木原数多が率いていた部隊。

その残党がおそらくかかっているのだろう。

「わ、わかりました白井さん！私も支部でしらべます！」

初春はそついつと電話を閉じる。

「初春……なにこれ？」

そこに佐天が話しかける。

初春が周りを見渡すと、自分達を先ほどの会話の中に出てきた装備の集団が居た。

「皆！走って！！！」

危険を感じた秋野の声とともに皆が走る。秋野は心配そうな顔で海斗のほうを向く。

「安心しろ。落ち着いてる」

そっぴいなながら静かに海斗は怒りをあらわにしていた。





## 迎撃

四人はさっきから逃げ続けていた。

相手は銃を持っていることや第三者を巻き込まないため、

曲がり角の多い路地裏を通っている。

ここ最近、雨が降ったためにいまだ水溜りがある。

パンという音とともに弾丸が海斗の足を掠る。

「ッ！」

海斗の脳裏に3年前の光景が浮かぶ。思い出したくないものが鮮明に。

「海斗!？」

急に立ち止まった海斗を心配して秋野が近づきながら声をかける。

「秋野先輩！！！！」

佐天が叫んだ次の瞬間、秋野の左肩を弾丸が貫いた。

海斗の前に赤い血が飛び散る。

「うっ……」

うめき声を上げながら秋野は倒れこんだ。

佐天と初春が心配して駆け寄る。

海斗は心の中で思う。

( 俺のせいだ。過ぎ去ったことにおびえたせいで無駄な血が流れちまった・・・。)

忘れてたぜ！！俺もクソの一人だ！！！！人を殺すことに今更ためらいなんてねえ！！！！)

海斗はあたりを見回し、廃ビルらしき建てるものを見つける。

「あつちに廃ビルがある！！ひとまずそこに身を隠すぞ！！」

四人は全速力で廃ビルに入った。

海斗は三人の少女をみた。

様子からして三人とも体力の限界に近かった。

秋野は肩を海斗が渡した包帯で止血している。

海斗は覚悟を決めたようす秋野に言う。

「綾。あいつらは俺が足止めする。だから二人は任せた」

「待つてください！！天地さんはどうするつもりなんですか！？」

初春が割って入る。海斗はこうこたえた。

「見て思ったけど、あいつら仲悪そうだからな。仲間割れでもさせてみるか」

簡単な嘘だった。

今から起きる出来事を見られなくなかった。

秋野はそれに気付き、ことう初春に促す。

「そうね。じゃあここは任せるわ。行きましょ二人とも」

そういつてビルの反対の出口から一人をつれて出て行った。

一人残された海斗は拳銃を取り出し、弾数を数える。

少し前に彼は一度だけ一方通行を目撃していた。

『これが悪党だ』

一方通行が垣根帝督に言い放った言葉。

彼の生き様。

ふうっとため息をついていると複数の足音が聞こえた。

こちらに敵が近づいてきたのだろうか。

「来たか」

そうつぶやくと海斗は物陰に身を隠した。

猟犬部隊は固まって移動していた。

ふと、隊員の一人が落ちている使われて量の減った包帯を見つける。

「なんだ？包帯・・・？」

隊員の一人が屈んだ瞬間、銃声とともにその隊員の頭が撃ちぬかれる。

近くに居た一人が驚く。

「なんだあ『パンツッッ！！』ッ！！！！！！」

二度目の銃声が響く。驚く隊員の右肩に弾丸が当たる。

そして、

柱の影に隠れていた海斗は肩を抑える隊員の横に出て左手に持った



折りたたみ式ナイフを肩を抑える隊員の首の後ろにつきたてた。

ようやく気付いたのか一斉に隊員全員が海斗のほうを向いた。

海斗は隊員の首にささっていたナイフを引き抜き、言う。

「よお、クソども……。感謝しろ。」

働いてばかりで疲れてるだろーから休暇をくれてやる。

もっとも……。二度とおわらねえ休暇だな!!!!!!」

隊員たちが銃を構えると同時に海斗は能力により刀を出す。

「俺が二代目『悪党』ってやつだ！覚えとけクソども！！！！！！」

赤い刀から斬撃が放たれ、隊員たちの銃が手首ごと切り落とされる。

海斗は痛みに悲鳴を上げる隊員たち近づき、一人一人を次々ときり捨てていく。

刀を振るうたびに赤い赤い血が噴水のようにあふれ出す。

およそ10分にしてあたりに血の海がで

きたのだった。



## 迎撃（後書き）

海斗「なあ作者」

作者「ん？何でしょうか？」

海斗「俺の名前ってどうやってつけたんだ？」

作者「名前で天・地・海って並べたくなりまして・・・」

海斗「へー。それで海斗ってのは？」

作者「イケメンの友人の名前です。許可をもらっています。」

海斗「・・・ここで叩き潰す。」

シャキンッ！

作者「小説内では作者は最強ですよ。」

上条当麻「その幻想をぶち殺す！！」

ドガッッ！！

作者「ゲフッ！」

海斗「・・・」

## テレスティーナ（前書き）

完全にキャラ崩壊してますね・・・

## テレステイーナ

海斗は廃ビルを出て、大通りを歩いていた。

返り血を大量に浴びたので、制服の上着は丸めて持っている。

今日は曇りなのであたりが薄暗い。

海斗は丸めた上着のポケットから携帯を取り出し、

電話帳から、今日登録したばかりの『秋野綾』に電話をかける。

ブルルルルと電子音が鳴り響く。

(でない……か。初春や佐天は?……)

初春と佐天にかけるが、またもでない。

そこで海斗は昨日知り合ったばかりの御坂に電話をかけた。

すぐに繋がった。

『もしもし！！！！なにかあったの！？』

海斗がなにか言おうとしたとき、

御坂のほうから爆発音と電撃の音やザザツという雑音が聞こえてきた。

「お取り込み中のようだな」

『そりゃあそうでしょ！！佐天さんたちが捕まっちゃったんだから！！！！！！』

助けるために私と黒子でいま変な奴らと戦ってるの！』

その言葉に海斗は目を見開く。だが、驚く気持ちを抑え、質問する。

「・・・そっちにテレステーナはいるか？」

『いないわ！おそらく佐天さんたちと一緒に場所にいるわ！！』

海斗はチィッ！と舌打ちしてこいつ言つ。

「なら場所はわかってるんだな？」

『今、GPSコードをそっちに送るわ！！！』

ピロリンッ！とテレステーナがいる場所がかかれた地図が送られてくる。

不安げな声で御坂は問う。

『まさか！一人で行く気なの！？あいつはいかれてるわよ！！』



「嫌っつーほどじってる!!そして行かねーよ!!」

そう答えると海斗は電話をきって携帯を閉じた。

ここはとある研究所。

テレスティーナ・木原・ライフラインはボロボロになった三人の少女の前に居た。

テレスティーナはピンクのパワードスーツ駆動鎧を着ていた。

前と違うところといえば、右手が回転式のマシンガンになっていることぐらいだった。

テレスティーナは三人の少女に向かって話す。

「ぎゃはははは！いいざまだなあ！実験体にして死ぬまで苦しんでもらうからなあ！！」

秋野はかすかな笑みをうかべ、言い返す。

「そうはいかないわ！あなたは敵に回してはいけないものをまわした・・・」

テレスティーナは凶悪な笑みを浮かべ、秋野の胸倉をつかみ、持ち上げて言う。

「あいつが何者かはしらねえけどなあ！もう対策はできてんだよ！ぎゃはははは！！！！」

テレスティーナが秋野を投げ飛ばそうとした時、

突如、天井が崩れ、テレスティーナを狙うように瓦礫が落ちてくる。

テレスティーナは軽く舌打ちするとつかんでいた秋野を前に投げ、後ろに一歩さがる。

テレスティーナはあたりを見回す。すると部屋の入り口に赤い刀を持った海斗がいた。

海斗は凶悪な笑みを浮かべて言う。

「テレスティーナああ……。ひっさしぶりだなー」

テレスティーナは海斗の正体に気付き、言い返す。

「ほーまさか貴様だったとはなあ！海斗おおお！この裏切り者が！  
何しに来たあ！」

「てめえを地獄に落としに来た」

『木原』の二人が対峙した瞬間だった。

オリキャラ紹介第二弾（前書き）

こんどは短いですね・・・

## オリキャラ紹介第二弾

オリキャラ紹介第2弾です。

今回はオリヒロと脇役です。

・あきのあや  
秋野綾

オリヒロ。14歳。柵川中学2年生。身長は165cm。髪の色はこげ茶色。

教室の席は海斗の前。

髪に赤い紅葉の髪飾りをしている。オリ主の天地海斗の幼馴染。レベルは0。

天地海斗の表裏すべてをしる、唯一の人物。

スタイルがいいことと、比較的明るく、何事にも積極的な性格を持つことから

気付けば柵川中学のアイドル的存在になっていた。

能力は念動能力<sup>テレキネシス</sup>、レベルが低く実用性も低いためあまりつかわない。

・泉雪<sup>いずみゆき</sup>

脇役キャラ？の予定。海斗や秋野のクラスの担任。

22歳。まだ若く、教師として未熟だが、明るく美人なため、

生徒からの人気も高い。

髪の色は黒色。

小萌先生や黄泉川先生を友人に持つ。

## レッドブレイド(前書き)

駄文が続きますが、よんでいただけたらうれしいです。



## レッドブレイド

テレスティーナが顎を動かし合図を送ると、どこからか駆動鎧の集団が出てきた。

「容赦はしねえぞおおお!!!!!!」

海斗はそういうと刀を振るい斬撃を放ち、二人ほどを切り捨てる。

「ぎゃははは!てめえの弱点は知ってた!!!!!!」

困んで銃を乱射すればいくら烈風を繰り出そうが意味がねえんだよなあ!」

その声とともに一斉に敵全員が銃を構える。

「チイツ!」

海斗の額に冷や汗が流れる。

「死ねえ!!!!」

テレスティーナの声とともに一斉に銃の引き金が引かれる。

その直前に海斗は刀を振るい烈風を放ち、走り出す。

ダダダダダッ！！！！！！！！！

といつつおとがあたり一帯に鳴り響く。

標準が外れた弾丸が飛び散る中、海斗は敵の一人の近くにより、刀を突き立てる。

そして海斗は即座に刀を引き剥いた。貫かれた敵の一人は傷口から血をふき出しながら

崩れ落ちる。

(次い！！！！！！！)

そう思い海斗はもう一度烈風を放ち、テレスティーナのもとに駆け出す。

次の瞬間だった。

嵐のように飛び散る弾丸の一つが海斗の左腕を貫く。

(ッ！立ち止まるなッ！！！！！)

そう自分に言い聞かせ足を進めるが、

そこに前方に居たテレステイナーの放った一発が海斗の腹を貫く。

傷口から血があふれ出す。激痛に耐え切れず声がもれる。

「がッッッ!!!!!!!!!!!!!!」

そして5、6発が腕、足、胸、肩を貫く。

少しずつ海斗の制服が赤く染まっていく。

「ぐあああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!」

海斗の悲鳴が響きわたる。惨劇というつ言葉がふさわしい光景だった。

「海斗お！……！！……！！」

秋野の声がむなしく響くが、今の海斗には届かない。

海斗は血まみれになって倒れた。赤い血が海斗の体を中心に広がる。

その光景を見て、テレスティーナは口がさけるかと思うほどの笑みをみせ、

味方に銃を撃つのを止めさせる。

「ぎゃはははははははははははははは……！！……！！」

何しに来たかわかんねえなあ！……！！……！！てめえも実験体にしてやるよ……！！



だが、佐天のその瞳からは覚悟を感じるものがあつた。

「無理だなあ」

テレスティーナはそういうと、

パンツッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

左手に普通の拳銃をもち、佐天の腹部を撃つた。





ドクンツ……!!!

海斗の体の中のかなにがざわめきだす。

(力が……チカラが……!!!…!!!すべてを……!!!)

ドクンッッ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

(すべてを破壊する力がッッ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !)

パキッ!

何か海斗のなかではじけた。

フラフラと海斗が立ち上がる。

「あ!?!まだ!?!?・・・なんだ?・・・」

テレスティーナは言葉を失う。

海斗の瞳が真っ赤に染まってゆく。

そして、

『見えない何か』が

海斗が右手に持っている折りたたみ式ナイフに集まっていく。

「がああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああ！……！」

海斗の咆哮とともに

海斗の右手に見たことのない『レッドブレイド赤い大剣』が現れ、

海斗の右腕には、

青色の線が枝分かれしたような模様のついた真っ赤な装甲が現れた。  
。

身の危険を感じたテレステイナは叫ぶ。

「撃ち殺せえ！！！！」

銃弾が発射される直前に海斗は大剣を地面に突き刺した。

その瞬間、ドンッ！という音とともに敵全員が地面に叩きつけられる。

テレステイナは一瞬で状況を把握するが、海斗のほうをみる以外なにもできない。

「ツツ！！！！重力も使えるだー！！？」

海斗は無言のまま大剣を前に突き出した。

そこに赤い光が集まっていく。

テレスティーナはゾツとする。本能的にわかる、その異様な力の大きさに。

『あれ』が放たれればおそらく自分達は

テレスティーナは必死に命乞いをする。

だが海斗は応じない。もはや声が届いているのかもわからない。

「た、たのむ！やめッ！やめろおおおおおおお！……！」

海斗は赤く輝く大剣を振り上げ、そして、

「 a k h s 破 g d 壊 w y i 」



軽々と振り下ろした。

ズバツツツ!!!

赤く強大で眼前のものすべてを破壊する斬撃が炸裂し、

研究所はほぼ全壊した。

すさまじい一撃を放った海斗はその場に倒れこみ、意識を手放した。



## 病室にて

海斗が目を覚ますとそこには見慣れない天井があった。

「ここは？」

体を起こしてあたりを確認する。

おそらくここは病院の病室だと海斗が思っているとき不意に声がかけられる。

「やっと目を覚ましたようだね」

カエル顔の医者が海斗のベッドのそばにたっていた。

その顔からは凄い腕医者とは思えない。

「あいつらは！？ッッ！」

海斗は身を乗り出して聞こうとするが激痛により顔をしかめる。

先ほどまでは痛覚が麻痺していたのか、徐々に体中に痛みが出てきた。

「うごかないほうがいい。彼女達は無事だよ。一人はまだ起きていないけどね……」

そういつてカエル顔の医者はその場をあとにした。

それと入れ替わりに秋野と御坂と白井黒子が入ってくる。

「海斗！生きてる!?!」

あまりにも変な質問に海斗は肩をおとす。

そこに御坂が話しかける。

「アンタ、何無茶してんのよ……。あいつといいアンタといい、

男って皆バカなの？」

「あいつって誰だよ……」

コホンツと白井黒子が咳をすると皆が黙る。

そして白井は話し出す。

「申し送れました。」

わたくし、ジャッジメント風紀委員の白井黒子と申します。天地さんには

事件のことについて少しお伺いしたいんですの……」

「初春に聞くのがはええんじゃあねえのか？」

海斗は自分のことがどれくらい把握されているかわからない。

白井にそう告げて探ることにする。

「初春の話では天地さんが研究所で戦闘を開始したあと、

ひどい砂埃なので目をつぶっていたそうです。

砂埃が晴れたら、天地さんが血まみれで倒れていて、

そのあと佐天さんが天地さんをかばって撃たれた・・・思い違っ  
点はないんですの?」

「ああ、その後は?」

「佐天さんが撃たれた以降はショックで覚えていないそうですの。」

研究所は謎の攻撃によりほぼ全壊ですし……天地さんはなにかご存知ですか？」

秋野はおそらく初春と同じ意見をいい、海斗に関することを言わなかったのだろう。

また、

海斗が殺人などの罪に問われていないのは最後の一撃ですべてが吹き飛んだからだろう。

そして海斗はただのレベル0、そんな一撃を放てるとは見ていないかぎり誰も思わない。

だが、白井は海斗をさぐり入れるように見つめる。

海斗は少し緊張がほぐれたのか、肩の力を抜く。



「しらねえな。むこうが勝手に自爆したんじゃあねえのか？」

「答えてくれてありがとうございます。最後に一つだけ質問させてください」

一瞬、辺りが静まり返る。

「初春の話では、天地さんはテレスティーナと面識があったらしいのです。」

本性まで知ってるようですね。

いつ、どこで知りあったんですの？

秋野が不安そうな目でこちらを見る。

御坂はある一つの仮説をたて、言う。

「まさかアンタ！あいつの仲間だったとか言うんじゃないでしょうねー！」

「・・・研究所であったことがあるだけだ」

海斗のその台詞に御坂は安堵したのかため息をついて肩の力をぬく。

「ではまたですの」

そう言って白井は御坂とともに病室を後にした。

「お姉さま・・・」

「何？黒子？」

病院を出たところで白井は口を開く。

真剣に話しかけてくる白井に違和感を感じた御坂が問いかえず。

白井は腕を組んで右手を顎にあてて考えるしぐさをする。

「天地さんにはきいてませんけど・・・初春の証言の中には、

テレスティーナが天地さんに『裏切り者』と言っていたらしいんです・・・」

「えッ！？それって・・・黒子!!」

「ええ。お姉さまのさっきの意見も当たっているかもしれませんの」

「……でもさ黒子……」

少し小声になる御坂のほうに白井が振り返る。

「なんですの？お姉さま？」

「あいつは悪い奴じゃあないと思うの……」

だって三人を助けるために命を落としかけたんでしょ」

白井は空を見上げて答えた。

「わたくしもそつだとおもつんですの」

二人が出て行った病室にて海斗と綾は話していた。

「ひやひやしたぜ。あれが白井か・・・怖えな」

「ひやひやしたのはこっちだよ！無茶して死に掛けて!!」

怒りをあらわにする秋野にとまどつ海斗。

海斗は言い逃れようとする。

「まあいきでたんだしよk」よくなーい!!」病室では静かに!」

完全に頭にきたのか、秋野は動けない海斗の後ろに回り、首をしめる。

「冗談とおもえないミシミシという音が鳴る。

「は、入ってる!!ギブギブ!くるし……い。

そして……あたっている!」

「なにが?」

首を絞めることを止めて秋野はキョトンとした顔で問う。

「……胸が」

「……」

ドガッ!バキィッ!!

鈍い音が響いた。

じゃあねーと言いつつ、秋野はぐずぐまっている海斗をおいてそそくさと帰っていった。

「あんの野郎・・・」

そういつつ海斗は松葉杖を取り出し、ベッドから降りる。

（ ）のどが渴いたなあ・・・（ ）

そう思いつつ病室をでる。

「ん？」

自分と同タイミングで横の病室から出てきたツンツン頭の少年と目があう。

その少年こと上条当麻にはいくつか歯型があった。

「どうしたんだそれ……」

上条は答える。

「見舞いにきた居候に……お前こそ殴られたのか？」

「……見舞いに怪我を増やされるとはお互いやれやれだな」

お互い同時にため息をつく。



「不幸だ・・・」

上条のつぶやきに海斗は苦笑いしかできなかった。



一日の始まり（前書き）

グダグダですね。

## 一日の始まり

テレスティーナ脱走事件から一ヶ月、海斗ようやく退院した。

佐天は海斗より約2週間はやく退院していた。

海斗は校門前にたたずんでいた。

ふつうに登校する生徒、見張りの教師、堂々と建つ学校。

どれも普通で当たり前前の風景。

そこに自分というものが入っていいのか？

離れるべき場所。どことなくそんな気がしてしまう。

ドンッ！と後ろから突如たたかれ海斗は振り返る。

後ろには見慣れた少女がいた。

「・・・・・・・・綾か・・・・・・・・」

「おはよー海斗！！！！久しぶりの学校は緊張するのかな？」

うらやましいやつめ！という目線をあたりの男子は海斗に向ける。

「いや、転校初日しかきてないからな・・・今日から転校する気分だ」

「フッフ　まあ海斗なら大丈夫だよ！！」

「根拠は？」

「ない！」

呆れる海斗の後ろから海斗を呼ぶ声がする。

「天地さ〜ん！」

「よう！佐天！あと初春も！」

佐天と初春は笑顔で挨拶をして会話に入る。

チラリと海斗は学校にある大型の時計をみる。

校門からは少し距離があり、見えにくいが見えにくいが大まかな時間はわかるものだ。

時計の針はまだ余裕のある時間。

安心した様子で三人のほうに視線を戻す。

佐天、秋野、初春の順で話す。

「どうしたんですか？」

「海斗が少し緊張してるみたいなの！」

「わ、わかります！けっこう緊張しますよね」

そこに海斗も加わる。

「とりあえずだな！教室で綾は抱きつかないでくれ！！」

白い目で見られるし、男の友達ができねえ！！」

「へ〜ここでならいいんだ」

ピョンッ！と海斗の右腕に秋野が抱きつく。

「面白そうですね〜私も！」

「佐天まで！しばくぞ！てめえら！！」

佐天が海斗の左腕に抱きつく。そこで秋野にスイッチがはいる。

「やるね〜佐天ちゃん！初春ちゃんも！ほら！！はやく〜」

「あわわわわわわー！」

退院したての少し重い体。

そして海斗はあたりを見る。

あたりにいる男子は海斗を睨んでいる。

近くの女子はひそひそ話をしている。

「だあー！！！！！！いい加減にしろー！！！」

そう叫びつつ強引に二人を振りほどいて学校の中に入っていった。

放課後、白井黒子からの呼び出しもあって海斗はファミレスにいた。



疲れているためか、かなり不機嫌のようだ。

ちなみに白井以外に秋野、佐天、初春、御坂もいる。

秋野はいじわるそうな笑みで問う。

「海斗はなんで不機嫌なの？美少女に囲まれて照れてるのかな？」

「美女だあ？白井は知らねえけどな、

じゃじゃ馬にセクハラ中学生に頭がお花畑にビリビリ中学生・・・

どこをどうとれば美少女なんだ？」

御坂がビリビリという言葉に反応する。

「アンタ！私には御坂美琴って名前があるの！

ってアンタもあいつと同類かあ！！！！！！！！」

「うおッ!」

御坂は電撃を放つ。海斗はそれを首を横にふってギリギリかわす。

「あつぶね。今までお前に何人殺されてんだ?ペッタソコにくせに怖え」

「天地さん!お姉さまの胸はちょうどいい大きさですの!!--!!」

少しつつましいところがお姉さまにあうんですの!!--!!」

「いいかげんに

しろおおお!!--!!」

しばらくの間、電撃の放たれる音が鳴り響いた。

つかれてうなだれている海斗に黒焦げの白井が話します。

「最近、スキルアウトが暴れているんです……」

「スキルアウトぐらい白井にかかりゃあ余裕だろ？」

「それが、ここ最近のスキルアウトは特殊ですの」

「は？」

頭の上に？マークを浮かべて海斗は問う。

それに白井が答える。

「集団で大人数なのにトップがないんですの。」

そしてなぜか居場所がつかめませんの……」

「なにが言いたい？」

余計な情報は要らないと判断したのか

真剣な表情になって海斗は白井の真意を聞こうとする。

白井は一息ついて、告げる。

「天地さん、貴方にシヤツジメント風紀委員に入っていただけなんですの」

「断る」

「ビ、ビビってっ」

海斗が即答すると白井は驚いた。

海斗は席を立ち背伸びをしてから歩き出す。

「堅いのは嫌いなんだ。じゃあ俺は先に帰るぜ」

こうして海斗はファミレスを後にした。



## 一日の始まり（後書き）

アドバイスをいただきました。

ありがとうございます。

主人公の能力についての補足ですが、刀の重さは媒体となったナイフとあまり変わりません。

オリキャラ説明第一弾に付け足しときました。書き忘れです。すいません。

## 夜

海斗は一人で夜道を歩いていた。

今は午後10時過ぎ。

今夜も曇りで月が見えない。

あたりのビルはレストランやデパートだからなのか、

今の時間帯に明るい窓のついたビルは見当たらなかった。

スキルアウトが最近騒いでいるせいか、道にもいない。

佐天や秋野は気にしていないようだが、

海斗は二人を怪我をさせてしまったことを気にしていた。

足元を見ながら思う。

(全部捨てて闇に飛び込んだほうが楽じゃあねえか……)



それならあいつらに危害が加わることもねえ………)

静かな空間に海斗の足音だけが響く。

そこに突如、雨が降り出してきた。

ザアーーーーッという音が鳴り響く。

雨にぬれながらも気にせず海斗は歩き続ける。

不意に、後ろから『ワン!』という犬の鳴き声が聞こえる。

「ん?」

海斗が振り向くと視界に小さな子犬が捕らえられた。

鮮やか茶色い毛は雨にぬれて少し色が濃くなる。

子犬は舌をだして尻尾をふり、

海斗の右足に自分の前足を引っ掛けて二本の足で立っていた。

おそらく捨て犬というやつだろう。

海斗は目を細めて、その子犬の前に屈みこむ。

「……あいつらといい、お前といい、なんで俺に近づいてくるんだ？」

俺には何にもねえぞ？」

海斗の問いを理解しているのか『ワンワンッ！』とほえる。

それを見て思わず海斗の口元が緩む。

その瞬間、どこからともなくダイナマイ

トが

子犬の上に現れ、爆発した。

とっさに海斗は能力を使用して爆風に対処するが、

その余波により子犬が6メートルほど吹き飛ばす。

海斗は子犬のほうを見る。

幸い、気絶しただけですんだようだ、

海斗の脳裏で子犬とこの前の佐天と重なる。

（……………なんでだ？

なんで関係ないやつまで…………？

俺だけを狙えばいいじゃあねえのかよ…………（

海斗は刀をもったまま立ち上がりあたりを見回すと、

海斗を取り囲むように不良の集団が立っていた。

集団の中にはこの前の不良たちも見られた。

武装していることからしてスキルアウトなのだろう。

スキルアウトの一人が一步前に出て言う。

「てめえだろ。この前俺たちの仲間をボコボコにしてくれた奴はよ  
」。

能力者だからって調子に乗ってんじゃあねえぞ！

おそらく彼らは海斗のことをレベル3以上と思っているようだった。

おなじレベル0とは微塵にも思っていないだろう。

海斗は険しい表情になり冷たい目でスキルアウトを見る。

「命を奪う気はねえから急所を狙う気はねえ。

だが・・・出血多量で死んじまつかもなあ！」



突然の雨に三人とも対処できず、びちゃびちゃだった。

少し遠くから、海斗の居るほうから轟音がした。

辺りに居た一般人は激しい雨のためか気付いていない。

それを聞いた一方通行の表情は険しくなる。

そこに打ち止めが話しかける。

「なにがあったのかな？ってミサカはミサカは首をかしげてたずね  
てみる」

どうやら横の二人にも聞こえていたようで

「俺が知るかよ」

番外個体も話し出す。

「久しぶりの事件の予感・・・ミサカ、ワクワクしてきた」

満面の笑みを浮かべる番外个体。

チイツ！と一方通行は舌打ちする。

「番外个体・・・クソガキを連れて黄泉川のところに先に帰ってる」

番外个体は

一方通行の真意を察したらしく、しびしびながらもうなずく。

「ミサカも混ぜてよー。・・・まあここは貸しとして聞いてあげよう」

打ち止めは音のしたほうに向おうとする一方通行に不安そうに言う。

「無理しないでね。ってミサカはミサカは笑顔で送り出してみる！」

打ち止めは笑顔で一方通行を見つめる。



「じゃあ、おさと用を済まして帰ってくる。」

缶コーヒー買ったけ、ブラックだ。忘れんなよ、クソガキ・

「・

そついでと一方通行は海斗のいる場所にむかって歩き出した。



一方通行（前書き）

少し長くてわかり辛いかもしれません。  
ですが読んでいただけたらうれしいです。

## 一方通行

アクセラレータ  
一方通行が音のした現場につくと、

そこには大量のスキルアウトが倒れていた。

(どオいうことだ?)

ここらあたりにはマンシヨンがない。

まだこの時間帯だ。この道を人がまだ一人も歩いていないのだろう。

とりあえず一方通行はスキルアウトたちの状態を確かめる。

(全員生きてンな・・・致命傷もねエ。出血もたいしたことねエな)

いまだ激しい雨が降る中、一方通行はあたりを見回す。

かつて結標淡希と戦った場所によくにている大道りだった。

状況を飲み込め切れない一方通行に不意に声かけられる。

「三年ぶりかな？一方通行」

バツ！と一方通行は振り返る。

彼の視線の先には赤い刀をもっている海斗がいた。

「あん時のヤツか・・・」

落ち着いた様子で一方通行は返す。

二人ともずぶぬれだった。

ザァーッという音が会話の間を埋める。

海斗は目を細めて、話し出す。

「あの時、お前がいなかったら俺は『木原一族』の一員になっていた。」

礼をいうぜ……。一方通行」

海斗の礼に全く触れず、一方通行は問う。

「ならよオ……。今のテメエは何者だ？」

海斗はニヤツと笑う。

「『悪党』だ」

一方通行は目を大きく見開き、口元をつり上げ、楽しそうに言う。

「面白エ！・・・ならテメエが本当に『悪党』かどうか試してやる  
！！！！！」

一方通行がそう叫ぶと海斗は一方通行に向かって走り出す。

バシャッ！とできたばかりの水溜りを踏み鳴らす音がする。

一方通行は電極チヨーカーに指を当てて能力使用モードに切り替える。

そして一方通行は風を操って竜巻を繰り出す。

ゴウツ！という音をたてながら、竜巻が一直線に海斗に迫る。

海斗はとっさに地面にむかって刀を振るう。

烈風が吹いたかと思うと海斗の体が空中に舞う。

空中にいる海斗に高速でなにかが迫る。

「なんだア！この程度かア！！！」

一方通行は背中に竜巻を作り出し、空中を飛んで海斗に近づいていた。

「ッ！はやッ！」



迫ってくる一方通行の姿を確認した海斗は

とっさに刀を振るい、弱く小さな電撃を飛ばす。

だが、一方通行にはそんなものは通じなかった。

電撃は『反射』されてかえってくる。

「ッ……！」

しびれる海斗の正面まで一方通行が接近してきた。

一方通行は拳を振りかざす。

海斗は反応できずにいる。

「俺にんなもんきくわけねェだろオが！」

一方通行の拳が海斗の腹に入る。

「かッ……はぁッッ!!!!」

口の中に血の味がするのがわかった。

海斗の体はまるでボールのように地面にむかって勢いよく飛ばされる。

「ッッ!!!!うおおおお!!!!」

雄叫びをあげながら海斗は強引に体をひねり、地面にむかって刀を振るう。

最大級の烈風を生み出し、勢いを殺してふわりと地面に着地する。

海斗は口元についた血を手で拭う。

（『反射』のパターンは今までのデータとこれでわかった。

他のデータもすでに頭に入ってる。気に入わねえがアレを使

うか・・・)

一方通行は戦いにより、ぼろぼろになった道路に立つ海斗に

周囲の空気のベクトルを掌握して烈風を放つ。

対する海斗も刀を振るい、烈風を生み出す。

二人の放った烈風が衝突する。

衝撃により、アスファルトの破片や砂埃が舞う。

近くのビルの窓ガラスが飛び散り、外灯の一つが倒れる。

海斗の眼前に一方通行が姿を現す。

もう一度、一方通行は拳を繰り出す。

海斗は右手の刀を手放し、一方通行の拳を避けて懐に入る。

(刀を手放した?!?!?!まさかあのクソ野郎と同じことをッ!?)

「その通りだぜ!!一方通行」

状況を察し、顔をしかめる一方通行の腹部に海斗の右の拳が入る。

途端に一方通行の背中にあつた竜巻が消える。

「ッッ!!はアッ!!」

一方通行は2、3メートル吹っ飛ばされる。

ゆっくりと起き上がる一方通行に海斗は歩み寄り、

左足で蹴りを入れて追撃する。

「ぐツツツ!!!!」

いっきにたたみかけようと海斗は拳を振り上げる。

「チイツツ!!!!」

だが一方通行は竜巻を作り出し、海斗を吹き飛ばす。

「うわツツ!!」

刀が落ちているそばに吹き飛ばされた海斗は即座に起き上がり、

そばにあった刀を右手で握る。

一方通行は海斗を正面から見て、話し出す。

「あのクソ野郎と同じ芸当ができるなんてなア」

「あいつにも色々叩き込まれてな……」

海斗は木原数多が生み出した体術を使っていた。

彼は本人以外でできなかったことをやってのけたのだ。

一方通行は首を動かさず、目だけであたりをみまわす。

道路はボロボロになり、ビルの窓は結構割れている。

外灯もへし折れている。だがスキルアウトたちにはさっきの傷以外の怪我はない。

この二人は戦闘中、お互い相手に気付かれないうちにガラスやアスファルトの破片などから

倒れているスキルアウトたちを救っていた。二人とも関係ないものはまきこまない。

「認めてやる。テメエも『悪党』だ。

・・・だがテメエは闇に堕ちるべきじゃあねエな。

一流の『悪党』にしてもテメエと俺は種類が違  
うんだよ……」

一方通行の言葉に不機嫌そうに海斗は返す。

「どこまで見抜いてやがる……」

一方通行は一息ついて告げる。

「元一流の『悪党』としてヒントをやる。

日の光が強エほど影も濃くなるんだよ……覚えとけク  
ソツたれが！」

沈黙による静けさを雨が埋め尽くす。

海斗は一方通行に静かに言う。

「決着をつけようじゃあねえか」

「ああ！いくぜエー！」

二人は同時に駆け出した。

海斗は特殊な体術を駆使して刀で一方通行の頭を突こうとする。

一方通行は頭を横に振り、刀による突きをかわす。



かすかに一方通行の肩を刀がかすり、少量の血が飛ぶ。

海斗は刀から手を離し、体を一回転させて左手で拳を作り、くりだす。

ゴウッ！という音とともに拳サイズの竜巻を一方通行は作り、拳を防ぐ。

「なッ！……！」

「積みだア……！」

とまどう海斗にむかって一方通行は拳を繰り出した。

「がッッ！……！」

轟音とともに海斗は殴り飛ばされた。

殴り飛ばされた海斗は意識を失った。

激しい雨が晴れ、月が顔を出した。

刀は能力が切れたためか、普通のナイフに戻っている。

一方通行は電極のモードを切り替え、杖を突いて歩き、倒れている海斗に近寄る。

「こいつ・・・黄泉川のとこまで連れて行くか・・・。ン？」

海斗に近寄る小さいなにかを見つける。

「・・・子犬か。こいつになつてんのか？しょうがねエ・・・」  
いつも連れて行くか・・・」

そつつぶやくと一方通行は救急車を呼び、海斗と子犬を連れて、

黄泉川愛穂のいるマンションにむかった。







## 騒がしい三人組

「ん？・・・ここは？」

海斗はとあるリビングの白いソファの上で目覚めた。

状況を理解しようとしたあたりを見回す海斗に不意に声がかげられる。

「あ、起きたよ〜ってミサカはミサカは状況を報告してみる」

近くにいた見た目10歳前後の少女、ラストオーダー打ち止めは

リビングに入ってきた黄泉川愛穂に声をかける。

時計は今、11時をさしていた。

海斗は妹達シスターズのこともすべて知っていたので

打ち止めや番外個体ミサカワーストのことにも驚かなかった。

よくみると、

打ち止めは美琴オリジナルが着てそうなゲコ太のパジャマを着ていた。

ひょこつと黄泉川が顔をだす。一緒に一方通行アクセラレータもいる。

・・・一方通行は見るからに不機嫌そうだ。

「・・・げっ！黄泉川・・・」

海斗は昔、事件当時によく現場の近くにいたということから警備員アンチスキル

に追い回されたこともあった。だからお互い名前と顔は覚えている。

あまりいい印象ではないが・・・。

「久しぶりじゃんよ天地。泉センセからは転校生として話はきいてたじゃん！」

でもまだ二日しか登校してないらしいじゃんよ。

さて、二人とも・・・事情を説明してもらおうじゃんよ。「よ」



海斗と一方通行はスキルアウトのことを伏せて話した。

黄泉川は二人の話が終わるとともに

「・・・二人とも、歯をくいしばるじゃんよ」

拳を作り二人の腹にパンチを叩き込む。

ドゴッ！という音とともに二人はうずくまる。

「じゃあ私は風呂にはいつてくるじゃんよ」

そついうと黄泉川はリビングを出て行った。

一方通行は顔だけをあげて叫ぶ。一般人であれば圧倒される迫力で。

「黄泉川アアアアア！！」

そこにどこからか声がかけられる。

「まあまあ。落ち着きなよ。見てるこっちからすれば面白いんだし」

『クウ〜ン』

声がしたほうを見ると、番外個体が子犬を腕で抱えてたっていた。

番外個体のパジャマはピンクのシンプルなもので、かなり似合っている。

犬のほうは番外個体に抱きかかえられても平気そうだ。

あまり磁場とか気にしていないのだろうか？

座り込んだ一方通行に走ってきた打ち止めが缶コーヒーを渡す。

一方通行はその缶コーヒーを受け取り、グイッと勢いよくのむ。

「ブハッ！！！！甘エ！！！！なにか入れたなァ！クソガキィ！！！！！」

缶コーヒ―を吹き出しながら一方通行は怒るが、

打ち止めは番外個体と話して聞いていない。

「すっごくいい！見事にひっかかった〜ってミサカはミサカは感激してみたり！！」

「あっひゃっひゃっひゃっひゃー！ミサカのいうとおりでしょ おもいきり吹いてるし」

「ねえねえ！次はどうするの？ってミサカはミサカは意地悪そうな笑みを浮かべてみたり〜」

目を輝かせる打ち止めにニヤニヤする番外個体。

悪戯においてこの二人を超えるものはいないといっていいかもしれない。

「次はん「なアに企ンでんだこのバカが」あだッ！」

一方通行は立ち上がり、番外個体の言葉をさえぎって額にチョップ

する。

ぎゃあぎゃああと騒ぐ三人をよそに一人ポツンと取り残される海斗。

「俺、暇だ」

そう言いつつ、海斗は台所に移動する。

カウンターのの上に4つほどりんごが入ったバスケットがあった。

他には炊飯器が多いこと意外目立つことの無い台所。

海斗は赤くて目立つりんごを一つ手にとり、包丁とお皿を探す。

(あつた)

海斗は包丁を目の前のカウンターに置き、包丁を右手に持つと、

左手でりんごを上投げた。そして海斗は右手の包丁をすばやく振

り回す。

スパツ！という音とともにりんごが食べやすいサイズに切り分けられ皿の上におちる。

海斗は包丁を置き、皿を左手で持ち、右手でそのりんごを口にに入れる。

「うまい・・・」

シャリシャリという音をたてながらりんごを食べる海斗に声がかけられる。

「すごい！憧れちゃう それ、ミサカにもさせて」

満面の笑みの番外个体・・・なにかたくらんでそうにいるに違いない。

海斗はふと視線をリビングに移す。

打ち止めは子犬と床に座りこみ、遊んでいる。

一方通行は新しい缶コーヒーを片手に持ち、ソファに座ってテレビを見ている。

( よつやくおちついた・・・か )

海斗は視線を横にいる番外个体に移す。

ちょうど番外个体が左手でりんごを投げ上げたところだった。

海斗は一步後退して見守ることにする。

番外个体は包丁を振り回したそのとき  
。

スポツツ！「あ」「

番外个体の右手の包丁がスルリと手から離れた。

グサツツ！という音とともに

一方通行の持っていた缶コーヒーの側面に包丁が刺さる。

缶コーヒーはビチャツ！と音をだし、

茶色い中身をあたりにぶちまかれる。

番外個体は舌を出して、軽く自分の頭を叩く。

「テへ ミサカ、手がすべっちゃったみたい」

海斗は苦笑いして心の中で叫ぶ。

(うそだ！ぜってえ狙ってたツツ！！！！)

「そオカそオカ……。そんなに死にてエのかア……」

一方通行は缶コーヒーを置き、チャージャー電極に手を伸ばす。

「どづしたの？ってミサカはミサカは！！！！！！？」

だめだよ暴れちゃあだめってミサカはミサカは止めに入ってみたり！！！！！！」

「お前が暴れたら大変なことになるって！！一方通行！！！！！！」

ようやく気付いた打ち止めとあせる海斗は必死に一方通行をとめようつとする。

番外个体は腹をかかえて、一方通行の服を指差す。

「あっひゃっひゃっひゃ！どづしたの？その色！

ウンコでも漏らしたのかな」

「お前はもう喋るなッ！」

こうして夜は更けていった。

翌日、海斗が遅刻したのは言うまでもない。





騒がしい三人組（後書き）

子犬・・・なんて名前にしようか・・・。

昼休みにて（前書き）

ハイパー駄文 W

## 昼休みにて

一方通行と戦った日の翌日、海斗は自分の机うなだれていた。

昨日一方通行と戦ったり、今日、大遅刻して泉先生にこつてりしか  
られたりした。

今は昼休みで、教室に残っている生徒は少ない。

「はあく疲れた〜〜」

海斗の席は教室の一番窓際の列の最後にある席であり、教室の隅の  
席である。

海斗の一つ前の席の秋野は海斗のほうに椅子を向けて座る。

「フフ まあいいじゃない！」

そんなにかわいいワンちゃんを連れてきていいって許可されたん  
だから！！」

秋野の視線の先・・・海斗の左肩の上には昨日拾った子犬が乗って  
いた。

ブンブンと尻尾を振っている。

『ワフッ!』

フサフサの茶色い毛が鮮やかに光を発している。

なぜ、こんなことになったのかというと、昨日の夜にさかのぼる。

### 昨日の夜。

黄泉川が子犬を抱えている海斗に問う。

「天地。その子犬どうするじゃんよ!

飼いたいけどウチじゃあマンションだから飼えないじゃんよ。

それに似たようなものもあるじゃん」

チラツと黄泉川が騒いでいる三人のほうを見る。海斗は苦笑いする。

「え……まじで!!」

じゃあどうするんだよ！俺も寮だし……それに学校行ってる間ほったらかしだぞ！

学校に連れて行くこともできねえし……」

黄泉川は目を見開いてなにか思いついたように言う。

「その手があったじゃんよ！」

「は？」

「たしか天地は担任は泉センセだったじゃん！」

「それが？」

黄泉川は手に携帯電話をとり、

「私が泉センセに言って、泉センセが上に許可をもらっじゃん！！」

勝手に話を進められ、海斗は啞然とする。

「え！俺が飼うのか！？」

黄泉川は笑顔で答える。

「当たり前じゃんよ！！」

「なッッ！！」

回想終了。

ぶすっとした顔で海斗は言う。

「ったく……。黄泉川の野郎……。」

ニコニコした顔で秋野は子犬の頭を撫でる。

「かゝわっいいゝ……いいなゝ海斗は！」

『クウ〜ン』

「……俺の話、聞けよ」

海斗はずっと子犬とじゃれあっている秋野をみて、ため息をつく。

子犬もうれしそうだ。

そこに誰かが話しかけてくる。



「よお、モテモテ転校生君。転校三日めから大変そつだな」

「重藤か……。なんか用か？」

声の主は重藤しげふじつかき司。

金髪の少しチャらい？男だ。

イケメンなのにモテないなんとも不思議な存在だった。

ちなみに彼の席は海斗の右隣（左は窓）だ。

重藤は秋野のほうにペコリと頭を下げる。

「秋野さん。放課後二人でお茶でもしよう！」

「おお！……だが断る！……！」

「がはッ！」

グサッ！という音とともに重藤が倒れこむ。

彼の心は大ダメージを負ったようだ。

「相変わらずでなによりだ」

つぶやく海斗の前前に青い色の髪でショートヘアの少女が歩いてきた。

おしとやかな雰囲気を持つ少女は口を開く。

「えーっと・・・どういう状況？」

「見たとおりの状況だ」

そっけなく海斗は答える。

彼女の名は氷堂ヒヤウドウ。へ

背は秋野より少し低い程度で、裁縫が得意らしい。

胸は秋野よりあるかもしれない。

席は秋野の右隣。つまり重藤の前にあたる。

特徴を挙げるとすれば……。

「どうしたんだ？綾に用か？」

「いや、僕はこの四人で帰りにゲーセンでも行かないかって聞こうと

おもったんだけど、迷惑だったかな？」

そう。氷堂はボクっ娘こだった。

簡単に言えば、一人称が『僕』の女の子だ。

重藤曰く、現存する最後のボクっ娘。

また、秋野と氷堂がこの学校のアイドルらしい。

氷堂は恐る恐る、子犬に触れる。

『ワフッ!』

「あはは」

子犬に夢中になる氷堂に秋野が横からはなす。

「いいね!!行こうよ!雫ちゃん!!!新しいゲーム配備されたら  
しいし!!--」

そこに復活した重藤が加わる。

「その後、俺とあつゝい夜を・・・」

重藤が言い終わる前にフラリと海斗は席から立ち上がり、

「お前は黙ってる！」

「ブハッ！」

ドゴッ！という音がするほどのひじ打ちを叩き込んだ。

こうして四人は放課後ゲーセンに行くことになった。



昼休みにて（後書き）

オリキャラしかない！w

犬の名前がツ！！思い浮かばない！

禁書はさまざまなキャラクターがいるのでかぶらないようあえてボクっ娘を出しました。

・・・ですが！書くのがムズイです・・・。  
後悔してたりしてなかったり・・・。

重藤はなれなれしい感じですね。

ナルシストにまではいたらない感じですよ。

下心が多いだけかとww

## ゲーム 前編

「・・・女子がするゲームじゃねえだろ・・・」

新しく入ったゲームを前にして海斗はつぶやいた。

華やかな色の中、黒い機体が異様な気配を漂わせていた。

そのゲームの内容は迫りくるゾンビを撃ち殺すといった定番のもので、

変わったところはさまざまな銃を選べるといった機能をつけたしただけだ。

かなりリアルで難しいのがうりらしい。

ちなみに、二人プレイだ。

「じゃあ、どう分かれる?」

「ジャンケンでいいんじゃないか」



「僕はあまりこういつの得意じゃあないんだ」

「よし！じゃあ俺がまもってやるぜ！俺の胸に飛び込んできな！」

秋野、海斗、氷堂、重藤の順で言う。

重藤が言い終わると同時に、無言の海斗の蹴りが重藤のこめかみに入る。

「ガッ！！！！痛~~~~~~~~ツツ！！天地iiiiiiii！！！！何しゃがる！！」

目に涙を浮かばせて言う重藤。それを見ながら、

ため息をつく海斗は重藤の後ろに知っている四人を見つめる。

（あれは・・・佐天たちか・・・）

向こうもこっちに気付いたのか、こちらに近づいてきた。

「天地さん！！天地さんたちもこれ目当てですか？」

「ああ、そつだ。お前らもか？」

海斗の問いに白井が髪を手ではらって答える。

「そつなんですの。お姉さまももう少し自身立場にふさわしいことを」

お説教モードに入った白井に御坂が反論する。

「別にいいじゃない。私はそんなじゃないわよ」

御坂が居ることを確認した海斗は一步後ろにさがる。

「ビリビリ……じゃなくて御坂。お前もいたのか」

「……。」

御坂はジト目でこちらを見る。言い切っていれば……。

目的のゲームを確認して、白井が話し出す。

「はっ！、このゲームでお姉さまが怖がってわたくしに抱きついたり……。

そこでかつこよくわたくしがクリアしてそのまま……  
グへへへへ」

あたりがしゅんと静まりかえる。

その空気すらも潰すやつが話し出す。

「おい！！天地！！なんでお前の周りにはこつも女子がいるんだ！！！！」

そして、重藤は佐天を見て近づき、手をとると、

「この後、お茶でもしねえか？そしてその後！二人は恋におちることになるッ！」

「この世から失せる！」

『ワンッ！！！』

海斗はそついうと強烈な回し蹴りを重藤の顔面にくらわせる。

子犬も吠えながら海斗の肩から飛び、重藤の顔面に蹴りを入れる。

「ブバフッ！」

重藤はダウンする。

御坂のほうも……。

「アンタの考えはただもれなのよ黒子お おおおお！……！」

「お姉さまの愛の鞭ですの!?!少…少…強…すぞですの」

御坂の電撃をくらった白井はその場に倒れる。

一瞬のことなので誰も気付かなかったのが幸いだ。

海斗と御坂は同時にため息をつく。

「お互い、変態のつれがあると大変よね」

「…そうだな」

組み分けはジャンケンの結果、

秋野&重藤チーム

佐天&初春チーム

御坂&白井チーム

海斗&氷堂チーム

となった。

ゲームは死んだら交替、どこまでクリアできるか競いあうというルールになった。

続く！かも。

## ゲーム 前編（後書き）

うむ重藤、ポロポロですね。  
書いといてなんです、海斗容赦なと過ぎw

## ゲーム 後編

まずは佐天&初春がゲームに臨んだ。

まず最初に使う銃の種類を選ぶ。

途中でかえられないらしい。

使える偽者の銃もリアリティを追求するために本物と同じ重さ

となっている。ちなみに片方一人でも死ぬと終了だ。

某ゲームと同じくヘッドショットがあるが、かなりあてにくくつくられてる。

ナイフはない。このゲームではそれぞれの銃に弱点が設定されている。

どう選び、使うかでクリアできるかがきまる。

「じゃあ私はこれに！」



「私はこれで・・・」

佐天はショットガン、初春は拳銃を手に取る。

皆が固唾を呑んで二人を見守る中、二人はゲームを始める。

~~~~五分経過~~~~

画面内で初春のほうにゾンビが近づいてくる。

「初春！！！！そいつを倒して！」

「あ、ダメージをくらっちゃいました。あわわわわわわ！！！」

あわてて初春は拳銃を画面に向けて引き金を引くが・・・。

「あああたりません！って！またくらってます！」

「っていつの間にか私もくらってたッ！やばッ！」

そうしている間に二人のライフがどんどん削られていく。

「あわわわわわ」

「え？えええッ！？えッ？」

(・・・かわええ)

あたふたする二人を見て海斗は不覚にもそう思ってしまった。

二人はあっという間にゲームオーバー。

あまり進めなかったようだ。

「次は俺たちの番だあ！」

「フフフフ!! 一気にクリアさせてもらっわよ!!」

重藤と秋野はいつの間にか銃を選んでいる。

重藤はロケットランチャー、秋野はサブマシンガン。

二人とも弾数や隙など考えていないだろう。

「お前ら・・・バカだろツ!」

海斗の叫びにだれも応じなかった。

~~~~二分後~~~~

「うお! そんなところにツ!! 秋野!」

「任せて〜連射〜」

隙が大きい重藤を秋野が補佐する形でゲームが進んでいる。

この調子ならさっきの二人よりは進めそうだが……。

「やばい！弾が切れたよ！」

「まじか秋野！うお！なんかいっぱい敵が出てきた！」

開始二分にして予想以上にダメージをくらう。

見ている皆は思う。

あっ終わったな。と。

「きゃあ！？多すぎるし怖い！」

ビビる秋野に重藤は……。

「よし！今こそ俺の腕に抱きついてこい……！」

相変わらずのようだ……。

海斗の肩にいる子犬は『なんだこいつ。』という呆れ顔をして目を横にやる。

あっさり重藤がライフをうしなってゲームオーバーとなった。

「あゝ残念だなあ」

「秋野この後デートで「もう死ね。「もっ！ゴフッ！」

海斗のパンチが振り返った重藤の腹に入る。

重藤は再びダウンした。

それをよそに好戦的な笑みを浮かべながら御坂と白井は銃を選ぶ。

御坂はマグナムリボルバー、白井はライフルを選ぶ。

一同はそんな二人を見て思った。

（（（（（こいつら、本気だ）））））

黒く異様な空気を放つ機体に御坂と白井はむかう。

「さあいくわよ！黒子お！！」

「はい！お姉さま！」

ため息をついて海斗は首を「キリッ」と鳴らす。

「まじでいいでもいってくれ……」

~~~~~10分後~~~~~

二人はありえないほどのコンビネーションで次々とゾンビを撃ち殺していく。

「黒子お！そっちは頼んだわよ！！！」

「了解ですの！お姉さま！！！」

見ている皆は思わず息を呑む。

とても二人が常盤台中学のお嬢様とは思えない。

どこかの軍人かなにかか・・・そう思ってしまうほどだった。

チラリと海斗は視線を氷堂のほうに向ける。

次が自分ということまで心配しているのか、表情が強張っている。

御坂たちはついにラスボスマでたどりついた。

「黒子。こいつは頭を正確に撃たないとだめみたい！」

「くッ！でもあたりませんわよ！お姉さま！」

そうしてるうちにどんどん二人は押されていく。

「ちょっと！？これむずかしすぎない！！？」

「お姉さま！まずいですわよ！！はッ！しまった！！！」

白井が画面から目をはなした際に白井に強烈な一撃が入り、

勝負がついた。

へ垂れ込む白井を御坂が励ます。

「わたくしのせいだ！」

「黒子のおかげであそこまで進めたんだしさ・・・元気だしなよ」

「お姉さま・・・」

ポンッ！と白井の肩に御坂は手を置く。

かなり感動できる光景のはずだが、理由がゲームというせいでバカバカしく見えてしまう。

おどおどしながら銃を選ぶ氷堂に海斗はサブマシンガンを選んでわ
たす。

「敵がきたら撃ちまくれ。そしてひるませるなりして時間を稼げ、

俺が片っ端から倒してやる。ま、楽しもうぜ」

「わわかった！僕もできるだけがんばるよ！」

海斗は普通の拳銃を選び、手で感覚を確かめる。

「さて、さてと終わらせるか」

「了解」

~~~~~20分後~~~~~

一同はポカンと口を開いていた。

皆がありえないという顔をする。

なにやらギャラリイまで増えてきているようだ。

「~~~~~」

「いまだ!」

鼻歌を歌いながら海斗は氷堂の声と同時に拳銃でゾンビを撃ち殺す。

海斗はいままででの全弾がヘッドショットという脅威の射撃技術を見せていた。

氷堂も楽しくなってきたのか、ノリノリだ。

そんな二人に皆啞然とする。

（（（（（容赦ねえ・・・）））））

そんな内にととうラスボスまできたようだ。

「これで終わりか。楽勝だ。」

「よし頑張るぞ！」

画面の中で激しい戦いが繰り広げられる。

そして・・・。

「クリアか・・・」

「やった！」

ついにクリアしてしまった。

周りからおお！などと感激の聲がもれる。

白井はショックからか、

わたくしとお姉さまのコンビネーションをもってしてもかなわないなんて！

などと叫んでいる。

御坂は当然の疑問を海斗にぶつける。

「なんでそんなにうまいの？」

海斗は頭を指差し、

「この問題だ（・・・本物を扱いなれているからなんて、死んでも言えねえ・・・。）」

「そ、そうなの？」

「そうだ」

内心冷や汗をかきながら海斗は答えた。

こうして海斗は久々の何事もない一日をおくったのであった。





## ゲーム 後編（後書き）

次回、重藤が活躍？



裏の顔(前書き)

自分でもうわわと思いましたww

## 裏の顔

夜、ジャッジメント風紀委員第177支部に固法美偉はいた。

今は彼女以外は帰ったようで、静かだ。

突如、扉が開く。

そして、そこから重藤が入ってきた。

「今は固法先輩だけですか。」

「いや、よかった。先輩、今から夜のデートにでも……」

「なんでここに？私が今一人だと知ってて来たわね」

重藤の言葉を完全に無視し、固法はたずねる。

重藤は近くのソファに腰をかけてポケットからガムを取り出し、口に入れる。

「だからデートに誘いに……」

「いいかげんにして。風紀委員の頂点にしてトップシークレット、

エンペラー  
絶対者がこんなところに何の用？」

重藤を探ろうとする固法に重藤は、

「……ここ最近、活動している組織についての情報をください」

固法はそう言われるとどこからか資料をとりだして読み出す。

「ここ最近活動してる組織は二つ。

スキルアウトと……能力者集団『アイス』ね。

「どちらも厄介だわ」

「後者のほうの活動については？」

「アンチスキル ジャッジメント や警備員への攻撃。」

「また、犯罪者の捕縛など」

「スキルアウトのほうは？」

「能力者への無差別攻撃や強盗など」

「もういいぜ」

そういつと重藤はふうと息を吐く固法にガムを一つ投げ渡す。

(・・・この人だけは何をしたいかさっぱりつかめないわね。

いくつかの事件でも犯人がきっちり反省したって言って罪を消したり、

なかつたことにする時があるし、普段は一般人になりすましているし・・・)

そのようなことを固法が思っている時に重藤は立ち上がる。

そしてバツ！と風紀委員ジャッジメントの腕章を腕につけた。

「久々に働くか。スキルアウトの今のたまり場を教えとく。

あとで警備員に通報しろ」

固法は理解する。重藤は今からスキルアウトを潰しに行く気だと。。。

固法がなにか言う前に重藤は扉をくぐり、手をひらひらさせて

「じゃあ、久々に遊んでくる」

部屋から出て行った。

とある路地裏に氷堂零はいた。

「来たようだね」

氷堂がそう言うと何人かの学生が現れた。

全員の制服は一致しておらず、さまざまな学校の学生達がいることがわかる。

「活動は順調かい？」

氷堂の問いに一人の学生が答える。

「ああッ！風紀委員も俺たちには勝てないようだ。

要注意人物はレベル4のテレポーター白井黒子。

あと、そいつとよく一緒にいる超電磁砲<sup>レベルガン</sup>……。

伝えることはそれだけだぜ、栗さんよ」

手の平で氷を作りそれを地面に落として踏み潰すと、氷堂はつまらなそうにつぶやく。

「……僕が出るのはまだ先になりそうだね」

とある工場跡に重藤はいた。

重藤はスキルアウトのど真ん中に突っ立っていた。

あたりのスキルアウトたちは、なんだてめえ！とかなめてんじゃあねえぞ！

とか言っているが重藤は相変わらずガムをくちやくちやく言わせながらくっっている。

ポケットに手を突っ込んだままだ。



「風紀委員です。以下省略」

ブチッ！という音が複数聞こえた。

一斉にスキルアウトたちが襲い掛かってくる。

重藤の後頭部に一人の男の鉄パイプがヒットした。

死んだか。と誰もが思った。

死んでいないにしても、そうとうな大怪我だろう。

だが、その場にいた全員は驚愕する。

重藤は平気な顔をしてたっている。

さらに血が一滴も流れていない。

いや、正確には鉄パイプが重藤の数ミリ手前で止まっている。

「邪魔」

重藤の言葉とともに周りにいたスキルアウト達が吹き飛ばされた。

スキルアウトの大半は気絶したらしく、さらに意識があるものも立  
てないようだ。

意識のあるうちの一人が問う。

「お、お前、レベル……ルは……いくつだ？」

「知らね」

そう言うと重藤は静かにその場を去った。





## オリキャラ紹介第三弾

### オリキャラ紹介第三弾

しげふじつかさ  
・重藤司

柵川中学二年生。14歳。レベルは不明。身長は171cm。金髪。教室の席は海斗の右隣。

普段はただの学生だが、その正体は風紀委員のトップシークレット、エンペラー『絶対者』。

風紀委員のなかでも、それを知る人はほとんどいない。

白井黒子や初春飾利もその存在すら知らない。

また書庫バンクにも記されていない。

風紀委員の最高権力者。それを利用して事件をもみ消したりするところがある。

だが、もみ消された事件はいずれも一般人のけが人や死者は出ていない。

能力は『テレキネシス念動能力』。

レベルは測っていないため不明だが、実力からしてレベル5に到達している。

本気を出せば、全く動かずに敵を圧倒できる。

このことから、絶対者と呼ばれるようになった。

女子に目がない。

ちなみに、イケメン。

・氷堂雫  
氷堂雫

柵川中学二年生。14歳。レベルも能力も不明。身長163cm。  
教室の席は秋野の右隣で重藤の前。

髪の色は青色で、ショートヘア。裁縫が得意。

スタイルは秋野とあまり変わらない。

一人称を『僕』とする、ボクっ娘<sup>こ</sup>で男子からの人気が高く、

秋野と並んで柵川中学のアイドルと称されている。

秋野と仲がいい。

また、<sup>チャイルドエラー</sup>置き去りだった過去を持つ。

## オリキャラ紹介第三弾（後書き）

重藤の設定、凝ってますねw



## 不穏な動き

昼、海斗は今、アクセラレータ 一方通行と打ち止めと共にいた。ラストオーダー

今日は休日なので、学校はもちろんない。

三人が居る場所は黄泉川のすんでいるマンションの前だ。

海斗は黄泉川に呼び出されて来たため用件は知らない。

「えーっと……どうして俺呼ばれたんだ？後、ミサカワースト番外个体は？」

沈黙を破るように海斗は口を開く。

一方通行はボリボリと頭をかきながらあくびをする。

「アイツなら黄泉川たちという。用件はこのガキからだ」

二人の視線が打ち止めに移る。

「いや、ミサカはその子犬を一週間だけ飼ってみたいと思っただけだよって」

ミサカはミサカはキラキラした目で話しかけてみたり」

『ワン！』

海斗の肩にいる子犬が尻尾をパタパタさせて吠える。

よくわからないという顔をする海斗に一方通行が説明する。

「要するにだ。その子犬を一週間貸してくれっつー話なんだ。

一応、黄泉川の野郎がマンション側から一週間だけ許可を得られたらしいんだ」

なるほど、と海斗は頷く。

「お前はどつなんだ？」

『フフッ……』

『OK!』という意味だと海斗は理解した。

「いいらしいぞ」

「やった〜!! あッ! とところでその子の名前は何て言うの? って!!!  
サカはミサカは

今気付いたことをたずねてみる!」

はッ! となる海斗に一方通行は興味なさそうに呟く。

「まだだっ たみてエだな・・・」

「じゃあ名前をつけるか」

海斗の発言が終わるとともに、打ち止めは目を輝かせて言う。

「じゃあフアラオ!」

海斗は即答する。

「却下」

「じゃあパトラッシュユ！」

「俺は死ぬのかッ!？」

海斗は思う。こいつに決めさせるな!と。

「アホだろテメエ・・・」

呆れたように左手で頭を押さえながら一方通行は言う。

打ち止めはプクッと頬を膨らませる。

「じゃああなたが決めてよ!ってミサカはミサカは憤慨してみる!」

そう言われた一方通行は目を閉じる。

頭の中にふと、飼い主である海斗の刀が思い浮かぶ。

(赤色・・・か)

『クウ~~~~ン!』

ゆっくり考える一方通行に子犬は期待のまなざしを向ける。

「決めたぞ」

目を開けて、一方通行は言う。

「コオ太だ」

「・・・どうして?」

海斗は思ったままのことを口にする。

一方通行は一息ついて説明する。

打ち止めも子犬もかなり真剣な目で一方通行を見ている。

「テメエの刀の色、赤、つまり『紅』に『太』でコオ太だ・・・

どオだ文句ねエだろ」

一同は感激しておお！としか言えない。

海斗は己の左肩に乗っている子犬の頭を撫でる。

「じゃあお前は今日からコウ太な！」

コウ太本人は尻尾を振り回し、かなりご機嫌そうな表情で吠えている。

『ワフツツ！！』

ありがとう！とでも言いたいのだろうか？

そう思いながら海斗はコウ太を打ち止めに手渡す。

「じゃあ俺は帰るぜ！じゃあなコウ太！」

楽しそうにじゃれあつ打ち止めとコウ太を残して、海斗はその場を去った。

上条当麻は道をぶらついていた。人通りが多く、広い道だ。

彼は片手で頭を抑えている。

道行く人々よりも遥かに低いテンションの上条を周りの人々は不思議そうな目で見る。

「・・・不幸だ」

よく見ると服の一部が少しだけ焦げている・・・。

(インデックスにビリビリ……いつもどおりに攻撃しやがって……はぁ……)

ドンッ！

「きゃー！」

「うおっとー!？」

ため息をつく上条の前に頭に花をのせた少女、初春飾利がぶつかる。

息が荒い。急いでいたのか、走っていたらしい。

腕には風紀委員ジャッジメントの腕章をしている。

(白井と同じ、風紀委員か……)

初春は上条に向かってペコリとお辞儀をする。



「す、すいません!」

「い、いやこっちも悪いんだからさ!」

「では、私は急いでるのでッ!」

思わず戸惑う上条を置いて初春はその場を走り去った。

「・・・忙しいのか?」

ポツンと残された上条はそう呟くと足を進めた。

「ん？」

少し進むと道の端に人が集まっていた。

近くの道路がひび割れている。

ビルの窓が割れている。

(なにが！？ッ！)

「うおッッ！……！」

カランッ！と上条の足が何かを踏み、派手に転ぶ。

「なんだこれ？」

起き上がりながら上条は自分の踏んだ物を手で？み、見る。

見覚えのある白い鉄の矢だった。

(こねって!!白井の持っていたやつじゃ!!!!ッッ!!!)

嫌な予感がした上条は人ごみに駆け寄り、押しのけて人ごみの原因にたどり着いた。

上条はその原因の傍まで駆け寄り、声をかける。

「おい!!どうしたんだよ!!!!白井!!」

そこにはボロボロになって倒れている白井黒子がいた。



## 不穏な動き（後書き）

子犬の名前に意見をくださった方々、ありがとうございます。  
おかげでこの名前の土台になりました。

それにしても一方通行、丸くなりすぎですねw

## 白井黒子の頼み

傷だらけの白井を抱き起こして上条は問う。

「おい大丈夫か！？白井！！」

野次馬が多いがそんなこと気にしてられない。

「アナタ・・・が・・・な・・・ん・・・で・・・ここ・・・に？」

上条の呼びかけによるものか、白井は意識を取り戻した。

「何があったんだ？御坂は知ってたのか！？」

「う・・・い・・・はるを」

弱々しい声で何かを言い始める。

それが自分に頼んでいるとすぐに上条は理解した。

「初春を・・・今、追われている初春を・・・助けて欲しいんです  
の・・・」

わたくしのことなら放っておいてくださいです・・・

それよりも・・・」

言おうとしていることを言い切る前に白井は再び意識を失った。

上条は白井の体を見る。

体中に傷を負っていて、人の心配をできる状態ではない。

(・・・バツカ野郎！人の心配してる場合かよッ！)

白井をおいて上条は立ち上がる。

白井の願いに答えるために動こうとする。

白井をこのようにした奴、または奴らだ。一般人なら恐れて何もしないだろう。

だが、上条当麻は違う。どんなことが起きようともただ一人の笑顔を見るために行動する。

彼はそういう人間だ。

上条は意識がない白井に向かい、言う。

「……必ず、助ける。だからお前はここで待ってる！」

そっさい終わると上条は人ごみを押しのけてその場から走り去っていった。



海斗は御坂美琴と共にいた。

両脇に街路樹があり、程よく緑色が視界に入る気持ちや和らぐ道だった。

海斗はため息をついて、御坂をジト目で見る。

「だからさ、なんで俺がお前の人探しを手伝ってるんだ？」

「う、うるさいわね！しょーがないじゃない！」

アイツがまた私との勝負ほったらかしてどっか行っちゃったんだから！」

ほんのり頬を赤く染めて御坂は反論する。

かなりずれている答えに海斗は再びため息をつく。

「だからアイツアイツって言われても誰かわかんねえだろ……」

・・・んでそいつってお前の彼氏か？」

「うにゃあッ！」

顔を真っ赤にして御坂は固まる。

顔から今にも湯気が出そうだ。

海斗は御坂の目の前で手を振るが、御坂は自分の世界に入ってしまったっている。

(今なら逃げられるな・・・)

海斗がそう思っただけで視線を御坂から前方に移すとそこには佐天がいた。

泣いていたのか目元が赤みを帯びている。

佐天は海斗の服を？んだ。

「天地さん御坂さん。固法先輩から聞いたんです・・・白井さんがッ！！初春がッ！」

「「!!!?」」

それを聞いた二人の表情が変わる。

「どっぴいっことだ?」

「二人でパトロールしてたらいきなり襲われたらしくて・・・

白井さんがやられたらしいんです!!

その後一人で逃げている初春に一度だけ私、会っ  
たんです!!

でも・・・はぐれちゃって・・・」

「・・・」

無言になる御坂を見て海斗は初春に電話をかける。

電話の音が鳴り響いた。

初春がその電話に出ることはなかった。

ふと、近くの街路樹の影に学生らしき人影が見えた。

よく周りを見ると、あちこちに人が隠れている。

おそらく佐天も追われていたようだ。

「どつやら囲まれているみたいだな」

海斗がそう呟くとどこからかぞろぞろと学生が出てきた。

（白井を倒しちまうような奴らだ……。さすがにこの数はマズいな……。）

数は20人ほどだが、白井を倒せるといえば話は別だ。

どのような手を使ったかはわからないが、

海斗の能力では強くて多い敵は少々苦手だ。

しかも佐天もいる。

次の瞬間、海斗の横からオレンジ色の光が放たれる。

ドオオンッ！という音とともに前方の敵が吹き飛ばされる。

海斗は横に居る御坂のほうを見た。

御坂は頭から青白い火花を散らせながら敵を見据えている。

「……行きなさい。」

私がこいつらをやるわ・・・後で私も一緒に初春さんを探すから、先に行つて！」

海斗は無言でうなずくと佐天の手を引つ張つて御坂の倒した学生の横を通り過ぎて

その場から去つていった。

残された御坂は電撃の槍を余所見する学生に放つ。

大きい音とともに辺りに砂埃が舞い上がる。

そして、一斉に敵が襲い掛かってくる。

だが、御坂は眉一つ動かさない。

「こつちも我慢の限界なの・・・」

(黒子・・・初春さんは任せて・・・)

あたりを青白い電撃が包み込んだ。







白井黒子の頼み（後書き）

秋野「むむ！！当分出番がない予感！」

作者「落ち着きましょう・・・ね？」

重藤「秋野さん。俺とデートにでも・・・」

海斗「・・・落ち着け。綾」

作者「良い盾発見」

海斗「は？」

作者「秋野さん、これで許して・・・」

海斗「なんで俺を差し出す・・・」

秋野「ふふふ・・・覚悟！」

ピョンッ！

海斗「うおッ!？」

ドタバタ！

重藤「・・・俺は無視か」

奔走する者達（前書き）

サブタイトルのセンスが欲しいです・・・。

## 奔走する者達

とあるビルの最上階に金髪の少年はいた。

風で髪の毛が揺れている。下は今、騒がしいのに対し、

少年の居る場所は静か過ぎるぐらいだった。

少年が地上を見下ろす感じで立っていると懐にある携帯電話が鳴る。

少年はかかってくるのがわかっていたように携帯を取り出し、相手を確認せずに出る。

250

「固法先輩ですか。何です？ついに俺に惚れちゃったんですか？

それでデートのお誘いとか？いや〜うれしいですねー！」「

『・・・今の状況はわかっているわね？』

（初春は技術面で、白井は戦闘面で有名だ。

初春のほうか敵にとって厄介・・・か)

真剣な固法の声があると重藤の表情も真剣な顔になる。

手持ちの情報を集めて状況分析をする。

「ああ、わかってます。」

『ならお願いしたいの・・・』

固法が『何』をお願いしたいかはすぐわかった。

「・・・初春さんは任せてください。」

彼女も白井さんも大切な仲間の一人ですから・・・」

『・・・向こうは貴方を知らないわよ?』

重藤は一息ついてこう答える。

「仲間であるいうことに、知り合いかどうかなんて関係ないですよ」

『……なら貴方に任せるわ』

重藤は携帯を切って、ボタンと閉じるとビルの柵を越えて足場のないほつに

ゆっくり歩く。

「かつこよくサッサと終わらせるか」

そういつと重藤はビルから飛び降りた。

海斗は佐天の手を引いて走っていた。

曲がり角を曲がり、大道りにでた。

目に入ってきた光景に二人は驚いた。

街路樹や外灯が折れ、道路はボロボロ。

火が出ている車もあった。

「なんだよ……これ……」

「暴動……?」

とりあえずけが人が居ないか二人は確認する。

人々は避難したのか、人一人いなかった。

海斗は佐天の手が恐怖におびえているからか、震えているのがわかった。

ぎゅっと佐天の手を握り返す。

「大丈夫だ。佐天」

「天地さん・・・」

（それにしても・・・見る限りかなりの規模の組織だな・・・

・・・そこまで強い動機が全員にあるってことか？）

コシッ

後ろか足音がした。

佐天を庇う形で海斗は振り返り、一歩踏み出す。

「ビュオッ！！」と音がしたかと思うと海斗の体は宙を待っていた。

（な、何が！？）

そのまま近くの折れた街路樹の幹に叩きつけられる。

「ぐっしっ！」



「天地さん!!!」

海斗は駆け寄り佐天を手で制し、ゆっくりと立ち上がる。

「エアロシューター風力使いか……」

「ご名答一発くらっただけでよく見抜けたな……」

海斗を吹き飛ばしたロン毛の男は余裕の笑みで答えた。

(……能力隠すとか言ってるんねえな)

海斗はほんの少し不敵な笑みを見せ、折りたたみ式ナイフを取り出した。

一瞬にして折りたたみ式ナイフが刀に変わった。

海斗は刀の先を敵に向ける。

「ロン毛野郎、てめえが邪魔するなら……斬るまでだ」

上条当麻はさつき初春とぶつかった場所にいた。

さつきより人が少ないことと道がボロボロなこと以外にこれといった違和感はない。

「ん？」

上条は足元に携帯を発見する。

おそらくさつきがぶつかったときに落としたのだろう。

携帯を落としても気付かないほど焦っていたようだ。

「やっぱりあの娘が白井の言っていた奴であってるってことだな・・・」

・  
)

ドオンッ！と近くから大きな爆音がした。

上条はその方向を見る。

(・・・ここから遠くない！行くしかないか)

上条は音のしたほうに走っていった。



奔走する者達（後書き）

重藤「おお！俺カッケエ！！このまま主人公に！」

海斗「させねえよ」

重藤「グハツツ！やったなこの野郎！」

ドガツツ！！バキツツ！！

秋野「くツツ！私だけ出る気配ない！」

番外个体「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！ミサカもだよ」

秋野「おお！仲間発見！！！」

ガシッ！ 握手する音

一方通行「・・・何なんだこいつら・・・」

## 発火能力者

初春飾利は逃げ続けていた。

たくさんの能力者たちからたった一人で。

曲がり角を利用したりしてなんとか追いつかれずにいたが、

自分がもう息を吐いているのか吸っているのかもわからない。

今自分が涙を流しているかもわからない。

限界が近づいていた。

（白井さん、佐天さん、御坂さん・・・私・・・もう）

確実に走る速度が遅くなっていた。

御坂は今、一人の学生と対峙していた。

さっきの敵は全員気絶させてきた。

初春を探していて会ったということは初春もこの近くに居るのだから。

「おとなしくそこを退きなさい！！！」

「いやなこつた！おれちゃあもう引き返せない！」

それにお前みたいなのは嫌いなんだ！」

敵の耳にピアスをした男が手の平から炎を出して御坂に向かって放つ。

御坂は電撃を放ち、それを防ぐ。

辺りに電撃と炎が飛び散る。

「今度はこっちからよー!!」

御坂はそう言つとポケットから一枚のコインを取り出す。

「お見通しだ!」

男はそう言つと炎の壁を作り出す。

(何よ。そんな薄い壁……こいつにかなうわけがないわ!!!!)

御坂は超電磁砲レールガンを放つた。

音速の三倍で飛ばされたコインは炎の壁を突き破り、男にヒットした。

轟音とともにあたりに砂埃が舞う。



ポオツ!!という音がしたと同時に砂埃の中から炎が御坂に向って一直線に放たれた。

「ツツ!!!!」

(.....蜃気楼でかわしてツ!?)

御坂かろうじて反応し、横に転がりかわす。

御坂を狙っていた炎はそのまま御坂の後ろにあった外灯の柱に当たる。

外灯はその熱に耐え切れず折れ曲がり、御坂の上に倒れてくる。

御坂は磁力を操り、ひび割れたアスファルトの間から大量の砂鉄を出した。

御坂はその砂鉄を振動させてチェインソーのようにし、倒れてきた

外灯を斬った。

御坂が顔を上げると男がすぐそこまで近づいてきて、炎を放ったところだった。

御坂も電撃を放ち、応戦する。

青と赤の火花が飛び散る。

御坂は電撃を放ちながら叫ぶ。

「アンタたちは絶対に許さない！」

炎を放ちながら、男は顔に血管を浮かべて叫ぶ。

「お前みたいなのは大嫌いなんだよ！！！」

自分のクローン見殺しにしといて！

「!」  
奇麗事吐きながら、のうのう生きてんじゃあねえよ!!!

「なッッ!!!!!!!」

御坂の電撃が弱くなり、炎が徐々に押し始める。

ショックを受けたのか御坂は目を見開いて驚いている。

直後、御坂の放っていた電撃が消えた。

「た。  
ショックで電撃を放つことを無意識に止めてしまったのだっ  
た。」

（しまッッ!!!!!）

御坂が我に返ると炎が目前まで迫っていた。

「終わりだああああ」

男の声が響く。

御坂はどうすることも出来ず、目を閉じた。

何かを打ち消す音が鳴り響いた。

炎は御坂を飲み込む直前で突然消滅した。

「・・・奇麗事でもいいじゃねえか」

聞き覚えのある声が聞こえる。

御坂がおそろおそろ目を開けるとそこにはツンツン頭の少年がいた。

男のほうは困惑した様子でいる。

「ビリビリがのうのうと生きてる・・・だと？」

上条は右手で拳を作り、怒りに満ちた声で言う。

「なら　　まずはそのふざけた幻想を、ぶち殺す!！」



発火能力者（後書き）

今更だけど、上条ださなきや良かったと思っています。

上条「なんで!？」

書き辛くて、駄文になりやすいからです

海斗「・・・」

## VS風力使い

二人の戦いを見ていた佐天はただ見ていることしか出来なかった。

二人の攻撃がぶつかり合うたびに、辺りを烈風が駆け巡る。

しかし、佐天のいるところにはなぜか攻撃が来なかった。

(ど、どうして私のところには攻撃が来ないの?)

佐天の疑問はすぐ解けた。

佐天に向ってきたガラスの破片が海斗の放った業火によって消し飛ぶ。

海斗は佐天を守りながら戦っていた。

それを見たロン毛の男が叫ぶ。

「戦いの最中に、余所見してんじゃねええ!」



ゴオツツ！！という音とともに何か放たれる。

相手が何かを放った瞬間に海斗は刀を振るい、斬撃を放つ。

二人の攻撃がちょうど二人の間でぶつかり、ガキィツツ！！という音が鳴り響く。

攻撃の余波が二人の頬をかすり、微量の血が頬を伝う。

その血を海斗は左手で血を拭う。

「斬撃なんかも作り出せるのか・・・」

「当たり前だ」

ロン毛の男はそっぴいながら手を振った。

(ツッ！)

海斗は前に転がり斬撃を避ける。

空を切った斬撃が海斗の後ろのビルに衝突する。

(・・・接近戦に持ち込む！)

コンクリートの破片が飛び散る中、海斗は足を止めず相手のいるほうに走る。

「やけにでもなっただか!!」

ロン毛の男は烈風を放つが、海斗の放った烈風とぶつかり、相殺する。

攻撃の余波により、辺りが砂埃で見えなくなった。

(野郎はどこだ!? ツツ!?)

辺りを見回すロン毛の男の前に突如、海斗が現れた。

海斗は刀を振るうが、ロン毛の男にあたる数センチ手前でとまる。

ガキイインツツ！と刃がきりつけあう音があたりに響いた。

「チイッツ！！さしずめ風の刃つてとこか！！」

「すごいすごいいつも一発で見抜くとは・・・」

舌打ちする海斗に対し、ロン毛の男は余裕の笑みで見えない何かを持っている。

「隙だらけだぜ？」

ロン毛の男はあいたほうの手の平に小さな竜巻を作り出し、海斗に放った。

「がッ！！」

海斗は竜巻に吹き飛ばされ、ロン毛の男からおよそ10メートル先に転がった。

「王手だ」

ロン毛の男がそう言った瞬間、海斗を包み込むように四方から竜巻が襲い掛かった。

地面が砕けると共に、轟音が鳴り響いた。

「嘘だろ？」

海斗の無事な姿を見て、ロン毛の男は目を疑った。

竜巻は当たったはずなのになぜ？そんな顔をする男に海斗は言う。

「当たってねえよ」

「じゃあ何をしたッ!？」

「テムエの演算式を理解して、こっちから干渉することで軌道を逸らした。」

「それだけだ」

言い終わると海斗はロン毛の男に向かって走り出す。

それに対し、ロン毛の男は大きな一本の竜巻を作り出し、海斗に向けて放った。

海斗は刀を突くように突き出すと竜巻が刀の切先に触れた瞬間、刀を右に振った。

刀についていくように竜巻の軌道がずれる。

「ば、ばかなッッ!?!」

男は急いで風で武器を作ろうとするが、もう海斗は目前に迫っていた。

「  
チエックメイトだ」

海斗はわざと刀をロン毛の男に当てないように振るい、その刀身から烈風を生み出した。

ロン毛の男はなすすべもなく吹き飛ばされてビルの壁に衝突した。

強引に起き上がると男は自分に言い聞かせるように叫ぶ。

今までで溜まりきった感情がふきでたのだらう。

「あんな・・・研究なんか黙認している学園都市をッッ・・・

許せねえ・・・見過ごす風紀委員も警備員もッ!!  
ジャッジメント  
アンチスキル

……  
……学園都市のすべてを潰すまではッ  
ッッ……!!」

すべてを言い終える前にロン毛の男は意識を失った。

言い終える前でも意味を理解するのは簡単だった。

「まさか……この人達って春上さんと同じような過去を持っているんじゃないか……」

海斗に駆け寄りながら佐天はそう呟いた。

海斗は倒れている男から視線を離さずに返答する。

「ああ、おそらくそれで間違いないな」

そう言いながら海斗はロン毛の男の胸ポケットからストラップらしきもの

が出ていることに気付いた。

ロン毛の男の胸ポケットから携帯を出し、電話帳を開き、敵の数を

把握しようとする。

思ったより大きい組織なのか、『幹部』というリストまであった。携帯のカーソルを動かし、名前を見ていく。

ふと、海斗の目がある名前を見て止まる。

(嘘………だろ!?)

リーダー：氷堂雫

海斗の頭の中で、先ほどのロン毛の男の言葉が繰り返される。

(まさか、氷堂も過去になにかあったんじゃないか……)

急に海斗の心にある一つの思いがこみ上げてくる。

彼らを助けたい。と。



(罪悪感からそう思ってるのかもしれねえ……)

だけど……見捨てられねえ……)

海斗は佐天の肩をポンツ！と叩く。

「行くぞ佐天。さっさと初春見つけて、この騒ぎを止めに」

「はいッッ……！」

海斗と佐天は再び走り出した。



## VS 風力使い（後書き）

佐天が居なければ海斗はロン毛を斬っていたでしょうw  
殺しはしないと思うのですが・・・。

発火能力者2（前書き）

ハイパー駄文W

## 発火能力者2

上条当麻は発火能力パイロキネシスの男と戦っていた。

上条は飛ばされてくる炎を打ち消しながら男のもとに突っ込んでいた。

あたりの車やビルが炎を上げて燃えている。

人がいないことが唯一にして最大の救いだった。

雄叫びを上げながら上条は突っ込む。

「うおおおおおおおー!!」

「これならどうだ!!!!」

男は炎を繰り出すが上条当麻の右手の幻想殺しイマジンブレイカーによって打ち消される。

さらに男は炎を繰り出すが、上条は横に飛びかわす。

そして上条は一気に男に近づき右手で拳を作り、男の顔面を殴る。

ドゴッッ！…という鈍い音が響きわたる。

「ッッ！…！」

男はよろめきながら後ろに下がり、言い放つ。

「お前は何なんだよッ！…？俺たちの復讐の邪魔すんじゃないやあねえよ  
！…！！！！！！

そいつは一万人以上の妹達シスターズを見殺しにした！！

どうせ、もう忘れたんだろうけどなあ！！！！」

二人を囲むように炎が燃えている。

おそろしく



えええ!!」

己のなかにある感情を全て吐き出すように、

すさまじい程大きい炎を上条に多いかぶせるように放った。視界を赤一色が覆う。

炎の壁に穴が開いたかと思うとそこから上条が現れ、男に向かって一気に踏み込む。

男は動揺して全く反応できない。

「テメエもいかげんその幻想を振りほどいてきやがれ!!!!」

ドガッ!!という轟音と共に男は殴り飛ばされ、意識を失った。

「なんで・・・アンタがここにいんのよ・・・」



座り込んでいる御坂が搾り出すような声で問う。

上条は所々やけどを負っている。制服もボロボロだ。

上条がなにか答えようとする前に御坂が突然キョトンとした顔で声を漏らす。

御坂の視界に頭に花を乗せた少女が写ったからだった。

「う、初春さんッッ！！！！??」

御坂の叫び声を聞き、反射的に御坂の向いている方向を見る。

そこには大量の敵に追われている初春飾利の姿があった。

「はあっはあっはあっ！！！！！！！！」

少しずつだがこちらに向ってくる。

初春のあの疲れきった様子からしてずっとおわれていることがわかった。

上条は自分の右手をみた後、御坂のほうを向き、口を開く。

「行くぞ。まだ動けるか？ビリビリ！」

「ビリビリじゃない！御坂美琴！」

不適な笑みを浮かべて御坂は立ち上がる。

二人は走って初春のすぐ近くまできた。

初春は走るのに夢中で御坂たちに気付いていない。

突如、あと数十メートルで合流できるといつとときにビルが崩れて、倒れてきた。

幸い、三人の誰にもあたらなかったが、初春と御坂たちを綺麗に分断してしまった。

「くそ！これじゃあ合流できない！！」

悔しがる上条をよそに、御坂はあたりを見回す。

「……どうやらこれは計算の内らしいわよ」

そろそろ敵が上条と御坂を囲むように現れる。

「やるしかない！」

上条と御坂は敵の集団に突っ込んでいった。

初春は逃げ続けている。

なぜかボロボロになっている道路を通りすぎて、もう2分ほどだ。

(もう………)

ついに初春は立ち止まってしまった。

そこに敵の空力エアロハンド使用によって、道端においてあったワゴン車が飛ばされてくる。

初春は無理に動こうとして転んだ。

そして四つんばいの姿勢になって飛んでくるワゴン車を見つめることしかできなかった。

次の瞬間、ぐちゃぐちゃになっている自分の姿が想像できた。

だが、どこから飛ばされてきた他のワゴン車が初春に向って飛ばされたワゴン車にぶつかり、

轟音を上げて爆発した。

炎を上げながら二台のワゴン車が初春の10メートル手前に落ちる。

（な、何が？）

初春はあたりを見回す。

初春を追っていた敵はいつの間にか倒されたのか、全員のびている。

（何が起きたんですか？）

疑問でいっぱいになる初春は

スクラップと化した2台のワゴン車の上に金髪の少年を見つける。

この人は昨日の・・・と初春が考え始めた時に少年は口を開いた。

「初春さん。怪我はないな？」

重藤司が初春飾利と合流した。



## 反撃の狼煙

氷堂隼は携帯電話で誰かと話しながら歩いていた。

落ち着いた様子で話している。

『……どういつわけか、我々が動き出す前に

人々が全員、ジャケット風紀委員によって避難させられたようです』

「つまり、今街中に居るのは風紀委員かその関係者以外いないんだね？」

青色の髪を風になびかせながら氷堂は言う。

『はい』

「しかし、風紀委員の誰がそんな命令を？」

電話の相手は悔しそうな声になる。



『わかりません・・・固法美偉に誰かが命令したことまでしか・・・』

「・・・力づくで潰そう。僕も出るよ」

『まさか・・・雫さんが!?!?』

氷堂はかすかに微笑む。

「標的を変える。今その辺りにいる全員を叩き潰せ」

『了解』

携帯を切り、ボタンと閉じると一瞬どこかむなしそうな顔をして氷堂は呟く。

「正体不明の風紀委員・・・か」

初春と重藤は一緒に歩いていった。

初春が重藤の顔を覗き込む。

「あの～あなたってもしかして昨日の天地さんのお友達ですか？」

「ああそつだよ。俺は重藤司！どうしたんだ？俺に惚れたのか？」

お持ち帰りしたいが、生憎ここがもうちよい発達してからに  
するぜ」

余計なことを言い、チョンツと初春の胸をつつく重藤に初春は

顔を真っ赤にして重藤を両手でポカポカと叩く。

「へッ！？ ななななな何言ってるんですかッ！！ 止めてください！！！！」

重藤は初春の攻撃から腕を盾代わりにして防ぎながら、言う。

「ようやく元気になったみたいだな！ 良かった良かった！

結構心配してたんだぜ・・・無事で良かった」

その言葉を聞き、思わず初春の顔がさらに赤くなる。

「ふえ！？」

しかし、そこで終わらないのが彼だ。

「さうて今から夕方までデートして、その後二人であつい夜を・・・

「いい加減にしてくださいッ！！」

初春の振った腕が、偶然にも重藤のこめかみにヒットした。

「痛ッッ！！！！」

「あわわッ！？ごめんなさい！！！」

ブルルルッと電話のなる音がした。

「俺のだ・・・ちょっとそこにいてくれ初春さん」

重藤はそういつて初春から2メートルほど離れ、彼女に背を向けて電話をとる。

初春に聞こえないように小さな声で話し始める。

「固法先輩ですか・・・こっちは初春と合流しました」

『こちらこそ礼を言っわ』

一旦話を区切り、重藤は坦々と続ける。

「強引な避難誘導、協力ありがとうございます。」

おかげで第三者でのけが人はいません。

そっちにいる風紀委員全員に出動許可をします。

避難地から半径300メートル以内にいるの敵に奇襲をかけてください。

それがまだこっちに来ていない敵の残りの援軍です。

それも終わったら、今から送るGPSコードの場所にいる御坂さん達の援護に。

忙しくなると思いますが、よろしく願いします。」

重藤はピロン という音とともにGPSコードを送る。

そして重藤は再び電話を耳に当てる。

『わかったわ。皆に伝えておくわ。そっちも気をつけて・・・』

重藤は最後にこう答える。

「今から、初春さんとのいちゃいちゃタイムです。」安心を」

『……』

ブツッ！と電話が切られた。

その音にビクツとするように重藤は携帯から顔を遠ざける。

ゆっくりと携帯を閉じて、重藤は初春のもとにかけよる。

(……さて、反撃開始だ)

そう考えた重藤たちの周りをいつの間にか10人程の能力者たちが  
囲んでいた。

「まだ居るんですか!?!」

「俺は平和主義者ですよーみなさん」

能力者たちは一斉にそれぞれ炎や水や物や電撃や竜巻を繰り出してくる。

だが、重藤が左腕を払うように振るうと攻撃は全て強引にかき消された。

目を見開く初春をよそに重藤は告げる。

「身の程を知っとけ」

スツツ！と重藤が右手を右に払うように振るうとすさまじい衝撃が発生し、

敵が全員右に突き飛ばされた。

敵がビルの壁にぶつかり、

ズドドオオンツ！という音とともにビルが崩れ落ちた。

「大丈夫なんですか？」

敵のことを心配したのか初春が重藤に恐る恐る尋ねる。

キョトンとした顔で重藤はこう答える。

「能力を使って気絶させただけだ・・・。

全員死なないように調節するのに苦労したけどね」

敵の上に降ってきた瓦礫は全て細かく砕かれていた。

初春は崩れ落ちたビルを見て、苦笑いしか出来なかった。





反撃の狼煙（後書き）

重藤強すぎですねw

## 瞬間凍結

海斗は佐天とともにかけていた。

ボロボロになった道路をひたすら走っている。

海斗は能力を解除せず、片手で刀を持って進んでいた。

二人は交差点のような場所に差し掛かった。

まだここでは何も起きていないのか、地面も外灯も何もかもが無傷だった。

先ほどまでの場所から切り離されたように平和だった。

そんないつもとどおりの風景の中に青色のショートヘアに少し小柄な少女が立っていた。

二人が少女　　氷堂を見て足を止めると氷堂はこちらに視線を移した。

海斗は佐天の前に2、3歩踏み出すと氷堂を見つめる。

「……お前がリーダーなのかよ？……………氷堂！」

「そつだよ」

あっさり氷堂は答えた。

そして彼女は海斗の持っている赤い刀を見て目を細める。

「天地……まさか君が噂の解析不能だレットフレイトと思わなかったよ」

「……何があつた？」

海斗の問いに氷堂は答えない。

「……ということは君も元研究者か……それもエリートキョウト」

坦々と背筋がゾツとするような迫力で氷堂は海斗の秘密を告げている。

佐天は何を言っているか理解できずにいた。

(なんで天地さんの友達が・・・リーダー?)

話からかなり遅れている疑問を佐天が抱える中、海斗は佐天を手で制し、さらに氷堂に歩み寄る。

「それを知っているってことは、いくつか研究所を壊したんだろ？」

その調子じゃあ3個ってとこか……。俺も復讐対象になるのか？」

「そつだよ。君の一族をメインに狙おうと思ってるんだ。もちろん、君もだ」

氷堂は小悪魔、いや、悪魔のような笑みを浮かべた。

「ところで何で君はここに来たんだい？」

突然の氷堂の質問に不適な笑みを浮かべて海斗は刀を構えた。

「友達を助けに……だ」

そう言っつて海斗は氷堂に向って走り出した。

海斗は踏み出した足元に違和感を感じた。

次の瞬間、突如海斗の喉元目掛けて凍りの針が地面から突き出した。

「氷ツツ!!!!?」

海斗は踏み込んでいる右足に強引に力を入れて飛ぶ。

海斗の首を氷が掠る。

(いきなりかよ)

左にこけながら海斗は刀を振るい、炎を放つ。

「この程度かい？」

炎が氷堂にあたる直前に氷堂の目の前に氷の壁が現れた。

ジュワツツ！！と氷の解ける音がした。

一気に辺りに湯気が辺りを覆う。

体勢を立て直し、氷堂のいる場所を探ろうとキョロキョロしている海斗の後ろから急に声が聞こえた。

「僕の空中の水分や気体すらも凍らせることも出来る」

パキツツ！と何かが凍る音が海斗の頭上からした。

つらら・・・と言えば日常的なイメージがあるが、海斗の頭上に現れたつららは凄まじく尖っていた。

数は5つほどだった。

顔を上げると同時に海斗は刀を振り、炎を繰り出す。

炎を突き破って一つの凶器と化したつららが海斗の左肩に刺さる。

「ツツがあツ！…！」

肩から真つ赤な血が噴出す。左手が痛みで麻痺するのがわかった。

よろけながらも海斗は烈風を放ち、視界を晴らす。

そこに氷で作られた剣を両手で持った氷堂が海斗に斬りかかった。

ガキイイツン！！と辺りに高い音が響く。

海斗は何度も振り下ろされる剣を簡単に刀で受け止め、氷堂を蹴り飛ばし、距離をとる。

次の瞬間、海斗の右腕を吹雪のようなものが襲う。

。パキリッ！と海斗の右手首から刀の切先までが凍った。



（なんだよツツ！？演算式が複雑すぎる！）

それにこの能力・・・まさか！

海斗は氷堂の能力を見てハッ！とした顔になる。

それを見た氷堂は目を細めて詰まらなさそうに呟く。

「・・・そう、僕は『木原』によって生み出された能力者・・・」

「瞬間凍結フリーズ・・・異例にして圧倒的な能力

・・・手加減してたのか？」

氷堂の言葉に海斗は冷や汗をかきながら返す。

彼も木原一族だ。故に目の前にいる氷堂の恐ろしさがわかる。

氷堂は短く青い髪を軽く払うとため息をついた。

「ここからはもう手加減できないよ」

その言葉がいい終わるとともに氷堂はサッと手を振った。

一瞬の内に辺りの道路のアスファルトの表面を氷が覆った。

海斗は辺りを見回した。

少し離れている佐天までは届いていない。

ガッツ！！という音とともに氷堂の後ろに氷の波のようなものが現れた。

かなり大きい上に、所々に氷の刃が組み込まれている。

あれをくらえば、死ぬだろう。

そう思い、海斗は足を動かそうとするが、足がアスファルトとともに

に凍っていて動かせない。

(マズい!!!!!!最悪の状況だ!)

刀も足も凍り付いて何も出来ない。

足掻こうとする海斗を見て、別れの一言のように言い放つ。

「……君が何のために戦っていたかは知らないけど……」

とどめだよ。さようなら……天地」

(ちくしょう!このままじゃあ初春や氷堂を救うこともツツ!)

氷の波が海斗を飲み込んだ。



## 佳境へ

二人が戦っている交差点から少し離れた所に風紀委員たちと

ジャンジメント

上条当麻と御坂美琴はいた。

固法美偉もともにいる。全員服が汚れていて何かあったということ  
は誰にでも理解できた。

近くで手錠をかけられたためか、御坂はおとなしくしている敵を見て

「助かりました固法先輩。助けに来てくれなかったらやられてた  
と思います」

「お礼をいうのはこつちよ。あなたたちがいなければもっと苦戦し  
てたでしょうし……」

「今のところ、初春さんは無事なんですか!？」

御坂が焦った様に言う。

それに対し、固法は肩の力を抜いて

「大丈夫。私の知人が助けたって連絡がきたから」

「敵はこんなにいるんだろ？そいつ一人で大丈夫なのかよ？」

横から上条が会話に割り込んでくる。

御坂もそれに同意したように頷く。

「そうですよ。いくら強かったとしても・・・」

固法は安心しなさいと言いたげな顔で返す。

「大丈夫よ」

そう言って二人の後ろを指差す。

上条と御坂が振り返ると、そこには初春と重藤がいた。

「初春さん！！！！」

初春の無事を確認して目に涙をためて御坂は駆け寄る。

「御坂さんっ！！ふええええええん」

泣きじゃくりながら初春も御坂に駆け寄る。

お互いの無事を確認して喜んでいる二人を見て上条は微笑む。

「・・・ところで」

上条は初春とともに来た人物に礼を言おうと辺りを見回すが、もうそこにはいなかった。

「あれ？」

固法もどこかにいったようだ。

風紀委員の集団にでもまぎれたのだろうか？そう思いながら上条は再び視線を二人に戻した。

「……まあ、いいか」

上条たちから少し離れた路地裏の入り口に重藤と固法はいた。

地面が少しぬかるんでいるがそんなこと気にしない。

壁にもたれかかりながら重藤は口を開く。

「ここからすぐ近くの交差点にこの組織のリーダーがいます」

「捕まえろというの？」

固法の質問に対し、重藤は手をひらひらさせぬ。



「逆です。誰も手を近づかないように言ってください」

「なぜ？まさか、あなたが一人で行くというの？」

「俺も行きません。あいつを救える可能性があるのは、今戦ってる人物だけです」

わかったわ。と言いながら固法は初春たちのもとに向った。

いままで我慢していたのだろう。初春のもとに一直線に走っていく。

その光景を見ながら、重藤は俯く。

(氷堂さんを救えるのは、お前しかいない。頼むぞ、天地！！！)

迫りくる氷に海斗は何も出来ずにいた。

（ちくしょう！俺が力不足だから！！！！）

彼の体の奥から、何かが出てこようとする。

テレスティーナ戦の時と同じような感覚。

(力が！でもアレじゃあ氷堂を殺しちまう！！！だが、力がないと  
！！！！！！！！)

彼の中で破壊衝動が彼を駆り立てる。

(力が！・・・チカラが！！・・・全てを破壊するためにか？・・・  
・違う！！！！！！！！)

破壊衝動を強引に押さえ込み、奥歯をかみ締める。

(破壊のためじゃあねえ！！！！！)

たった一人の人間を助けられるだ

けのチカラを！！！！)

刀を強く握り締め、迫りくる氷を睨み、空に向って雄叫びを上げた。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおオオオオオオオオ  
！！！！！！！！！！」

いた。

氷と海斗の距離が0になった瞬間、あたりに轟音が鳴り響

佳境へ（後書き）

重藤が主人公の小説を書こうかなとかたまに思いますW  
でも自信とやる気が出ないので書きませんがW W

赤と青（前書き）

なんかちよつと急ぎ足ですね・・・すみません。

## 赤と青

氷堂には何が起きたかわけがわからなかった。

砂埃が晴れた中から現れた海斗は生きていた。

彼の足元はボロボロになっている。

しかし彼自身は体の所々に氷による切り傷があり、血まみれだが致命傷すら負ってはいない。

そして、彼の持っている刀の刀身は明るい赤い光を纏っていた。

彼の瞳も赤く染まっている。

さっきまでの彼の雰囲気と比べると、同じ人物とは全く思えない。

「これならッ！！！！」

氷堂は海斗がなにかしらアクションを起こす前に海斗の足元に氷の針を出現させた。



それで海斗が串刺しになる……はずだった。

「いくぜ……氷堂」

そう呟いて海斗が駆け出したかと思うと、人では到底出せないスピードで走ってきた。

当然、氷があたるはずがない。

「それで僕に勝つつもりかな？」

氷堂はどう演算したのか、氷で大きな翼を作り、海斗に叩きつける。

海斗は迫りくる氷の翼に向かって刀を振るった。

高い音とともに氷の翼が真っ二つに切り裂かれる。

「なんで……」

傷だらけの体で突っ込んでくる海斗を見て、氷堂は口を開く。

「殺されるよ！なんでそこまで抵抗するんだ！？自分の命がそんなに大事か！！！！！！」

氷堂はそっぴいながら風を生み出し、その風によって海斗に突っ込む。

氷堂は先ほどの吹雪を作り出し氷の剣に纏わせた。

それにより氷堂の剣が青白い光を放つ。

海斗はそれに対し、刀身を纏っている赤い光を大きくして刀を振りかぶりボロボロの地面を蹴った。

「こんな命、いくらでもくれてやる！！！！」

「ただ俺は！！お前を！！友達を！！！！！！見捨てたくねえんだ！！！！！！！！」

「奇麗事ばかり言うなよ！……僕にはもう！……戻る場所もない！  
……………」

二人は叫びながら手にしている武器を振り下ろした。

赤と青、二つの光が轟音とともに空中で衝突した

二人を中心に爆発が起き、交差点のアスファルトがめくれあがる。

氷堂の持っていた剣が砕け、

海斗の使っていた刀は光を失ったあと、

能力が解除されたのか、ただのナイフに戻り、そしてそのナイフは粉々に砕けた。

二人はぶつかった場所からそれぞれ5メートルほど吹き飛び転げ落ちた。

氷堂はすぐに立ち上がり、吹雪を海斗に向かって放つ。

海斗はとっさに立ち上がり、姿勢を低くしたまま走り、奇的に吹雪を回避した。

「なッッ!!」

そのまま氷堂の元にたどり着く。

「この一発で、目を覚ましやがれ！……！！！」

氷堂の顔面を海斗の拳が捉えた。

「ぐッ！！！」

氷堂は2、3メートル殴り飛ばされた。

起き上がり、座り込む氷堂の前に海斗が駆け寄る。

「……殺してくれよ……」

「は？」

下を向き、目から涙を流しながら氷堂は海斗に頼む。

わけのわからないという顔で海斗は対応する。

「なぜそんなことを？」

「君達を襲った僕にはもう・・・帰る場所もない・・・だから・・・」

海斗は氷堂の前に屈みこみ、くしゃツと右手で氷堂の青い髪の上から頭を撫でたかと思うと、

自分の胸に氷堂の頭をもっていった。そしてニコツと笑って言う。

「なぐに考えてんだお前？俺たちは友達だろ？秋野もあの変態も、誰もお前を責めねえよ」

「ツツ！！！！！うあああああ」

氷堂はどこか吹っ切れたように海斗の胸で泣き喚く。

その姿はもう、一つの組織のリーダーではなく、一人の弱い少女に戻っていた。

泣いている氷堂を見て海斗はホツとしたように息をはいた。

そこへ、

「海斗お〜くなあ〜にしてるのかな〜？」

後ろから非常に聞きなれた声が聞こえ、ビクッ！と海斗は体を動かした。

「綾！？・・・に佐天！」

彼の後ろには不機嫌そうな佐天と顔は笑っているが、黒いオーラを放っている秋野がいた。

「心配して風紀委員ジャッジメンを押しつけてここまで来たら・・・

「オチちゃんといちゃいちゃしてるとはね・・・別に怒ってないよ。」

「どこをどう見ればいちゃいちゃしているように見えるのだから?と海斗は思いながら言い返す。

「絶対怒ってるだろ!？」

「怒ってないよ〜ね?佐天ちゃん?」

「・・・怒ってません」

「いや、絶対怒ってる!！」

そう確信した海斗は逃げようとするが、氷堂が海斗の服をつかんでいる為動けなかった。

冷汗を流す海斗にギリギリと二人は近づいてくる。



「ちょっとプロレスの技の練習しよ？佐天ちゃん」

「了解しました」

「ちょっとまてお前ら！！俺はけが人だ！！」

「「問答無用！」」

（なんで俺がこんな目に

！？）

広い空間に海斗の悲鳴が響き渡った。

海斗たちを影から見守っている影が二つあった。

重藤と固法だ。

重藤は愉快そうな顔をして固法に向かって言う。

「あの集団を解放してあげてください」

「まさか・・・」

固法は顔を強張らせる。

「そうですねよ。あの集団もかなり罪の意識がありましたし、しっかり反省しています。」

「だから、今回の件は不問とします」

「……はあ、あなたは相変わらずだね……」

頭を抑えてため息をつく固法をよそに重藤は

騒ぐ海斗たちを見て呟いた。

「……一件落着だな」

重藤は海斗たちのもとに向って歩き出した。

5人になった後、いつものやりとりがあったのは言うまでもない。

能力者集團編  
~~~~~  
完
~~~~~

赤と青（後書き）

~~~~海斗の新能力について~~~~

本来の力が漏れ出したもの。

本来の力は、あたりの重力も操れるようになるが、

漏れ出した力は『自身と身に着けている物や持っている物』にしか使えない。

海斗は自身にかかる重力を操作して高速で動くことを可能にした。

応用すれば、ビルの側面に立つことも出来る。

一日に使える時間が決まっている。

雑貨稼業

あれから一週間たった。

あるビルの一室に海斗はいた。

ここは雑貨稼業デパートといい、簡単に言えば、非合法なものを全て扱う店だ。

その店で海斗はソファに座って折りたたみ式ナイフを手でいじっている。

部屋には観葉植物や水槽といった普通のものもあるが趣味の悪そうな奇抜な色の家具や、

さまざまな銃や剣や刀、しまいには手榴弾といった物まである。

「さてさて、なんのご用件でございますでしょうか？」

見た目からして20代の男が海斗の前のテーブルにコーヒーをおいた。

「いらねえよ」

海斗は首を横にふる。

「なにがお望みでしょうか？」

ニコニコと営業スマイルで男が話しかけてくる。

「とりあえずここは何が売りなんだ？」

海斗はつまらなそうに男に尋ねる。

男はただのセールスマンのようにスラスラと答えていく。

「この売りはいい隠れ家がたくさんあることと、売春のほうですかね？」

あつちのほうにいる娘なんか、つい昨日入った瞬間、買い手が決まった上玉なんですよ」

そついいながら水槽の近くの壁を指差す。

壁には海斗とおそらく同じ年齢と思える黒髪に長髪の少女がぐったりと壁にもたれかかっていた。

両手首、両足首に鉄製のおもりをつけられている。

「飯はあげてんのか？」

「はい。かなり気を使っていい物を食べさせてます」

じゃあと海斗は少女を指差して言う。

「なんであんなに衰弱してるんだ？」

「昨日、買い手が決まった瞬間からずっと泣き叫んでいましたからね・・・精神的なものでしょう」

「ふん」

海斗は興味なさそうに視線を再び男のほうに向ける。

「そういえば、ここってどこかから支援を受けてたりするの？」

「はい。ある研究所からです。かなりの額をいただいていますし、権力なんかでも守ってもらってるんですよ」

「話を変えるが、こいつを少し見てくんねえか？調子が悪いんだ」

海斗はカタンツと懐からだした拳銃をテーブルに置いた。

「ちょっと拝見させてもらいますね」

そう言って男が拳銃を手にとろうと右手を伸ばす。

スツツ！という軽い音がしたかと思うと、男の右腕の肘から下が切り落とされた。

「ぎいやあああああああああ！……！」

男の右腕から赤い鮮血が噴出し、床を赤く染めていく。

男はあまりの痛みに床を転がり回る。

その男の左手首を赤い刀が貫き、床と男の左手を縫いとめた。

男の両腕から赤黒い血が留まることなくあふれ出す。

「おっと・・・手がすべった」

表情を変えず、海斗は刀から手を離す。

「お前がさっき言ってた研究所、つい1時間前に潰されたらしいぜ」

「ひいッッ！お、お願いだッッ！見逃してくれッッ！……！
金ならいくらでもやるからッッ！……！」

動けずにいる男は今にも泣き出しそうな顔で必死に命乞いする。

海斗はため息をついてテーブルにおいた拳銃を手取る。

拳銃の銃口を地面にはいつくばっている男に向ける。

「か、金ならいくらでもやるからッッ！！助け」

「まあだそんなこと言ってんのか？」

銃声が二回したかと思うと、男の両膝が突然、血を噴出した。

あたり一面に血の色とにおいがあたりを覆いつくす。

「ぎゃあああああああああああ……！！助けッ！！頼むッッ！！」

「自ら権力を持たずに、

権力に守られてる奴ほど油断してるんだ」

苦痛に顔をゆがめる男にむかって突き放すように海斗は告げる。

拳銃の銃口を男の額に向けた。

「俺が善人なら・・・お前は助かっただろうな。」

だが、俺は『悪党』だ・・・じゃあな」

パンッ！という音とともに男の体から力が抜けた。

海斗は刀を引き剥いて能力を解除し、ナイフに戻し、拳銃とともに懐にしまった。

「・・・死んだの？」

とても小さくか細い声でした。

さっきの少女が目を覚ましたようだ。

海斗は少女に近づくと再びナイフをだし、

能力を使用して少女についていた鉄製のおもりを斬り捨てた。

「これでお前は自由だ。どこにでも行け」

「私にはもう、大切なものがないの……どうすればいいと思う？」

海斗は吐き捨てるように少女の問いに答える。

「それがどうした？ないなら作れ」

海斗は少女に背を向けると一枚の紙とペンを取り出し、

何か書き込むと少女にむかって放り投げた。

「ここに書かれている警備員なら、アンチスキル

お前が学校に通えるように手伝ってくれるはずだ。

……この状況は、誰かがお前だけ殺さず出て行った事にしろ」

出口にむかって歩き出す。

「あなたの名前は？」

「……答える義理はねえ」

じゃあな。と海斗は少女をおいてビルを出た。

雑貨稼業（後書き）

わがままですが・・・
感想などがいただけたらうれしいです。

変わらない四人

昼休み、海斗はインスタントの焼きそばを机の上におき、円柱の水筒を取り出す。

彼の左肩にはきっちり子犬のコー太がいる。

一週間と一日一方通行らといたので少し疲れたのか気持ちよさそうに寝ている。

水筒の中には熱湯が入っていたようで、容器に向って注ぐ際、湯気を上げている。

コポコポと音を立てながらお湯を注いでいる海斗を秋野が不機嫌そうに睨む。

「なんでそんな物を食べるの？」

「いたのか？綾」

秋野はむツとした顔になり

「ずっといたよ！そしてそんな物食べるなんて体に悪いよ！」

「弁当作る時間なかったんだよ・・・それに、そんな物だと？」

お前、まさかインスタントの焼きそばのうまさかわかってないようだな」

不毛な争いが続く。そして

「だからインスタントはd「おっと三分たったな」聞いてよ！」

海斗は鞆から別の水筒を取り出し、そこにお湯を捨て、ソースなどをかけて焼きそばを完成させる。

「いったただつきまゝす」

パキンツと割り箸を割って焼きそばを食べ始める。

「ふおのおいひふあふあわひやらふあいふおふあ（このおいしさが

わからないのか」

「ゴメン。何言ってるのかわからない」

焼きそばをほおぼる海斗に呆れる秋野。

そこに青色の髪にショートヘアの少女、氷堂が現れる。

彼女は両手で小さいお弁当箱を抱えている。

「あ、天地！おかず・・・いるか？」

頬をほんのり赤くして弁当箱を差し出してくる。

だが、海斗はそんなことにも気付かず、氷堂の弁当箱から玉子焼きを取り、口に含んだ。

「うまいぜ。ありがとうな氷堂」

「れ、礼はいらないよ」

気にいらないう顔で秋野は海斗を睨むが、海斗は気付かない。

「焼きそばのにおいで臭いぞ！この野郎！！」

鼻を摘みながら横の席の重藤が海斗にむかって文句を言う。

「ド変態アホ野……じゃなくて重藤……我慢しろ」

「今！絶対！ド変態アホ野郎って言いかけただろ！！」

海斗は視線を焼きそばから話さずに冷静に対応する。

「自覚あるんだろ？」

「ツッ……とにかくなあ……臭つんだよそれ……どっにかしやがれ！」

海斗の目の前にある焼きそばを重藤は指差す。

「我慢しろ」

「できねえから言ってるんだよ！よし、秋野さんからもなにか言っ
てやってくれ！」

その言葉に目を輝かせた秋野はここぞ！とばかり追求する。

「海斗！！やっぱリインスタントはダメだよ！人に迷惑かけるし、
体に悪いからね」

「くっ、うまいからいいんだよ」

「ほほう！うまいからいいなんて言ったら長生きできないよ」

これ以上は不利だと考えたのか海斗は氷堂のほうを助けてくれと言
わんばかりの目で見つめる。

「そ、そんな捨て犬のような目でこっちを見られてもだな・・・」

「氷堂さん！バカなやつ味方なんてするな」

重藤の一言に海斗はユラリと立ち上がり、蹴りを放ち、重藤を蹴り

飛ばした。

「バカはお前だ！」

ドゴオツ！と言つ音があたりに響く。

そんな一撃を受けても平気そうに重藤は起き上がり、拳をパキパキと鳴らす。

「けちよんけちよんにしてやる！！」

「上等！」

二人は拳を作り、殴り合いを始めた。

落ち着いた様子でお茶を飲みながらその光景を眺める秋野に苦笑いする氷堂。

それをよそに二人の殴り合いは続く。

「お前のパンチなんて痛くも痒くもないね！天地い！！」

「ついに神経まで麻痺したかあ！？重藤！！」

突如、ガラッ！と扉が開く音がした。

四人の視線が教室の入り口に集まる。

もちろん、殴り合いも中断された。

「え〜っとどこであつてる?」

「あつてるんじゃないですか?」

そこには佐天涙子と初春飾利がいた。

変わらない四人（後書き）

ここから3話ほど駄文になるかもです・・・。
4話目からは良くしたいです。

フラグと調査

「神隠し？」

「はい、これを見てください！」

机に座る四人と立って携帯の画面を見せ付ける佐天とそれを身を乗り出すように見る初春。

海斗は画面を見ながら、食事を再開していた。

他の皆はもう食事を終えている。

重藤も海斗も殴り合いの後にも関わらずケロツとした顔でいる。

髪は少し乱れているが……。

四人と初春は佐天の携帯の画面に顔を近づけて見る。

学園都市伝説、『神隠し』と記されていた。

「それで俺に頼りたいと？いや、いい目を持っているね、二人とも！」

重藤はニコニコしながら話し出す。

それに続くように氷堂が苦笑いを浮かべながら話す。

「いや、そうじゃないと僕は思うけど・・・」

「で？実際のところは？」

海斗はようやく食べ終わったのか、わり箸や容器を片付けている。

「これが風紀委員^{シンヤジツメン}でちょっとした捜査対象になったんですよ」

横から初春が会話に入り込んでくる。

捜査対象という言葉に一同は静かになる。

それを察した初春があわてて両手を振りながら説明する。

「い、いや捜査対象って言っても、あ、あくまでも一応ってことで
すから!！」

「「「「「」」」」」

佐天はここぞとばかりに拳を握り、話し出す。

ザパァーンツ!という大波の効果音が似合いそうだった。

「だから私達も、これに協力しようってわけですよ!！」

「『達』?」

佐天の言葉に首を傾げる秋野。

佐天はノリノリで目を輝かせる。

海斗には妙に佐天と初春のテンションが高いため、二人が別空間の住人に思えた。

「ここにいる六人＋二人ですよ！」

「……ま・さ・かと思うが、御坂と白井じゃあねえだろうか？」

「何言ってるんですか！そこに決まってるじゃあないですか！！」

海斗の表情がこわばる。

(嫌な予感しかしねえー！！！！！)

どうにかその中から外れようと試みる。

「悪いな「拒否権は無い！」てめえ！」

秋野に話をさえぎられた海斗は秋野と言い合いをはじめめる。

それを無視して氷堂は初春にたずねる。

「どうして僕達なんだ？」

「そ、それは……」

初春は口元に手をあて、顔を赤くしてチラリと重藤を見た後こう続ける。

「……頼りになるからです……」

それを聞いた氷堂は重藤に駆け寄り、ヒソヒソと話し出す。

「（重藤……初春ちゃんに何をしたんだ？）」

重藤は親指を立てて、歯をキラッと光らせて得意げな顔をする。

「（曲がり角でぶつかって出会ったぜ！！まさに運命の出会い！！）」

おーっと！氷堂さんとも運命の出会いをしたな！俺ってまさかフラグ建てまくり！？」

「・・・」

氷堂は思いつきり重藤の足を踏みつけると初春のほうに歩いていく。

「協力させてもらおうよ。皆OKってことで」

「あ、ありがとうございます！！じゃあ放課後、風紀委員第177支部に来てください！」

佐天さん！もう昼休み終わっちゃいますよ！！行きましょ！

「！」

「えっ！？もうそんな時間！？」

初春はペコリツと頭を下げたかと思うと佐天を連れて教室から急ぎ足で出ていった。

二人が出た後、氷堂はいまだ秋野と言い争っている海斗を見つめる。

顔がほのかに赤くなっているのが自分でもわかった。

(フラグ・・・か)

そんな氷堂の傍らではいまだ足を押さえてつづくまっただけの重藤がいた。

変態対変態

ジャッジメント
風紀委員の第177支部に海斗たちはいた。

6人の目の前には固法美偉と御坂美琴とまだ怪我が完治していない
せいか、

少しぎこちない動き方の白井黒子がいた。

海斗は小犬かつ子犬のコー太をテーブルの上に座らせてドッグフ
ードを与えている。

『ワフツ！！』

尻尾をパタパタさせながらドッグフードを少しずつ食べている。

その光景をジト目で見た後、白井は眉間に手をあててため息をつく。

「たかが都市伝説ですわよ？いちいち本気にしなくてもよろしいの
に・・・」

「いやいや白井さん。幻想御手レベルアップの一件もありましたし、

前にも同じようなこと言いましたけど、真実が形を変えて書かれていたこともあるんですよ！」

初春は椅子の上に座りながら、お茶を飲んでいる。

ちなみに海斗たちはソファに腰をかけている。

重藤はといえば……。

「御坂さん。ここであつたのも何かの縁だ。この後一緒にお茶でもしない？」

「お断りするわ」

ナンパともとれる軽くあしらう御坂。

「お姉さまをお茶に誘っていいのはわたくしだけの特権ですよ！」

「何びたりとも俺と御坂さんが結ばれる運命は変えられぬ……！」

変態^{じやうたい}VS変態^{しやうぶじ}の御坂争奪戦、勃発。

「わたくしはずっとお姉さまの露払いをしてきたんです！」

お姉さまの持っている全ての下着の柄も！スリーサイズも！
把握済みですわ！」

「なにを言おうがこの俺をひるませることはできない！スリーサイズも愛の前では無意味だ！」

「くっ！でもお姉さまとわたくしは強い絆で結ばれているんですの
！！」

「そんなこと何の意味もねえ！俺と御坂さんは今夜、ベッドの上で
それ以上の絆で結ばれるんだ！」

「「なかなかやるな」やりますわね」「」

二つの勢力は互角のようだ。

その話を聞いていた御坂は顔を真っ赤にしながら頭から青白い火花を散らせている。

「ですが！お姉さまの貞操を守るのはわたくしに、いい加減に、しろーーーーー！！！」

ギャフンッ！」

御坂は叫びながら、辺りに影響が出ない程度の規模で高圧電流を白井にくらわす。

電撃をくらった白井は変な叫び声を上げながらその場に倒れた。

それを見て勝ち誇ったように微笑む重藤の後ろから海斗は重藤の腹にむかって蹴りを放った。

「はっはっはー！俺の勝ちだ！引き分けだ！！」ゴフンッ！！！」

変態同士の御坂争奪戦は第三勢力みさかとかいとによって終わりを告げた。

はあ、と固法がため息をついた後話し出す。

「そろそろいいかしら？」

倒れている二人以外の皆が固法のほうに視線を向ける。

「この事件を捜査する理由は、最近5人ほど立て続けに行方不明者がでたからよ」

「ずいぶんザックリした説明だな。行方不明者ぐらいしよっちゆういるだろ？」

海斗は胡散くさそうに固法をみる。

固法も特に海斗の視線に気にすることもなく続ける。

「この行方不明者たちは私達がいくら探しても、全く手がかりはつかめなかったの。」

そこで最近噂されている『神隠し』に注目したの」

「藁をもつかむ思いでってやつか？それよりもさらわれた可能性として調べてねえのか？

犯人は空間移動能力者かもしれないねえぞ？」

固法は困ったように顔をしかめて片目をつぶる。

「その線も調べたけど、全員アリバイがあったわ・・・

それに、行方不明の人達は全員、めずらしい能力をもっていたり、高レベルの能力者よ？

そう簡単にやられるはずないわ」

固法の話が終わった後、あたりにしばらくの間、沈黙が流れる。

それを破るかのように突然、佐天が立ち上がると、

「じゃあさっそく捜査といきましょう!! 2、3人に分かれて動けば、何か見つかりそうですし!」

「引っ張るなよ」

そう言ったかと思うと佐天は海斗を引っ張って扉から出て行った。

変態対変態（後書き）

次回から文章力をあげていく・・・予定。

因縁の敵

時刻は7時。

辺りはもう暗くなっていた。

だが、彼らはまだ調査を続けていた

。

佐天と海斗は二人で夜道を歩いていた。

周りはまだ組み立て途中のビルが多く、外灯が少ないため、あたりはかなり暗かった。

佐天が海斗の2、3メートル先を歩いていて海斗のほうによく振り返りながら歩いている。

海斗としては早く帰りたいらしく、あくびをしながら歩いている。

海斗の左肩に乗っているコー太も先ほどからしきりにあくびをしていた。

「『ふああ〜』」

海斗とコー太は同時にあくびをした所を佐天は目撃すると不機嫌そうにムスツとした顔になった。

身を乗り出すように海斗の前に出る。

「・・・もう！もっと緊張感もってくださいよ！！せっかく都市伝説を二人で探しているところなんですから！」

「でも佐天・・・都市伝説なんて信じんのか？俺達はもう帰りてえんだけど・・・なあ？コー太」

『クウ〜ン』

海斗は気だるそうな声で左肩にいるコー太のほうを見る。

コー太も状況を察したのか、また言葉を理解できたのか、同意するように声をだす。

それを聞いた佐天はさらに海斗に近づく。

「違うんです！神隠しは本当なんですってば！！」

じゃあ！天地さんは今起きている事件はどう説明する気ですか？

いいですか？そもそも都市伝説とかはですね、実

「

「・・・はあ・・・」

熱心に語りだす佐天を見て、海斗は頭を右手で抑えながらため息を
はいた。

彼の耳には、もちろん佐天の言葉など入っていないかった。

突如、目を細めていた海斗の目が「佐天の後ろにある何か」を見た
瞬間、大きく見開いた。

「佐天ツツ！！！！！！」

「え?!?!きゃッッ!」

とつさに佐天を横に突き飛ばし、突然襲い掛かってきた『何か』を避けた。

海斗は突然襲ってきた『何か』を見て冷や汗をかいた。

無機質で滑らかで真つ黒な輝きを放つ光。

それはこの世にはないような、そして決して超能力ではない力。

海斗がそれを見た瞬間にそう感じた。

だが、その近くにいた白衣を着た男には見覚えがある……

いや、忘れてたくても忘れられない人物だった。

その人物は自身の周りに『黒い光』を纏わせながら、口を吊り上げて笑う。

「ひやはははははははははは！……まさかお前がいるとはなあ！
！！海斗お！」

冷徹な笑い声に海斗の目が再び大きく見開く。

「あ……天地さん？」

佐天は殺気に溢れた海斗の表情に戸惑いながら声をかける。

だが、海斗は全く辺りのことなど気にしてはいない。

「……コー太」

『ワンッ！』

海斗は静かな声でコー太にサインを出すと、コー太はバツツ！と飛び出し、佐天の右肩に乗った。

それをよそ目で見ながら、その男はその様子を横目で見た後、再び口を開いた。

「やさしいんだなあ？まーさかこの二年間の内に改心しちゃったのかあ？

あの時、オレにさっくり潰されたお前があ？なあ！！そーなのかい？」

「このイカレ科学者が、今更になってチマチマチマチマ何してるんだ？

よるつすたくみ
夜渦匠い！！！」

そう言つて海斗は折りたたみ式ナイフを取り出し、能力を使用して刀を出し夜渦に斬りかかった。

それに対し、夜渦は黒い光を動かし一部を空中で鋭利な刃のような形に変えた。

「来いよ。今度こそ殺してやるぜ」

「上等だ」

辺りに高い金属音が鳴り響いた。

因縁の敵（後書き）

次回、過去編。

過去の記憶と出会い

夜渦と海斗が過去にぶつかったのは今から二年前。

つまり、ちょうど海斗が研究所から逃げ出して、一年経った時だった。

~~~~~二年前~~~~~

ある夏の日、

雨によりぬかるんだ地面の路地裏を重い足取りで歩く少年がいた。

服は泥まみれになり、その表情には疲労があらわれていた。

時刻は夕方だが、今は夕立の真っ最中で外には人があまりいない。

(・・・思うように体が動かない)

少年の名は木原海斗。

『木原』に生まれながら、非道な実験を行う研究所を潰し歩く人物。

この時はまだ彼は一年間ずっと追っ手から逃げ続けていた。

血が出るような怪我こそしていないが、彼の体はボロボロだった。

壁伝いにゆっくり歩いている彼の意識は朦朧としていた。

(・・・この・・・ままじゃ・・・あ・・・つかまる。人通りの多いところに・・・)

そう思い、海斗は体を引きずりながら大きな道路に出た。

だが、そこで限界が来たのか、彼の体から力が抜けたかと思うとその場に倒れてしまった。

(ここまでか・・・)

体を激しく冷たい雨が打ち付ける。

その場から動きたいが動けない。

意識もさらに遠くなっていく。

ふと、意識が闇に沈む前にこんな声が聞こえた。

「大丈夫……ですか？」

その声に気が付き、その方向を見ようとすると、体が動かず、少女らしき人物の足しか見えない。

（だれ……だ？）

彼の意識はそこで途絶えた。

「あっ……目をさましたみたいですね？」

目を覚ましたばかりでまだはつきりとしないう意識の時に誰かから突然声をかけられた。

ふと視線を天井から横に移すと、そこには長い黒髪のおしとやかな雰囲気を持つ少女が

心配そうにこちらを見ていた。容姿からして年齢はあまり変わらな  
いだろう。

自分はなぜか布団に横になっている。

）・・・あれから、俺は・・・）

よじやく意識がはつきりしてきた海斗は

上半身を起こして自分の記憶を探り、状況整理をしようとする。

「心配しました。道端でボロボロになって倒れてたんですから・・・」

海斗は少女が何か言い終える前に懐から拳銃を取り出し、少女に突きつけた。

「・・・どこの差し金だ？」

少女は拳銃に驚いたのか少し後ずさりした。

彼はかれこれ一年間、ずっと戦い続けてきた。

あらゆる手で殺されかけた。人というのはただ優しいだけではないということも知っている。

目的のためならばどんなことでもする邪悪な欲望も悪意もなにもかも。

『ただ目の前で倒れていた』その理由だけで人を助ける人などいない。

それがその時の彼の考えだった。

「ち、違います！」

少女は戸惑いながらも力強く言った。

海斗は表情を変えずに質問を変える。

「見返りが欲しいのか？」

「だ、だから、違います！ただ、あのままにしておけない！！って思っただんです！！」

少女の反論に海斗は眉をわずかにひそめる。

少女の表情から、嘘をついてるとは思えない。

海斗はスッと拳銃をしまいこみ、少女をジッと見つめた。

「……一応、礼は言っておく。ありがとな」

対して少女も柔らかな表情になる。

「別にいいですよ。お前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「……名字はない……が名前はある。海斗だ。お前は？」

『木原』と言えるはずもなく、海斗は吐き捨てるように言った。

対して少女はニコツと微笑む。

「私の名前は天川真紀。あまかわまきよろしくね海斗君？」

「……なんかくすぐったい呼び方だな。もっといいのはないのか？」



海斗は呆れた調子で言い返す。

たしかに海斗君などと君付けされては少し恥ずかしいと感じるのだらう。

君付けを改めて欲しくて海斗はほかの呼び方をするように言ったのだが、本人は気付いていない。

もっというの。と呟きながら天川は顎に手を当てて考えている。

そして何か思いついたような顔を見ると海斗にむかってこう言い放つ。

「いいやつ思いつきましたよ？名字を作っちゃえばいいんです。

私の名字から『天』をとって、『天地』というのはどうでしょう……？」

海斗はしばらくの間、口を開けてポカンとしていた。

それを見た天川は慌てふためいたようすで問う。

「え、だ、ダメですよね？ごめんなさ」

天川の言葉をさえぎるように海斗はその少女の前で初めて微笑んで言った。

「気に入った。」

それでいい。

ありがとうな『真紀』「

これが海斗と天川真紀の出会いにして、海斗が木原という名字を捨てた日だった。

## 過去の記憶と家族

海斗と天川に出会いから一週間、二人は一緒に暮らしていた。

一般人の天川は海斗に事情はなにも聞かずに自分の寮に海斗を置いてくれた。

そんな優しさに疑問を感じながらも海斗は行くあてもないのでそこに留まっていた。

「どづしたんですか？ポーツとして？」

明るいファンシーな人形がたくさんある部屋に二人は居た。

どれもこれも人気があるキャラクターらしく、海斗にも見覚えがあった。

そんな部屋のなかで天川の声だけが聞こえた。

ずっとそうなのだが優しい声色でたずねてくる。

それに対し、海斗は

「なんでもねえよ」

突き放すようなことしか言えない。

研究所を抜け出す前の幼馴染と一緒にいたころなら普通に返していたかもしれない。

そう思いながら海斗は本棚まで歩き、一冊の本を手にとり、丸いテーブルに両肘を置いて読み始めた。

本は時代物の小説で、海斗にとっては興味のないものだが、今の海斗にとってはどうでも良かった。

「ミルクティーですけど……飲みます？」

不意に声がかけられたかと思うと目の前に天川がいた。

天川は笑顔で海斗の前に湯気が少し出ているカップを置いた。

「……いいのか？」

「えッ!？」

視線を本から移さずに海斗は告げる。

「俺の世話なんかのために学校も休んで……親が心配するぞ」

率直な疑問だった。ただ海斗を放って置けなかっただけなら、アンチス警備員キルに

任せたほうが、普通なら助けられたもののためになるだろう。

対して天川はどことなくさびしそうな顔をするところを呟いた。

「……いいんです。学校のほうには体調が悪いつて言っとききました。」

そして私は、チャイルドエラー置き去りですから・・・

「親なんていませんから、心配なんてされません。それに・・・」

「・・・それに？」

今度は海斗を正面から見てニコツと笑顔になるところ続けた。

「天地さんは初めての私の家族のようなものですから、一緒にいたいんですよ」

家族・・・という言葉聞いた瞬間、海斗の中にあつた人に対する心の壁が砕けた気がした。

（くそツツ！！俺は今までこんな奴を疑ってたのか・・・？）

彼はその言葉にどれだけ救われただろうか？自然と彼の頬を熱いものが流れる。

「ど、どうして泣いているんですか？」「ごめんなさい！」

あたふたする天川に海斗は床を殴り、自分をいましめるように声を絞り出す。

「俺はずっと！！お前みたいないい奴を！疑ってきた！！！」

それでもお前は・・・俺のことを家族だとか思ってたんのかよ  
「？」

天川はそれに対し、微笑む。

「はい」

海斗は啞然とした後、天川の顔をもう一度見る。

「・・・ありがとうな。真紀・・・」

「やっと一週間ぶりに名前を読んでもらえました

改めてよろしくお願いします。天地君」

それから三ヶ月という月日が流れた。

毎日が楽しくて、すぐ過ぎていった。

ある日の夕方、二人は買い物に出かけていた。

歩いている道は人通りが少なく、

夕日により照りつけられた道路はほのかに淡いオレンジ色になっていた。



「すき焼きとはまた、今日は豪華ですなあ」

買い物袋を片手に持ちながら、海斗は横に居る天川に話しかける。

天川も海斗のほうを見る。

「まあたまには贅沢したいじゃあないですか？それとも天地君はすき焼きが嫌いなんですか？」

少しだけ意地悪そうな笑みをした天川に海斗は振り向いて言い返す。

「バカ！んなことねえよ。すき焼きは俺が独り占めしたいくらい好きだ」

「それはしちゃダメですからね？私が泣いちゃいますよ？」

「それがどうした？泣いたところでなに・・・」

「女を泣かせたら犯罪って言うじゃあないですか？」

「おいおい・・・」

天川の言葉に呆れる海斗。

天川は勝ち誇った顔で隣を歩いている。

その表情はどこかうれしそうだ。

突如、天川が立ち止まった。

「どっした？」

駆け寄る海斗のほうを向かずに視線の先に居るものを指差す。

その表情は恐怖でいっぱいだった。

指差す先を海斗は振り返り見ると、そこには……

「お前さんが海斗なんだよなあ!？」

白衣の少年がいた。

その白衣には返り血がついていた。

海斗は天川を手で制し、前に出ると、少年を見た。

「追っ手か？」

少年は高らかにわらう。

「ひやはははははは！俺の名前は夜渦匠！優秀な研究者だあ！！！！

ここで殺してやるからさあ！！楽に死にたきゃあ逆らうなよ  
」？

過去の記憶（最『悪』）

少年が笑い終えるとともに海斗は赤い刀を能力で出現させて、横なぎに刀を振るった。

刀身から放たれた斬撃は地面を抉り取りながら、夜渦に迫っていく。

だが、斬撃が夜渦に当たることはなかった。

黒い光が夜渦を取り囲むように出現したかと思うと、その黒い光は斬撃と衝突した。

（・・・なんだ・・・あれ？）

衝撃で足元のアスファルトがめくれあがる。

海斗は辺りに舞う砂埃の中心にいる夜渦を睨みながら出方を伺う。

「ひゃはははははははははは！！！！まさかこの程度か？」

その声が出たと瞬間、

砂埃の中から突如、鋭利な形になった黒い光が海斗の眼前に現れた。

ザシュツ！と肉の切り刻まれる音が響いた。

その光は一瞬にして海斗の全身を切り刻んだ。

真っ赤な鮮血が辺りに散る。

足元のアスファルトも赤く染まる。

「……………か……………ッ」

(ッ!!? な、何・・・だ・・・?)

海斗の体から力が抜け、その場に倒れこんだ。

おそらく、致命傷は受けていないだろう。

だが、彼の体からは大量の血が流れ出る。

「天地君!!?」

「く・・・るなッ!」

海斗は近づいてくる天川の方を見ないでそれを制した。

そして海斗の目の前の砂埃が晴れたかと思うとそこには夜渦がいた。

その表情はとても残酷なものだった。



「にげ・・・ろッ!!真紀ッッ!!!!!!!!!!」

「えッ!?で、でも!!!!」

戸惑う天川に海斗は叫んで逃げるように促す。

「後で俺もッ!!追いつくからッ!!!!頼むッ!!!!!!!!!!」

「できない。天地君を置いていくなんて!できません!!」

海斗は舌打ちをしながら体に力を入れるが、立ち上がれない。

夜渦の視線が天川に移る。

楽しそうなおもちやを見つけたように笑い出す。

「こいつも抹殺けってえーだあ!!!!止めたいなら止めてみる!!!!  
!!!!!!」



「止めるッ!!」

海斗は必死に体を起き上がらせようとしますが、体中を激痛が走りぬける。

夜渦は黒い光を作り出し、天川に向って放った。

「止めるおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおッ!!!!!!」

海斗は歯を食いしばり、強引に体を起き上がらせて烈風を放った。

黒い光とぶつかった烈風は、押し負けたのか、消え失せた。

だが、黒い光は軌道がずれただけで、止まらなかった。

天川の隣のビルに黒い光があたり、

だ。  
そのビルの大量の瓦礫が天川の上に降り注い



お前が邪魔することも把握済みなんだよお！！！！！！  
なーに必死こいてやがんだ！！？

アイツはぐっちゃぐっちゃのミンチになりましたとさ  
！めでたしめでたし！！！！！！」

「ツツ！！！！てめえツツ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

今までの中で一番の残虐な笑みになる夜渦に

海斗は刀を握り締め、自分の体のことなど気にせず、夜渦に突っ込んでいった。

夜渦は眉一つ動かさずに右手を前に突き出し、人差し指を軽く振った。

「邪魔」

「ツツ！！！！！！」

黒い光が竜巻状になり、海斗の胴体に当たり、突き飛ばした。

メリッと骨のきしむ音がした。

「もっさ、終わらしてもいい？」

突き飛ばされて再び、地面に這いつくばる海斗にむかって夜渦が――  
歩ずつ近づいてくる。

もう海斗の意識はなくなりかけていた。

後は止めを刺されるだけの状態。

そしてその止めを刺すために敵は今も迫ってきている。

そのとき

「おい

「あ？」

突然、呼び止められた夜渦は足を止めて、声のした方向を見た。

そこには一般人らしきツンツン頭の学生が立っていた。

海斗は意識が朦朧としていて、誰かが来たことしかわからない。

ツンツン頭の少年を見ると、夜渦はため息をつく。

「一般人か……何の御用で？」

ツンツン頭の少年は右手の拳を握り締める。

「これはお前がやったってことでもいいのか？」

「……邪魔」

夜渦はそれだけ告げると黒い光を操り、ツンツン頭の少年にむかって攻撃をくりだした。

これでツンツン頭の少年は殺されるはずだった。

だが、ツンツン頭の少年の右手に触れた瞬間、黒い光ははじけとび、消え去った。

夜渦は目を細め、少年の右手を見つめる。

(……………アレを相手にするとなると、やっぱりだな)

「・・・気が変わった。そいつは生かしてやる。だがまあ！變しの彼女は死んじゃったけどなあ！！！」

そう言うと夜渦は再び黒い光を出し、地面に鞭のように叩きつけた。

ツンツン頭の少年は砂埃に飛び込もうと走り出す。

「待ちやがれ！」

砂埃が晴れたかと思うと夜渦はそこには居なかった。

だれも居ない空間を眺めて少年は呟く。

「・・・くそッ！逃げられたか！」

少年は海斗のほつに振り返ると近寄ってから携帯電話を取り出す。

「大丈夫            じゃあなさそうだな・・・はやく病院に連れて行かないと」



）・・・・・・・・・・・・・・・・ちくしょう  
（

海斗のろじてまだあった意識はそこで途  
絶えた。

後日

「目を覚ましたようだね」

「ツツ！！！！？」

海斗は目を覚ますとすぐに、そばにいたカエル顔の医者に『天川真紀』の行方を尋ねた。

「・・・・・・・・おい！真紀は！？・・・・・・・・・・・・・どうなったんだ？」

カエル顔の医者は黙ったまま顔を横に振ると、眉をひそめた。

「本人のものと思える致死量の血を残して、行方不明になったらしい……」

「ってことはまだ生きてるのか!? なあ!!! おい!!!」

カエル顔の医者は目を瞑って、静かに口を開いた。

「医者として言わせてもらえばだが……生存率は0%だ」

「………なんでだよ………」

海斗は心にポツカリ穴が開いた気がした。

泣くことも出来ずにいた。

(………なんであんないい奴が死ななきゃいけないんだ?)

心に次々と負の感情が湧いてくる。

(許せねえ……この街のクサレ研究者どもは！俺が斬り捨ててやる！！)

これをきっかけに、

後に彼は研究者の間で解析不能レレ下フレイ下と呼ばれ、恐れられることになった。



過去の記憶（最『悪』）（後書き）

夜渦の黒い光の簡単なイメージは、  
NARUTO -ナルト- の我愛羅の砂を軽くしたイメージですかね？  
本質的には全然違うのですが、  
そのほうがわかりやすいかと・・・。  
わかりにくかったらすいません。

再戦、そして

刃と刃がぶつかり合うような音があたりに響く。

先ほどから、夜渦に海斗は何回か斬りかかっているが、黒い光に阻まれ、夜渦に届いていない。

夜渦は左腕を左に払うように振るうと黒い光も鋭利な形になって、右から左へなぎ払うように動いた。

バツ！と海斗はバックステップでそれをかわすと、

刀を振るい、炎を放った。

炎は地面を赤く照らしながら夜渦にむかって真っ直ぐに突き進む。

「変わってねえなあ……！！海斗お……！！」

しかし、黒い光が今度は光線のように、または一本の太い槍のような形になり、

「ッッ！！」

炎を貫通して、直線状にいる海斗に直撃した。

海斗の居る場所は地面ごと抉りとられ、アスファルトの小さな破片が飛び散る。

夜渦は頭の上から降り注いでくる小さなアスファルトの破片を手で払いながら海斗の姿を確認した。

その体には傷がついていなかった。

また、赤い刀の刀身は赤い光をまとっている。

とくにあわてることもなく、夜渦はニタアと笑う。

「今ので死なないとは、ビックリしたぜ！！悪党さんよお！！！！」

「コレ使ってる時点で科学者として最悪じゃあねえか？

このオカルト研究者さんよお！！！」

二人とも、顔こそ笑っているが、ピリピリとすさまじい殺気を放っている。

海斗が勢いよく踏み出すと夜渦は右腕を振るって黒い光を動かした。氷堂と戦った時と同じように、海斗は重力を操作して速く動いている。

「ひゃはははははは！！」

最『悪』に悪党が敵うと思ってるのかなあ！！！海斗お！！！！！！！！！！」

「ハハハハハハハ！！やっぱお前は俺と同じくらいのクズだよ！！！！！！！！！！」



衝突した。

ガッ！！と刀身に赤い光を纏った刀と黒い光の刃が

「  
今すぐに叩き斬ってやる！」

「なら、俺はお前を引き裂いてやるよお！！！」

二つの力は互角だった。

海斗は体勢と刀身を右横にずらし、黒い光の刃を受け流す。

ズウンツ！！という音とともに海斗の歩いて5歩ほど後方の地面が砂埃を上げて小さなクレーターを作った。

海斗は右横に転がり、完全に攻撃をかわした後、思いっきり地面を踏みつけて夜渦にむかって斬りかかる。

夜渦は黒い光を左の手のひらから出したかと思うと、黒い光をサーベルの形に変えるとそれを右手で持った。

両者はお互い相手にむかってそれぞれの武器で相手を殺しにかかった。

「ハハハハハハ！（ひやはははははは！）」

ガキンツツ！という音が何度も何度も辺りに響いた。

その光景は文字通りの斬り合いであり、殺し合い。

激突している今の二人を分けるものは『最悪』であるか『悪党』であるかだけだった。

海斗は夜渦のサーベルを斬りあいの中で弾くと、丸腰になった夜渦にむかって刀を振りかざす。

「……俺の勝ちだ」

それに対し、夜渦は不敵な笑みを浮かべると両手を広げる。

「コレならどうかなあ!!?」

ドスツツツツ!!!!!!!!!!

!!!!!!

「か………はッ!!?」

海斗は突然、口から血を吐いた。

地面にポトポトと血がしたりおちる。

(ツッ!!!!!!!)

突然海斗が吐血した疑問はすぐに解けた。

黒い光で出来た4本の黒い剣が海斗を背  
中から海斗の胴体を串刺しにしていた。

「・・・・・・・・くそツ!!.....」

自然と体から力が抜けて、海斗はその場に倒れこんだ。

傷口からは尋常じゃあないほどの血が流れ出る。

『血の水溜り』がどんどん海斗を中心に広がっていく。

佐天はショックが大きかったのか、フラフラとした足取りで海斗に近づいてくる。



「嫌です！そこを……どいてください！！！」

キツと夜渦を睨みつけた。

夜渦は額に右手を当てて笑う。

「ひやはははははは！！お前に拒否権があるわけねえだろ！！！」  
「？」

「きゃッ！！？」

黒い光が佐天を飲み込んだかと思うと、佐天はもうその場には居なかった。

（佐天ッ

！？）

海斗は何か行動を起こそうとするが、もう能力も解除されてしまっている上、体の感覚がもうなかった。

残虐な笑みを浮かべながら夜渦は海斗のほうに振り返る。



「……………ゴホッ！！ゴホッ！！！！ガハッ！！」

血の塊を眼前に吐き出す。

（これは……………助からねえな……………これはあの医者でも無理だ……………）

海斗の体の中で唯一、力が入っていた右拳から力が抜け、

握っていた折りたたみ式ナイフが、カランツ！と音を立てて赤く染められた地面に落ちた。



海斗の意識はそこで途絶えた。

再戦、そして（後書き）

主人公、冷蔵庫になれば助かるかもww  
どーする！主人公！！

## 主人公不在の物語

翌日の昼過ぎ、重藤、氷堂、秋野、御坂、白井、初春、固法の7人は風紀委員第177支部にいた。  
ジャケット

今日は学校は休日のため休みであった。

その7人の表情は険しいものだった。

沈黙を破るように初春があたりを見回しながら尋ねる。

「さ、佐天さんと天地さんは来ていないんですか？」

「……『神隠し』に巻き込まれた……とでも言いつべきかしら……」

暗い口調で呟く固法に続くように重藤が口を開く。

「正確には、佐天さんだけが『神隠し』にあった。海斗も行方不明だが……」

「どづいづことよ!？」

御坂が突然、重藤に突っかかるように歩み寄る。

重藤は苦虫を潰したような顔をする。

「・・・本人のものと思える致死量の血と所有物の折りたたみ式ナイフが落ちていた・・・。

遺体が見つからないのは不思議だが、いままでの『神隠し』ではそんなことはなかった。

佐天さんみたいに『ふつと何の前触れもなく消えた』が今までの『神隠し』であって本人の所有物等は落ちていなかった」

その場にいた固法以外の全員が表情をこわばらせる。

白井は眉をひそめながら不機嫌そうに尋ねる。

「どづして貴方がそんなことを知っているんですの?」

「固法先輩に聞いた」

ピツと人差し指を出して口調を変えずに言う。

「……と言うことで、だ。この件に関わるなら気を引き締めてかかれってことらしい」

「以上ですよね？固法先輩？」

「……ええ」

固法もそれなりの責任やショックを感じているらしく、その表情は暗い。

御坂はショックを受けている秋野たちを見ると重藤を睨んで言う。

「なんでアンタはッ！！友達が死んだかも知れないのにそんなに冷静なのよッ！！」

重藤はため息をつくとき、御坂を正面から見つめてポケットからガムを取り出し、口に入れた。

「信じてるからだ。俺はあいつ等が無事だと信じてる。それだけだろ?」

呆気にとらわれる一同の中で、秋野はフツツと笑うと何かを吹っ切ったように告げる。

「そうよね・・・私達が疑ってどうするのって感じよね!!」

「ですわよね!事件を本格的に調査にしますわよ!!初春ッ!!!!」

「はいッ!!!!」

「僕も何か手伝える!?!」

「私も!」

一気に一同の中に活気が取り戻された。

その様子に固法はキョトンとしながら、ガムをかんで突っ立っている重藤のほうを見る。

「この空気を作った貴方も凄いいけど・・・秋野さんだっけ？彼女、強いわね・・・」

「いい女ってのはそういうもんですよ。先輩にしても秋野さんにしても、

何アレ兵器！？ってくらいスタイルいいですもん！こう！ボン  
ツキユツボンツって・・・ギャフツ！！！！」

固法は頭を抑えながら呆れたように重藤の顔面に裏拳を叩きこむ。

「・・・一言余計よ」

「……『神隠し』だア？興味ねエよ、んな都市伝説」

「でも最近噂になってるみたいだし、ミサカはぜひぜひ調査してみるべきだと思うんだけど？」

白いソファで寝返りをうつって番外個体に背を向けるミサカ一方通行。アカセラレクター

今は昼過ぎのため、黄泉川、芳川、ラストオーダー打ち止めは三人で買い物に出かけている。

一方通行はソファに寝ていて、番外個体はテレビのチャンネルを変えてばかりしている。

番外個体は意地悪そうな笑みを浮かべて一方通行に声をかける。

「でも、親御さん。それがもし、ラストオーダー最終信号に危険を及ぼすことになったりしたらどうすんの？」



一方通行は目だけで番外個体のほうを見る。

「……オマエ、暇なだけじゃあねエのか？」

「そつかもしれない」

一方通行は体を起こし、ソファに座ると呆れた顔で番外個体を見る。

「まあ、放っておいても、あのガキが同じこと言い出しかねエし、行くか……」

「……それ、何気なくミサカのことバカにしてない？」

一方通行は番外個体を無視すると、現代的なデザインの杖をついて立ち上がる。

それを見据えた番外個体はこう呟く。

「……若返りの薬でも飲んでミサカが小さくなってみたら親御さんはどう反応するのかな？」

「サッサと行くぞ」

とある電話ボックスから重藤は電話をしていた。

相手は冥土ヘブンキャンセラー返しと呼ばれている凄腕の医者だ。

重藤はどこか遠くを見つめながら問う。

「そつちになんか情報はねえのか？ゲコ太先生」

『・・・君はいつになったらその呼び方を止めてくれるんだい？』

呆れた声で返してくるがこの医者はカエル顔で、とても凄腕には見え  
ない。

しかもそのことをおそらく自分でも自覚している。

重藤はポケットからガムを取り出すと、

受話器を持っている手と反対のあまつている手で口に持っていき、  
くわえた。

「……そうだな。俺がゾンビになる手前ぐらいかな？手紙とか書  
いてるころくらい」

『……まあいい。こっちに情報なんてあるはずないだろう。それ  
くらい君だってわかってるはずだ』

予想通りとばかりに重藤は笑みを浮かべる。

「俺の聞きたいことはそういうことじゃあないんです」

重藤の口調が変わった。

電話のむこうにいるカエル顔の医者も眉をひそめる。

『なんだい？』

「なんの手がかりもない以上、今を調べても意味はないと思うんです」

『彼、天地海斗君の入院記録かい？』

「それもありますが・・・」

重藤は今、海斗の件と佐天の件を別に考えている。

たとえば、同じ事件が原因であってもそのほうが効率がいいと思っているからだ。

「・・・貴方は、『能力が使える研究者』ってやつをご存知ですか？」

『名前は知らないがそれらしい人物なら知っているさ。だけど、なぜ？』

「……あいつが負けるとなれば、相手はあいつを知っているやつ  
つてことになります。」

そうなれば研究者となってきましたし、あの戦った跡を見れば、  
能力者だってわかります」

『流石というべき推理だけど、厳密には間違っているよ』

カエル顔の医者言葉に、重藤の表情が曇る。

『そもそも、その人物は能力者ではない』

「……」

無言になり黙る重藤に対し、カエル顔は続ける。

『……その人物は、とても危険だ。つい最近は自分の研究所を持  
つたらしいからね。』

実験という名の何かを起こすに違いない』

「それだけわかっただけでも助かりました」

ガチャッ！と重藤は受話器をしまい、ガムを口の中に入れた。

「ったく・・・世話のかかるやつだ」

そう呟くと電話ボックスから飛び出した。

主人公不在の物語（後書き）

タイトルのネーミングセンスがツ！w

## 駆動鏡

とある研究所の一室に夜渦は居た。

彼のいる部屋はパソコンが2、3台、

大きなモニターが5、6台ある部屋でモニターにはさまざまな数値が表示されている。

彼の部屋は意外と広く、銀色の鋼鉄製の壁には傷一つない。

夜渦はパソコンの前にある事務椅子に座り、ポケーツとモニターを見ている。

( やっぱり、解析には時間がかかる・・・か )

すると彼の部屋の自動ドアが電子音を出しながら開いた。

夜渦はそちらのほうにクルツと事務椅子を回転させる。

部屋の入り口に居たのは白衣を着た若い青年の研究者だった。



「も、もうしあげます。ジャッジメント風紀委員などが今回の件を受けて、動き出したようです！」

夜渦は拍子抜けしたような顔をした後、

「ひやははははは！何を言つかと思えば！お前らは役立たずだが、俺はあんな奴ら眼中にない。」

あ。  
パワードスーツ駆動鎧で相手をしてやれ。何、失敗したらあの世行きだけどな

そこをしっかりおぼえとけよ？」

夜渦は言い終わるとサッサと他にも伝える。とばかりに指で合図をする。

すると青年は頭を下げて、失礼しました！と言うと部屋から出て行った。

クルリッと椅子を回転させると夜渦は不気味な笑みを浮かべる。

「学園都市・・・俺の作る兵器の実験台になってもらおうか？」

氷堂と秋野と初春と重藤は一緒に調査していた。

調査、といっても街をウロウロしているだけだが……。

紅葉の髪飾りをしている秋野に青い髪の氷堂、それに頭に花を乗せている初春。

どこからどう見ても、個性的としか言いようのない面子だった。

金髪の重藤もあわせて・・・だが。

「まあ、俺としては曲がり角に期待したいわけだ」

「な、なんでですか？」

初春はおどおどしながらも重藤の言葉に応じる。

秋野と氷堂はそれを無視して他の話をしている。

重藤は目を輝かせながら初春に告げる。

「曲がり角って奴はさあ！！出会いの場所なんだよ！！だから美少女とかに当たって欲しいな」

「っていうな、男の夢ってもんがあるんだよ」

「は、はあ・・・そうなんですか？」

初春は苦笑いで返す。

「おッ！曲がり角発見！」

重藤はすぐそこに曲がり角を見つけるとひとりで走り出す。

重藤が曲がり角を曲がりきる前に重藤はなにかにぶつかった。

「つぶはッ！」

重藤の大声を聞いて3人は駆け寄る。

まさか本当に美少女に？と淡い期待をしながら重藤は目を開けて、ぶつかった相手を見た。

「すみません。大丈夫です……か？」

あたった相手は紺色の駆動鎧だった。

一瞬の沈黙が一同の間で流れる。

だが、沈黙を破るように駆動鎧は拳を振り上げた。

「こんな出会って、ありッ!？」

叫ぶ重藤にむかって放たれた拳は一瞬にして現れた氷の壁によって防がれた。

「僕がいることを忘れてないよね？」

手の平で氷の塊を作りながら氷堂は重藤の横に立った。

氷堂は相手の数などの情報を頭のなかで整理する。

駆動鎧の数はおよそ20人。

鎧はごつごつしていて装甲は堅く、厚そうなものだった。

駆動鎧というものの自体、氷堂と相性があまりよくない。

突如、さっきの駆動鎧が氷堂に拳を繰り出してきた。

氷堂は右手を突き出し、特殊な吹雪をだすと、駆動鎧の一体は力チコチに凍りついた。

（一体一体凍らすのは無理かな・・・ここは御坂さん達と合流するべき・・・）

「来なよ！僕が相手だ！！」

氷を扱うボクっ娘、氷堂雫は駆動鎧を前にして宣戦布告した。

御坂と白井は二人で聞き込み調査をしていた。

人通りの多いところでさまざまな人に聞いていくが、何も情報は得られない。

眼鏡をかけた内気そうな少年とわかれた二人は情報のなさに肩を落とす。

「……ごつも情報がないと、そもそも神隠しなのか疑いますわ……」

白井は背筋を曲げて、だるそうに歩きながら横目で御坂を見た。

御坂はしょうがないと言いたげな顔でため息をつく。

「それでも、早くなんらかの情報を手に入れないと……」

ちなみに、二人はセブンスミストの前にいた。

白井は身をクネクネ動かすと御坂をチラッと見て、頬を赤らめる。

「まあ、お姉さまとわたくしのデートの時間が長くなるにこしたことはないんですの……ウフ、ウヘヘヘ!!--」

御坂は頭を抑えて呆れている。

なんでこんなのが風紀委員なんだろう？そのしぐさからそう思っているのがわかる。

ふと、白井は近くを駆動鎧が通ったのを確認した。

「お姉さま!!」

「えッ!? ちょっと黒子!?!」

呆れて頭を抑えている御坂の肩を軽く叩くと、レポート空間移動で駆動鎧の死角に移動した。

駆動鎧の死角はちょうど道の曲がり角で、二人は壁越しにキョロキョロする駆動鎧を見ている。

「あつちからやってきてくれるとは思いませんでしたわ」

「黒子……私は戦うわよ」



「まっってくださいですのお姉さま!！」

御坂は好戦的な笑みを浮かべると角から飛び出して、駆動鎧たちの正面にでる。

御坂はポケットからコインを一枚取り出すとコイントスをするようにコインを真上に弾き飛ばした。

その瞬間、御坂に気付いた駆動鎧たちは一斉に持っていた銃の銃口を御坂に向けた。

「こっちもいい加減、シビレ切らしてんのよ!!!!!!!!!」

御坂の手元にコインが戻ってきたかと思うと、

コインはオレンジ色の光を放ちながら駆動鎧たちを吹き飛ばした。

ゆっくりと起き上がる駆動鎧たちの残党を前に御坂は堂々と立ちはだかる。

「私をなめてたら、痛い目にあうわよ……!」



## 二つの策

駆動鎧が氷堂たちを襲い始めて、10分が経過した。

相手のほうが数が多く、囲まれるわけにはいかないので

四人は逃げながら交戦という形をとらざるを得なかった。

彼らの通ったあとの道は凍りついていた。

息を切らしながら、氷堂は叫ぶように重藤をみる。

「何かいい手はないか!？」

「重藤さん!!」

初春は氷堂の声を遮るように重藤に期待の眼差しを向けて叫ぶ。

それを見た重藤はぎよっとする。

(・・・まさか、まだアレを引きずってんの？畜生！。俺が異様に強いつてばれたら・・・)

彼の存在は風紀委員ジャッジメントの中でも特別である。

彼としては極力、誰からもそれに感ずかれずに生きていきたいらしい。

無論、初春はなぜ重藤が強いかなど、気にしていない。

だが、氷堂や秋野がそれを見逃すと思えなかった。

一斉に駆動鎧の集団は持っていたサブマシンガンの引き金を引いた。

御坂たちは気絶して転がっている駆動鎧たちを見渡しながらコインを手にとる。

「さあて、色々吐いてもらっつわよ」

「そうですね。お姉さま」

白井も腰に手を当てて、倒れている駆動鎧たちを見渡しながら応じた。

周囲は、超電磁砲レールガンにより、地面が抉られ、サブマシンガンの破片や、駆動鎧の破片が転がっている。

もちろん、駆動鎧に乗った者たちは全員気絶こそしているが無事だった。

この実力こそ、彼女、御坂美琴がレベル5の第三位に君臨する証。

白井も後から参戦したが、この結果はほとんど御坂一人のものだといえる。

じりじりと足元に四散しているものを足で避けながら御坂は駆動鎧に近づいた。

「黒子、アンチスキル警備員呼んだ？」

御坂は手を伸ばし、駆動鎧のなかから一人の中年男性を引きずり出して後ろを見た。

白井は携帯を耳に当ててなにか話している。

もう呼んでいるのか。そう御坂は思い、情報を得ようと抱えている中年男性を見た。

次の瞬間、プチッ！！と何かが強引にちぎられる音がした。

途端に抱えていた中年男性の顔から生気が消えた。

「えッ！？……………」

御坂は表情を強張らせると、すぐに中年男性を地面に寝かせて、脈を測った。

(…………嘘で…………しょ？……………死んでる！！)

おそらく、同時にいくつかの大事な血管をズタズタにされたのだろう。

そう御坂は思いながら辺りを見回す。

もし、これが、遠隔操作でされているなら

他の人たちも！？

顔を真っ青にした御坂は急ぎ足で倒れている駆動鎧の中身を確認して回った。

全てを確認し終えた御坂は涙を流しながら、ぺたりと座りこんだ。

恐怖や戸惑い、そして自分の無力…………それらに対し、彼女は大きなショックを受けた。

「……………ぜ、全員……………死んでる……………」

「お姉さま？」

白井は電話を止めて、御坂に駆け寄るが御坂に反応はない。



( 一体、どうしたんですの？ )

白井が御坂がショックをうけた原因をしまったのはおよそ15分後、警備員が来てからだった。

逃げ回る重藤たちが銃弾をくらうことはなかった。

氷堂が何かしたわけでもないし、重藤が能力を使用したわけでもない。

「まったく・・・真昼間からなアに騒いでんだか・・・」

「まあまあいいじゃない親御さん ミサカも早く暴れたくてウズウズしてるんだけど？」

重藤たちと駆動鎧たちの間に、二人の人物が割って入ったからだ。

二人とも目立つ外見だが、駆動鎧たちの視線は真っ白な少年に釘付けだった。

サブマシンガンの引き金を引くことに一瞬と惑ったその隙を番外個ミサカワ体は見逃さなかった。スト

「皆さん、隙だらけだよん」

バチッ！という音とともに鉄製の釘が高速でサブマシンガンに突き刺さり、サブマシンガンを破壊した。

周囲にサブマシンガンの黒っぽい部品がカランツと音をたてながら散らばる。

その様子をつまらなそうな目で一方通行は見つめる。アクセラレータ

「んな物騒オなもんまだ持ってたのか？」

番外個体はニヤけながら手の中でジャラジャラと鉄釘を鳴らす。

「まさか そこら辺の大工さんからちょっと拝借してきただけだよ？」

「テメエみたいなのを泥棒って言うんだが、わかってんのか？」

チラリッと一方通行は横目で番外个体を見ると指でトントントンと自分の首を突付いて見せた。

「ここら一体に、俺の電極チョーカの代理演算に影響を出さない妨害電波をしけ」

番外个体はやや不服そうな顔で答える。

「なんでそんな面倒なことをミサカが？」

「真昼間からこんなことをする連中だ。絶対何か秘密を守る『策』があるはずだ……。」

それを封じるにはそオするしかねエ」

それを聞いたミサカはいままでで一番の笑みを浮かべると左手で紫

電を生み出しながら言い返した。

「まあ任せてよ……もつとも、失敗しちゃって、親御さんの代理演算も奪っちゃうかもだけど」

一方通行は呆れたようにため息をつく。

「やっぱり、他の奴らには見習わせたくねえな……」

一方通行は正面にいる駆動鎧たちを見つめる。

すでに電極は能力使用モードに切り替わっている。

「雑魚どもが……調子乗ってんじゃあねえぞ!……!」



## 圧倒

学園都市最強のレベル5、アクセラレータ一方通行。

彼もあくまでただの人であり、ましてや学生だ。

複数のバウンドスーツ駆動鎧を同時に相手なんて簡単にできるはずがない。

そう氷堂は思っていた。

だが、その考えは一瞬にして消え去った。

竜巻が現れたかと思うと、駆動鎧の一体を地面に叩きつけ、駆動鎧を破壊し、

手を軽く振ったかと思うと烈風が炸裂して5、6体がおよそビル20メートル先のビルの壁にめり込んだ。

窓ガラスの破片や、駆動鎧の破片が彼に降りかかるが、彼はそれすらも反射した。

「くっだらねエ・・・」

一方通行はそうつぶやくと、背中から4本の竜巻を出して高速で移動し、一方通行に怯えて動けないでいる一体の駆動鎧の懐に潜り込むと能力を使用した拳を叩き込んだ。

グシャツ！！！！辺りに分厚い装甲がくだける音が響く。

近くにいた駆動鎧がその巨大で破壊力がある拳をくりだした。

だが、一方通行の手前で鈍い音がすると同時に、駆動鎧の手首の部分が碎け散った。

空中に拳の部分にあっただはずの部品が飛び散る。

一方通行は静かにそちらに視線を移すと、落ち着いたようすで駆動鎧の肘のあたりをつかみ、

ゴミを捨てるような軽いしぐさで駆動鎧を投げた。

手首だけで投げられた駆動鎧はありえない速度で10メートル先の壁に激突するまで飛んでいった。

『ひ、ひい!!』

残りの駆動鎧たちが怯えて後に下がった。

一方通行はその残党の中心に足の裏の裏のベクトルを操作してロケットのように突っ込み、着地すると、

地面を踏みつけた。

どうベクトルを操作したのか、駆動鎧たちは地面からの衝撃のようなものを受け、吹き飛んだ。

亀裂だらけの道路の上で一方通行は静かに告げる。

「さアて、そろそろ愉快で楽しいおしゃべりの時間だぜエ」



一方通行が戦闘を終えて一時間経ったところ、襲撃を受けた六人は風ジャジメント紀委員第177支部にいた。

固法美偉は腕を組んで、難しい顔で立っている。

「……なるほどね。敵の今回の目的は、あくまで実験……佐天さんは今の所無事……ね」

初春飾利はソファに座りながら、手を動かしながら答える。

「はい、そうみたいですけど……実験の内容までは、部下にも知らされてなかったようですね」

「それにしても、ひどいですわね……部下の命を、人の命を、何だと思っているんですの!？」

白井は強い口調で二人の間に割って入る。

その横に座っている御坂は下を向いていて顔を上げようとしな

彼女もただの女子中学生に過ぎない……。

妹達の一件のときにしても、今回にしても、目の前で人の命を奪わ  
れている。

それでショックを受けないわけがなかった。

落ち込んでいる御坂を横目で見ながら白井は齒軋りを立てている。

それから一段落おいて、固法は話し出す。

「……それで……天地海斗くんについては？」

初春はチラッと秋野を見た。

落ち込んでいて、目の周りが赤くなっている。

さきほどまで泣いていたということは誰でも理解できた。

「天地さんのことは・・・死亡したと聞いていたそうです・・・」

あたりをしばらくの間、沈黙が支配した。

沈黙を破るように秋野が呟いた。

「どこに居るの?・・・海斗お・・・今、どこに居るの?・・・グスツ、お願い・・・無事なら・・・グスツ」

今まで、無理していたのだろう。関をきつたように涙が溢れ出す。

今の少女に声をかけられる者など居なかった。

それを聞いた重藤が悔しそうな顔をしながら立ち上がり、固法を見ると、こっちはなしだす。

「アジトの場所も吐かせました。この地図に目印をつけています。おそらく地下です。」

かなり入り込んでますが、今から、佐天さん救出のために動き  
ましょう」

「わたくしも行きますの」

白井が重藤から地図をひったくるようにして奪い取る。

彼女の目を見た重藤は不適にも笑ってしまった。

「じゃあ作戦を『ズズー……ンツツツ……!!!!』」

突如、街中に轟音が鳴り響いた。

「……!!!!……!!!!……??」

その場に居た全員は一斉にそとに出た。

全員の視線が遠くに居た、ある怪物に釘付けになった。

その怪物は天使のような、赤ん坊のような怪物だった。

固法、御坂、白井、初春はその怪物に見覚えがあった。

「「「「あ、あれはッッ！！」「」「」」

。幻想猛獣（AIMバースト）

レベルアップ  
幻想御手事件で出現した怪物。

いくつもの能力を使用したか、御坂により倒された怪物だった。

だが、御坂たちは今、体中に冷や汗が流れているのがわかった。

（存在感がまるで違う!?・・・どういうこと!?しかも、一体じやあないッ!?!?)

AIMバーストは一体ではなく、三対同時に出現したのだ。

驚いて、立ち尽くす御坂の肩に重藤は手をポンツと手を置くと全員にこう促す。

「とりあえず、初春さんは支部から皆に情報提供を、秋野さんと氷堂さんはもしものために支部で待機!!」

固法先輩は能力を使用して、敵の有無、逃げ遅れている人の発見、後、白井さんとともに避難誘導をお願いします!!」

(くそッ!...!どっする!...?)

初春と秋野と氷堂と固法は、戸惑いながらも言われたことをするために、動き出した。

そんな中、白井は先ほど重藤から取り上げた地図を食い入るように見つめている。

重藤はそんな白井を見て、こういった。

「まさか、白井さん!...!」

白井は重藤を手で制すと真剣な眼差しで重藤の方をみる。

「わたくしが止めてみせますわ!...それ以外、方法はないですわ!」

「だめだ!...!」

「いいえ!わたくしはもう、行きますわ」

白井は空間移動テレポートを使ってその場所（敵地）に行くために地図を見よ  
うとした。

その瞬間、茶色い、ボロボロのマント  
を纏った人物が白井の手にあつた地図をひったくつた。

「なッ！！！！？」

白井は焦って取り返そうと、身構えたが、腕を重藤につかまれ、そ  
の人物が走り去るのをただ見ていた。

白井は怒りをあらわにした表情で振り返るが、重藤の顔はどこか安  
心したようなすっきりした顔だった。

重藤はニコツと笑う。



「あいつに任せようぜ・・・アレは俺の頼りになる友人だからな・・・」

白井さん、避難誘導は任せた！！御坂さんッ！！！！」

御坂はため息をつくど、落ち着きを取り戻した表情で呟く。

「そうよね・・・いつまでもウジウジするのは、私の性に合わないわね！！」

「俺たちであの化け物を止めるぞ！！！！」

「言われなくても！！！！」

啞然とする白井を置いて、重藤と御坂はAIMバーストのいる方向に走り出した。



## 戦闘開始

AIMバーストの正面に御坂美琴と重藤司はいた。

AIMバーストは二人にまだ気付いていないらしく、街の中をゆっくりと歩いている。

そんな怪物を見上げながら二人は戦う準備をしている。

御坂はチラリと重藤のほうをみるとこう言った。

「・・・アンタはあんなのと戦えるわけ？」

当然の質問だった。

重藤の真の実力はぶっちゃけた話、初春や固法ぐらいしか知らない。

しかもレベル5の御坂でも威圧感を感じたほどの相手×3だ。

レベルが4であっても命の保障は出来ないだろう。

そんな考えから御坂は質問したわけだが……。

重藤はポケットからガムを取り出し、口に含むと御坂のほづをニヤニヤした笑みで見ながら言う。

「もしかして、びびってるのか？まあ、第三位様と言っても？所詮はガキだしな……とくに胸とか」

「……いい加減にしないと怒るわよ？」

静かながらも威圧感を放つ御坂に重藤はあわてた様子で

「いやいや、今は冗談です……はい」

「来たわよ!!」

御坂の声とともに何かが飛んできた。

とっさに二人はそれぞれ逆の方向に飛んで避けた。

「私はこっちを！！」

「じゃあ俺はこっちを！！」

お互い砂埃のせいで相手が見えないが、声でお互いの無事とするべきことを伝え合った。

二人のとつた行動は挟み撃ちだった。

相手は三体いて自分達は二人。

数での不利を補うためにはこうするしかなかった。

AIMバーストの腕らしきものが余所見をしている重藤に襲い掛かった。

だが、重藤の手前で腕は弾けとんだ。

重藤に十数個ほどの氷の大きな塊のようなものが襲い掛かる。

重藤はゆっくりと視線をAIMバーストに移すと右手を横に振った。

バキッ!!という音とともに氷の塊が全て粉々に砕かれた。

(この砂埃のおかげで、何が起きているのかわからなくてすむ・・・)

つまり・・・・・・本気を出せる!!!(

「悪いな怪物!お前らはお呼びじゃあねえんだ!!!!」

ここはとある研究所。

金属質の壁の廊下を一人の研究員が歩いていた。

コツコツと足音を鳴らして歩いている。

不意に、銃声がしたかと思うと研究員の足の太もものあたりに激痛が走った。

「ぐッ!? ああ!」

研究員は足を押さえ込みながら倒れこむ。

人が近づいてくるのがわかり、助けてもらおうと考えたのか顔をあげた。

ガチャリッ! という金属音とともに額に冷たいものが突きつけられたのがわかった。

拳銃を突きつけている人物は茶色いボロボロのマントを羽織っていて、どんな人物かわからない。

研究員の足を押さえている手は指と指の間から血が漏れて、真っ赤なっている。

「……………ここまで狭い通路や排気口なんかを通るのに苦労したんだ。」

さて、佐天涙子のいる部屋教えろ」

茶色いマントを着た男は顔が真っ青になっている研究員に銃を突きつけたまま問う。

一方、研究員は冷や汗を流しながらも答えた。

「こ、ここからすぐの突き当たりにある！夜渦さんの部屋から行ける研究室です！！！」

「わかった」

茶色いマントを着た男は拳銃を構えたまま立ち上がると、研究員のもう片方の足を撃った。

「ぎいやああああ！！！」



「これで勘弁してやる・・・」

茶色いマンツの男はそう呟くと研究員に背を向けて、夜渦のいる部屋にむかって歩き出した。

夜渦は楽しそうにモニターから外の様子を眺めて楽しんでいた。

金属製の壁に床といった無機質な輝きを放つ部屋でくつろいでいた。

（アレイスターのようにはいかなえか！だが！！上出来だ！！）

。　　ズバツ！！という音とともに扉が切り刻まれた

夜渦はユラリと立ち上がって扉のほうを見た。

そこには茶色いマントを羽織い、『赤い刀』を右手に持った男が立っていた。

茶色いマントを被った男は、左手でそのマントを脱ぎ捨てる。

バサツ！という音とともに茶色いマントが扉の残骸の上に覆いかぶさった。



「俺を殺せるとでも?」

「できるぞ」

「ひやはははは!?!」

「ハハハハハハ!?!」

二人はそれぞれ攻撃を繰り出す体制に入った。

夜渦の腕が動き、黒い光が同時に動き出すとともに、海斗も赤い光を纏った刀を持って動き出した。

「「行くぞ!?!」」

二人の目的は互いの命。

どちらかが死ぬまで終わらない戦いが始まった。



〜空白〜(前書き)

短いw

く空白く

先日、海斗が夜渦に敗北してから十数分経った頃。

海斗はどこかわからない路地裏で目を覚ました。

(なんで………生きてるんだ?)

自分の背中の下にシートのようなものが敷かれているのがわかった。

「がッッ!!?」

海斗は体を起き上がらせ怪我を確認しようとするが、体中を激痛が走り抜け、

再び地面に仰向けで倒れる。

「動かないでください。まだ応急処置で出血を止めて、

少し傷を治して、死ぬまでの時間を伸ばしただけですから話せるようにしたくらいですから」

声のした方向を見ると、この間、雑貨屋で助けた少女が自分のそばに座り込んでいた。

なぜか彼女の額には血が滲んで赤くなっている包帯が巻かれている。

黒髪の少女はゆっくり立ち上がると海斗を中心になにやら木の枝で呪文のようなものを書き出した。

何をしているんだ？海斗はそう思いながら少女の姿を目で追い続けた。

( ……この雰囲気 ……声 ……まさか …… )

少女は一通りの作業を終えたのか、ゆっくりと海斗の隣まで歩いてくると満面の笑みで微笑んだ。

「もう、気付いちゃいましたか …… 天地君」

「おま …… え …… 真紀な …… のか？」

真紀と呼ばれた少女は少しさびしそうな顔をしたかと思うと黒い髪



を払ってこういった。

「色々あったんです。死人扱いになって自由になりましたから、世界を渡り歩いたり、

いろんな友達を作ったり、魔術を学んだり……

私を受け入れてくれた家族もいました……でもそれも戦争で……奪われました。

そして、絶望していた私を助けてくれたのは……  
悪党でした」

「……な……んでッ!!」

海斗は搾り出すような声で天川に反論する。

「な……んでッ!!お前……は怪我をしてるッ!?!」

海斗の視線の先は天川のしている包帯だった。

見た目からして、怪我をしてからまだ間もないことは海斗でもすぐ

見抜けた。

天川は自分の額につけられている包帯に右手で触れると視線を額のほうに向けた。

「これは、能力者が魔術をつかった時におきる拒絶反応によるものです……

でも私の能力は血流操作が出来るので痛いだけで、命に別状はありませんよ」

海斗はもう一度自分の周囲に書かれた呪文を確認すると天川を睨みつける。

「俺ツ……は！！夜渦にツ！……勝てなかつたんだぞ！！」

助けてもすぐ死ぬかもしれないねえツ！！そんな奴をツ！……助ける気かよツ！！」

天川は優しく微笑むと手を祈るように重ね合わせる。

それと同時に先ほど書かれた呪文から少しずつ真っ白な光が放たれ、徐々に海斗の視界を光が埋め尽くしていく。

祈るような姿勢のまま天川はこう告げた。

「何も、問題ないです。『貴方』なら勝てます」

「ま、待てッ!!」

真っ白な光が海斗の視界を埋め尽くした。

ガバツ!!!

海斗が目を覚ますと天川の姿はどこにもなかった。

夢かと思いいどりを見回すと、くつきりと呪文のようなものの一部が残っていた。

海斗は服を脱ぎ捨て、自分の体の傷を確認する。

(・・・ふさがってる・・・これが・・・魔術?)

生々しい傷跡こそ残っているものの、

完全に傷口は塞がれていて普通に動ける状態になっていた。

海斗は再び服を着て、立ち上がると

そばに置かれていた真新しい折りたたみ式ナイフを持ち上げる。

(真紀の奴・・・)

その瞬間、ズズーンッ!!と巨大な物が落ちる音がした。

(わかったぜ……真紀)

海斗は意を決したようにそばに置いてあった茶色いマントを羽織ると裏路地から飛び出した。

(……必ず、勝って、佐天を助けてみせる!!!!)

## 悪党VS最悪

普通の研究室よりちょっと広い研究室で二人は戦っていた。

夜渦が右手を突き出すと、黒い光が飛び出し、頭上から海斗に襲い掛かる。

海斗は赤い光を纏った刀でそれを受け流すと、高速で夜渦の居るほうに突っ込む。

受け流された黒い光は、床に当たると金属がこすれあつ音を出しながら、床に大きな斬り傷が出来た。

鋭い目つきで夜渦を睨みながら踏み切り、刀を振りかぶる海斗に対し、夜渦は指を動かした。

先ほど海斗を襲った黒い光が複数の剣になり、海斗の背中目ざして飛び出した。

ヒュンツと空気を切り裂く音がした。

その瞬間、海斗は強引に腰をひねり、体の向きを後ろに向けると刀

を振るった。

「同じ手をくらうかよ!」

ガキンッ！赤い閃光とともに黒い剣はすべて叩き落された。

さらに体をひねり、一回転すると夜渦に切りかかる。

(じいっ！)

夜渦はとっさにバックステップでかわすが、夜渦の左肩に刀の切先がかすり、かすかに血が出る。

スタッ!と地面に着地すると静かに夜渦のほうに向き直る。

それを見た夜渦はバカにするように笑うと、突然、雰囲気を変えて言う。

「見くびるなよ……俺の黒い呪術の本領は………殺戮だ」  
ブラックカーテン

ガッ！という音とともに黒い光が先ほどまでよりも凄まじい威圧感を放ちながら夜渦の後ろに出現した。

辺りを覆いつくすほどの黒い光が衝撃波のようになって海斗に襲い掛かる。

（なんだよ！？これがこいつの本気かッ！？）

刀身に赤い光を纏わせた刀で黒い光を受け止める。

ガガガガガガガッ！！！！！！！！受け止め切れなかった黒い光の衝撃波が海斗の体中に浅い切傷を作っていく。





AIMバーストを相手に重藤と御坂は戦っていた。

「ったく!!しつこいわね!!」

御坂はそう言いながらAIMバーストの触手を砂鉄の剣で切り落とす。

(・・・前と同じ再生力!!これはまずいわね・・・)

AIMバーストの核を撃ち抜こうと御坂はポケットからコインを取り出す。

だが、突然発生した烈風を受けて、体ごと地面に叩きつけられる。

「ぐッ!!」

おそらく、AIMバーストの仕業だろう。

「御坂さんッ!!!!!!」

重藤が叫ぶが、余所見をした重藤に爆風のような物が放たれた。

「くそ!!!この野郎が!!!」

とっさに重藤は能力を使用して爆風を防ぐ。

(・・・この再生力・・・勘弁してくれよ)

二人はかれこれ、十分間も戦っていた。

相手は異常な再生力を持っていたため、二人とも苦戦をしいられていた。

すでに二人の制服は埃や煤だらけでボロボロだった。

周りの道路やビルは破壊され、廃墟のようになってしまっている。

足元にガラスの破片や、ビルの瓦礫、アスファルトの塊などがゴロゴロ転がっている。

ブンッ！という音とともにAIMバーストの腕が倒れている御坂にむかって振り下ろされた。

(ま                      ずい                      ツー！)

御坂も気付いて移動しようとしたが体が動かなかった。

重藤もどうすることもできない。

ズズーンッ!!

一人の少女の居た場所が叩き潰される音がした。

だが、AIMバーストの腕の下には何もなかった。

重藤は砂埃のなかに一人の人を確認した。

「アクセラレータ一方通行ッ!?!」

一方通行は背中から四本の竜巻を生やして空中にいる。

その両腕は攻撃の余波をうけたのか気絶した御坂美琴が抱きかかえられていた。

「どうしてここに？相手の研究所に乗り込んだんじゃあ！？」

「それはあのガキに譲った……」

数十分前、夜渦の研究所前にて。

ミサカウエスト  
番外個体と一方通行は敵の研究所の扉の前に居た。

他の扉と違い、分厚く、強引に開けてもセキュリティが発動しそうな扉だった。

一方通行はその白い髪を手で抑えながら番外個体に目をやる。

「オマエなら開けられるんじゃないか？」

「何言ってるのかな？親御さん。この程度なら誰でも開けられるよあ、親御さんは無理だったかな？」

一方通行をバカにしたような目で見ながら、扉に近づいて左手をかざすと紫電を放った。

扉は電子音を放ちながらゆっくりと開いた。

一方通行は研究所に入ろうと足を進めだしたとき、目の前に茶色いマントを被った男が現れた。

一方通行はその人物を睨むようにして立っていた。

「オマエ………死んだはずじゃあなかったのか？」

「ここは俺一人に任せてくれねえか？」

「無理だ。オマエこそ死に損ないだろオが！引ッ込ンでろ」

「………御坂たちが今、AIMバーストと戦っている」

「それがどオした？あいつはレベル5だ。やられるはずがねエ」

「本調子ならな………それに相手の再生力は異常だ。そろそろ  
まずいころだろう……」

お前にしか任せられねえ」

茶色いマントの男はそう告げると研究所のほうへ入っていく。

一方、番外個体はニヤニヤしながら一方通行の顔を覗き込もうとしていた。



それを手で制すると一方通行は電極チヨーカーのスイッチを切り替え、

現代的なデザインの杖をしまい、研究所に背を向けた。

「やっぱり行くの？」

「あア……………」

そして、現在。

一方通行は重藤の横に降り立つと、御坂を重藤に渡す。

「コイツはオマエがどうにかしろ・・・これ以上は俺がする義理はねエしな」

「だけど、この怪物どもはどうするんだ？いくらお前の能力でも！この再生力の前じゃあ！しかも三体だぞ！？」

「その心配はないと思うけど？」

番外個体は突然空中から落ちてくると、重藤の問いに答えた。

おそらく磁力を操作してここにきたのだろう。

理解できないと言う重藤を番外個体は一方通行のほうを指差して言う。

「この人の『力』はそんな物じゃあないみたい　まあ、ミサカも逃げるけど」

一方通行は飛んできた氷の塊を反射して、AIMバーストの正面にたった。

「出来ない科学の天使ってどこか・・・」

出来損ないが！！一般人巻き込んでんじゃあねえよ！！」

直後、ドバツッ！！という音とともに一方通行の背中か

ら黒い翼がはじけるように飛び出した。

真つ黒な噴射の翼。

AIMバースト三体と一方通行。

怪物同士の戦いが始まる。

悪党VS最悪(後書き)

あれ？一通さん、かつこよすぎじゃないですか？w

## 冠と強さ

黒い翼は100ほどに分かれるとAIMバーストの一体を攻撃もろともスタスタに引き裂いた。

『 g a d g k k s j u g キイ a h i o a s ! ! 』

声にノイズのようなものを交えながらAIMバーストは叫ぶ。

(前の科学の天使よりは化け物っぽいなア!!人型でもねエ分、戦いやすいが)

ふと、AIMバーストの裂けた隙間から一瞬だが一方通行アクセラレータの視界の端に三角柱の物体が写った。

一方通行はその物体に見覚えがあった。

エイワスなどという、得体のしれない相手と戦った時のかつての記憶が脳裏によみがえる。

(チィッ!!そこも同じってことかよ!!!)

眉をひそめる一方通行に横から残り二体のAIMバーストから、嵐のような攻撃が降り注ぐ。

それを黒い噴射の翼の右翼で叩き落とすと、

残りの左翼をさらに分裂させてなぎ払うように振るうと、再生している最中のAIMバーストの『核』を粉々に砕いた。

バギンツッ!!!

『j i h a h キヤアア p o n j k l ! ! ! ! !』

悲鳴のようなものを上げながらAIMバーストの一体が消滅していく。

その間にも残りの二体の放った爆風や氷の塊、烈風、雷などの攻撃が音を立てながら一方通行に降り注ぐ。





一方通行の雄叫びとともに倒れたAIMバーストの『核』のあろう場所がもぎ取られた。

ブチイイツッ！！！！！

三角柱の物体がさらに地面にめり込んだかと思うと、パキーンツ！と水晶の碎ける音があたりに響くと

地面に横たわっていたAIMバーストは光を放ちながら消滅していった。

「・・・がッ！？（クソツたれ！！この力を使い続けるのがこんなに辛エとはなア！！）」

一方通行が頭を抑えてよろめいた瞬間、最後のAIMバーストが強烈な爆風を放った。

（しまッ！！！！！！）

一方通行は爆風を受けてビルの瓦礫の山に叩きつけられた。



おそらく、アレが放たれれば、どうなるかなど、意識がさきほど飛びかけた一方通行でもすぐ理解できた。

「……（ハハッ！この俺がヒーローみてエな役回りするなんてなア！！笑わせる！！）」



だが、裏を返せば、どちらか片方に留まることができないということになる。

(・・・なんで俺は・・・『悪党』にこだわってるんだ?)

率直な疑問だった。

自身の中でじっくりと考える。

まず、なぜ研究所を破壊して回っていた?

うらみだけか? いや違う

。

ただ、実験で人の命が奪われることが許せなかった。

それに、いつしか自分の仲間が襲われることを恐れたからだ。

そして、『悪党』であり続けること＝仲間を守るなのか？

かつて、学園都市最強のレベル5も、圧倒的力を前にし、ロシアにて最弱とされるレベル0に敗北したときに、

そんな考えを持ったことがあった。

そうして最強は、『悪党』という冠を捨て去った。

だが、彼、天地海斗の今までの考え方は違った。

『悪党』という冠を捨てることは己の今までのを否定することだ。

それを心のどこかで恐れていたのかもしれない。



赤い閃光が黒い衝撃波を切り裂いた。

切り裂かれて勢いを失った衝撃波はあたりに散り、消えうせる。

「なツツ!!?」

目を大きく見開いて驚く夜渦にどこかすっきりした顔の海斗は好戦的な笑みを浮かべて刀を構える。

「そろそろ決着をつけようぜ!!オチ最悪!!オチ!!オチ!!オチ!!オチ!!」





冠と強さ(後書き)

次話、ついに決着!!

## 名

(あの攻撃は反射できるかわからねエ……だが撃たせるわけにはいかねエ!!)

額に当てていた手をどけると、一方通行はAIMバーストを睨む。

黒い翼を出し続けている彼の体力はかなり削られていた。

それでも彼は戦うことを止めない。

瓦礫を踏み分け、不安定な体勢を立て直す。

……(アレがオレの後ろに放たれれば、おそらくかなりの被害が出る……)

基本、一般人がどオなるオが知ったこっちゃねエ!!

……(だが、あのガキを取り巻く環境を潰そうって言うのなら……)

バキバキバキバキッ!!!

一方通行の背中アクセラレータの黒い翼が真っ白に染まり、

一方通行の頭には天使のような輪っかが出来た。

(容赦はしねエゾオ!!!)

一方通行は静かに、

いまだエネルギーらしき物を集めているAIMバーストを見上げ、  
不適な笑みをうかべるところを告げる。

「こっから先は一方通行だ!!!」

.....攻撃だろオが人だろオが通さねエよ!!!

「!!!」

一方通行の体が突如、アクセラレータ砲弾のように真上に飛び上がった。

AIMバーストの正面に出た一方通行は体に白い光を纏わせる。

そしてその真っ白な翼を羽ばたかせて一直線にAIMバーストに突っ込んだ。

ゴオツツ!!!!!!

直後、AIMバーストの集めていた青白いエネルギーが一方通行に向かって放たれる。

青白い光は辺りの瓦礫を巻き上げながら突き進む。

おそらくとんでもない威力なのだろう。地上では砂埃が大量に上がっている。

だが、一方通行は恐れず、ためらいもせず突っ込む。

ドゥッ！！！！！！！！

青白い光線と一方通行が正面衝突した。

二つの力は拮抗している。

一方通行はそのことを自覚すると、不覚にも笑ってしまった。

その笑みの意味するところは、戦いによるものか、自己満足か、それとも覚悟の表れなのか・・・

おそらく今の彼の深層心理は誰にも読み取れないだろう。



その瞬間、一方通行の頭の小さな輪と背中白い翼が消え去った。

白い翼が消えた一方通行は現代的なデザインの杖をつくくと、消滅していくAIMバーストに向かって振り返る。

しばらくAIMバーストを見つめた後、あたりを見回した。

あたりは瓦礫の山だが、人はいない。

そのことを改めて確認した一方通行はため息をつくくと、再び振り返る。

AIMバーストに告げるように一方通行は呟いた。

「くっだらねエことに手間かけさせんじやあねエよ……クソッたれが……」

一方通行はそのまま歩いてその場を去った。





『貴方』なら勝てます

。

天川の言葉を思い出しながら海斗はニィッと笑う。

(そういうことかよ・・・真紀)

刀を握り締めると、海斗は無機質な色の床を蹴って、夜渦の所に向かって大きく踏み出した。

夜渦が両腕を前に突き出すと夜渦の周りに黒い光が現れ、海斗に向かって進んでいく。

途中で分裂し、鋭利な形になって海斗を囲む形で海斗に襲い掛かった。

(俺は解析不能になる!!!悪なんて定規でも測れねえ物にな!!!)

海斗が空中で刀を一振りすると、刀から赤い斬撃が放たれた。

ガッ！！！！

赤い斬撃は黒い光に当たると大きな音を立てて黒い光を打ち砕いた。

黒い光が割れたガラスの破片のようになってあたりに散らばる。

夜渦はその光景を不満そうに見つめると

「いい加減死にやがれ！！この死に損ないがあ！！！！」

「まだお前が勝てる前提でいんのかよ？」

冷静な声で海斗は答え、さらに地面を蹴って高速で夜渦に斬りかかる。

夜渦は黒い光をサーベル状にしたものを手にすると海斗に斬りかか

った。

ガキインツ！！！！！！

赤い光と黒い光が反発しあつかのような勢いでぶつかる。

二人の衝突の余波で無機質輝きを放つ床に傷が入っていく。

獣の爪あとのように傷が入っていく床を無視して二人はそれぞれ、自分の敵をにらんでいた。

「ひやははは」

夜渦の笑い声とともに夜渦の背後に黒い光の塊が現れる。

今、海斗と夜渦は鏝迫り合いの状況にあって、お互い動けなかった。

そんな海斗に向かって夜渦は

現れた黒い光を光線を海斗に向かって放つ。

海斗に向かって伸びていく光線は黒い一本の槍のようにも見えた。

「ツツ!!」

とっさに海斗は右足に力を込めて床を思いっきり蹴った。

夜渦のサーベルによる一撃が服を掠る。

ズガガガガガツツ!!!!!!

続いて夜渦の放った光線が海斗のいた場所を削りとった。

海斗の元いた場所がクレーターのように凹む。

その衝撃を受けて海斗は少しだけ吹き飛ばが、2、3回転床を転がるとすぐに起き上がった。

ジャリツという足音を立てながら夜渦は海斗のいる方向体の向きを向けた。

ズバツ!!

「は!?!」

声を上げたのは夜渦だった。

右手にサーベルを持っていた夜渦の視線が自身の左腕に移る。

ちょうど、左腕が赤い斬撃により肩から下を切り取られている真っ

最中だった。

起き上がる瞬間に海斗は赤い斬撃を放っていたのだ。

夜渦もまさかそんな体勢で、しかもとっさの状況で、そんな攻撃を放ってくるとは思わなかった。

また、いままで海斗の全ての攻撃を防いできた黒い呪術が、斬撃を通すとも思えなかった。

「ガッ！！？あああああああああああッ！！！！」

夜渦の絶叫とともに噴水のように夜渦の左肩から地が噴出す。

いままで無機質な輝きを放っていた床が赤黒い色で塗り潰されていく。

夜渦は凄まじい形相でボロボロの海斗を睨む。

その表情は怒りでいっぱいだった。

「今まで、俺の黒い呪術も黒い呪術もお前を上回っていたはずだ！！」

「一体何をしゃがった！！！！」

「ハハハ！！答えてみるよ」

「殺すッ！！！！！！！！！！」

夜渦は右手に持っていたサーベルにさらに黒い光を集約させて大きな剣にした。

長さはおおよそ5、6メートルくらいの恐ろしい剣だった。

「教えてやるよ！『最悪』であるテメエは悪っていう定規で測れるが……」

それに対し、海斗は刀身に赤い光を纏わせた刀を構えると走り出し





海斗は自分の武器を確認することもなく夜渦の懐に入り、赤い光を放つ刀を振るう。

ズバツツ!!!!!!!!!!!!!!

「解析<sup>オレ</sup>不能は……誰にも測れねえ」

胴体にまともに一太刀をくらった夜渦の体に赤い一本の線が出る。

海斗はそれも確認せずに能力を解除して刀をただの折りたたみ式ナイフに戻すと、夜渦の部屋の奥の扉に向かい、

足を進めだした。

グシャッ！と夜渦の倒れる音がするが目もくれずに扉を開けるとこう言い放った。

「じゃあなクソ野郎！！一応、生かしてやってたぜ。

多分、一生車椅子だろうから……ずっと檻の中で反省してろ！！」

（さあて、サッサと佐天を助けるか……）

名（後書き）

次章は不幸少年が登場する予定。



## 帰還

夜渦の研究室の奥にある扉をくぐり、海斗は別の研究室にいた。

この部屋に扉はいくつもあったが、すべてロックされていた。

(これですぐ外に出られる)

部屋の隅のコンピューターでロックを解除した海斗は部屋を見渡す。

部屋はそれほど広くなく、部屋の中央にはごっこつした機械仕掛けの椅子に佐天が座らされていて、

頭にはなにやら装置のようなものが着けられていた。

座っている佐天の肩にはコー太がいる。二人とも強引に眠らされたのかいまだ寝ていた。

海斗は佐天の近くまでかけよると頭にかぶさっていた装置をとり、佐天を抱きかかえた。

（アンチスキル警備員に通報したし、とりあえず外に出るか……）

「ん……」

「佐天？目が覚めたのか？」

海斗に抱きかかえられた佐天が目を覚ました。

まだ意識がはつきりしていないのか、薬かなにかによるものか、立つて歩くことはできないようだ。

佐天はうつろな瞳で海斗を見つめると目に涙を浮かべて

「うつうつ、死んじゃうんじゃないかって……ずっと心配して  
たんですよ？でも、助けに来てくれた……」

海斗はポカンとした表情になると、すぐに笑顔になる。

「ハハハ！心配かけたけどよ？助けに来たぜ！！佐天！」

「天地さん……」



「もう、歩けるか？」

「少しなら……」

佐天をゆっくりと立たせた海斗は一瞬フラフラッと倒れそうになる  
佐天を心配そうに見る。

「やっぱり俺が……」

次の瞬間、つい先ほどロックをはずした扉が開いた。

「「!？」」

とっさの出来事に海斗は身構えたが、そこから入ってきたのは海斗  
のよく知る人物だった。

「し、重藤？」

海斗に向かってカツカツと歩いてきた重藤は次の瞬間、思いつきり

海斗を殴り飛ばした。

「なに俺らを心配させてんだ！！！！！！！この野郎！！！！！！！！」

ドガッ！！！！

「ガッ！」

思いっきりなぐり飛ばされた海斗は仰向けに倒れる。

海斗は怒りの衝動を抑えながらゆっくりと体を起こした。

「テメエ、何しやが」

そのまま何か言おうとした瞬間、突然、何かに体当たりされ、もう一度あお向けになる。

「海斗お~~~~~~~~」

「うおッ!？」

ゴツンッ!と床に頭を打った海斗は頭を片手で抑えながら自分に乗っかっている人物を見た。

「あ、綾!？」

「海斗のバカ!!!生きてるのならッ!!連絡くらいいれてよお・・・グスッ!」

秋野は海斗に馬乗りになっただまま海斗の胸倉を?み、ポタポタと涙を落とした。

顔に涙が当たった海斗は少し申し訳なさそうな顔になり、体から力を抜いてため息を吐いた。

やれやれといった調子で重藤は腕を組んでいる。

そのそばには、目元を赤くした氷堂が立っていた。

佐天のほうに目をやると、いつの間にか来た初春が、怪我ありませんか?本当に大丈夫ですか?と泣きじゃくりながら聞いている。

佐天はそれらを手で制し、若干顔を強張らせながら大丈夫と告げている。

「グスツ……でも」

海斗は視線を目の前の秋野に戻した。

秋野は袖で目元をふくところ告げた。

「本当に……無事で良かった……」

海斗はついついにやけてしまった。

自分を心配してくれる仲間がこんなにもいる。

そう思うと笑みが止まらなかった。

冷たい床の温度を背に感じながら、海斗は秋野にむかって言う。

「ありがとつな・・・・・・・・綾」

「いや〜どう説教するのヨミカワ？ってミサカはミサカは問いただしてみたり」

とあるマンションの一角でテーブルの上で黄泉川と打ち止めと番外  
ワースト  
ミサカ  
个体と

アクセラレータ  
一方通行が話していた。

一方通行はだるそうに肘を立てて、窓の外に視線をやっている。

「決まってるじゃんよ！鉄拳制裁じゃん？」

黄泉川の言葉に反応して一方通行が口を開いた。

「つつーかよオ。オマエがそう簡単に生徒を殴り飛ばしていいのか  
よっ。」

「これも教育じゃんよー！」

「ミサカ的にも何か裏を感じるけど？やっぱり親御さん、何か怒り  
でも買ってたんじゃない？」

意地悪そうな顔で番外个体は横の席の一方通行に目をやる。

「そのうち暴力教師なんていわれかねないわよ愛穂」

ティーカップを片手にテーブルに芳川が歩み寄りながら会話に入ってくる。

「じゃあどうするの？」

打ち止めの問いに、芳川はしばらく考えるしぐさを見せた後、人差し指をピンと立てて答えた。

「しばらくの間、エプロンを着用して、掃除等を毎日する……  
とか？」

「……オイ」

「それいいじゃんよ……」

「それでいいかも！ってミサカはミサカは思いつきり肯定してみたり……」

バンツ！とテーブルを叩いた打ち止めは目を輝かせる。

一方通行は不機嫌そうな顔になり、番外個体を横目で見る。

「いやあ、家庭的一方通行が見れるとなると、皆賛成するよ」

「なんでそうなるんだ！！」

ドンツ！！とテーブルを叩く一方通行に皆、慣れた様子で物を言っている。

この姿からは、誰もかつての一方通行など思いつかないだろう。

「あ、ちなみに『二人とも』ね」

芳川のその言葉を聞いて苦笑いしたのは番外個体だった。

「えツ？ミ、ミサカも？」

「当たり前だろオが」



神隠し編  
~~~~~  
完
~~~~~



幸福？（前書き）

幸福？

「とりあえず、絶対当ててね？海斗！！」

「俺である必要はねえだろ？」

海斗は今、秋野と二人で長蛇の列に並んでいた。

あの事件からおよそ二週間。

海斗はなんとも言えぬ気持ちでいた。

かつて自分を二度も救ってくれた少女は、どのような方法で探そうが見つかからない。

かといって、忘れることなどするわけないし、第一忘れることもできない。

あれは夢だったのか？でも……。

そんな考えを抱きながら、海斗はブーツと青い空を眺めていた。

『~~~~~』

海斗の右肩に乗っているコー太は暇そうにあくびをしている。

海斗は視線を空からはずすと、チラツと秋野の持っているチラシを見た。

秋野の持っているチラシには、『開業10年記念！イギリス、7泊八日の旅！！（ペア二名さま×2）』と書かれている。

長蛇の列の一番前には、福引らしきものが行われていた。

徐々に前が少なくなっていく、次が自分の番になった海斗はため息をつく。

「当たるわけねえだろ？」

「何度でもさせるよ?」

「お前は鬼か!?!」

「む!かわいい女の子を捕まえて鬼とはよく言っね」

「ほぞけ」

秋野は海斗の顔を覗き込むように身を乗り出し、ニヤニヤとした顔で言う。

海斗はそれを軽くいなすと前の人物を見た。

ツンツン頭の少年と修道服の少女……それを見た海斗は小首をかしげる。

(シスター?なぜこんな所に?隣の奴の付き添いか?)

ここは普通のスーパーなどの前で、白い光を放つ店内の様子もよく見える。

地面も普通に味気ないアスファルトで、唯一その少女だけがその景色から浮いていた。

カランカランッ！！！

「おめでとございます！！ペア旅行二組のうち一組に選ばれました！！」

「は？あ、当たった？」

「やったね！とーま！！！！イギリス旅行だよ！！！！！！」

エプロン姿の従業員らしき一人が、鐘をならして高らかに声を上げた。

当たった本人はというと、今だ口をポカンと開いている。

海斗は再びため息をつき、横に居る秋野を呆れた様子で見た。

だが、秋野はこちらにキラキラさせた瞳を向けていた。

目は語っている、『当てる』と。

海斗は列を詰めると福引のガラガラするための取っ手に手をかけた。

「はあどーせ当たるわけ……………『カラント』……………は  
？」

真っ赤な玉が転がり落ちる。

カラントカラント！！

「おめでとございます！！イギリスペア旅行、二組目に貴方達が  
当選しました！」

「はわわ？わわわわ」

「何ぶっ壊れてんだ？」

海斗は自分以上に驚いている秋野を置いて、列から出た。

そこにはようやく現実世界に戻ってきたらしい先ほどのツンツン頭



の少年が居た。

「俺らでイタリア旅行ってわけですか・・・俺は上条当麻！よろしくな！！えっとこっちはインデックス」

「どーやらそのようだな・・・えーっと上条・・・でいいか？  
そんでそっちのコスプレは趣味？」

海斗は三毛猫を両手で抱えている銀髪シスターを指差す。

銀髪シスター、インデックスはその言葉を聞いた瞬間、口をとんがらせて海斗の前にでる。

「私はイギリス清教、ネセサリウス必要悪に所属する正真正銘！本物のシスター  
さんなんだよ！

そこら辺のコスプレの人なんかと違ってきつちり魔法名なんかもあるんだからあんなのと一緒にされるなんて心外なんだよ！

ちなみにこっちの猫はスフィンクスっていうの！！それでね  
それでね

圧倒的早さで自己紹介するインデックスの勢いに負けた海斗は頭をかきながら苦笑いを浮かべる。

上条は諦めた様子でうなだれている。

いまだ続くインデックスのマシガントークに対し、何者かが横からインデックスに抱きついた。

「かつわいい〜〜〜〜!!」

「う、うわああッ!」

それによりインデックスの話が途切れる。

「ヘーインデックスちゃんっていうんだ!! 私は秋野綾!! よろしくね!! 後そちらは上条さんでいいのかな?」

「・・・あ、ああ」

「あやでいいんだね? よろしくね! あや!」

二人で話している少女を置いて、上条に向き直る海斗。

うるさい奴同士で話し合ってくれば問題ない。そういう考えを持っていた海斗は今のうちに自己紹介を済ませておくことにする。

「俺は天地海斗だ。レベルは0・・・あいつは俺の幼馴染って奴だ。ちなみに無理やりで連れてこられた」

「じゃあ天地でいいんだな？」

「ああ、まあゆっくり旅行を楽しもうぜ？」

「前は楽しめなかったからなあ・・・今度こそ！！」

上条の前回という言葉を見た海斗の表情が少し驚いた様子になる。

「前回？」

「ああ、前にもこういう感じにイタリア旅行に行ったのはいいんだけどな・・・」

不幸スキルが発動して一日で帰ることになったんだ……  
……思い出しただけでも……不幸だ……」

力なくうなだれる上条に対し、海斗はどこか遠くを見つめる。

(イギリス……か……魔術とか、そういうのについて少し知りたいな……)

今の海斗の脳裏には真紀の姿があった。

『魔術』……『拒絶反応』……そのような単語が嫌に頭からはなれない。

学園都市の外なら、少しはそういうことについて学べるかもしれない……そういう思いが彼の中にあった。

「海斗おーーーーーよく当てた!!! 偉い偉い! ご褒美に頭なでなでしてしんぜよう……」

「……埋めな」

インデックスから離れ、海斗に抱きついてきた秋野がやけにテンションを高くしている。

海斗は秋野を手で引き離しながら冷静に対応する。

「むむむ！？なら抱きしめてあげようか！！？」

「すでにしてるだろ？お前はバカなのか？どうしてそっという方向にしか頭が働かないんだ？」

「いや、健全な男子にはこれが一番かと」

「重藤なら泣いて喜ぶぞ……いや襲われるか」

「あれは変態だよ！」

「……ひでえな」

海斗は不安になった。

この四人で楽しく何事もなく旅行が出来るのか？と。



ここは学園都市のとあるビルの屋上。

強風により黒い髪をなびかせる天川に後ろから金髪にサングラスの男が話しかけてきた。

「ちよつといいかにゃー？」

「なんでしょうか？」

ゆっくりと振り返りながらやわらかい声で聞き返す天川に、金髪の少年、もとい土御門元春は腕を組むと口を開いた。

「率直に言うけど、必要悪に入る気はないかにゃー？あそこならいまの所、学園都市とも友好的だし、

お前が普通に生活するためのことくらいは色々やってくれるだろっからにゃー」

「……………それより、本題はなんでしょうか？土御門さん？」

土御門はコホンッ！と咳をした後、サングラスの奥の瞳が真剣な眼差しになる。

先ほどまでの半分ふざけた様子が消えた。

「さっきのは俺からのお勧めといったところだ。あれも本題だが、今はお前の力を貸して欲しい。

そのために俺達と一緒にイギリスまで来てくれ！！これは必要悪からの願いでもある」

「じゃあ……条件をつけてもいいですか？」

天川はどこか遠くを見ると少しうれしそうに微笑んだ。

土御門は条件がわかっていたらしく、体から力を抜いていつものふざけた雰囲気になった。

「わかったぜよ……必要悪に言っというてやるにゃー。

学園都市での普通の生活は提供してくれるだろうぜい？あと、学校とかはもう察しがついてるから……」



「ありがとうございます」

天川は土御門に歩み寄るとうれしそうに顔から少し真剣な顔になる。

「では、さっそく・・・」

「了解だにゃー」

イギリス旅行

## いざイギリスへ

ザワザワとざわめく空港の中でボストンバッグに荷物を詰めた海斗が立っていた。

いくつかある円柱の柱に背を預け、暇そうな顔をしている。

人が通りすぎていく中、ふとツンツン頭の少年がキャリーケースを片手に歩いてきた。

横には白い修道服を纏った銀髪シスターがとてとてついてきている。

その肩には前いた三毛猫はいなかった。

「よう！天地！お前、早いなあ！？もしかして、一時間前から待っていたりとかするの？」

「かいと！聞いてよ聞いてよ！とうまったらね！

わたしの忠告聞かなかったらもう少してパスポート忘れる所だったんだよ！？」

「んなことねえだろ……三毛猫は？」

海斗は真つ先に思ったことを聞いた。

上条よりも先にインデックスが身を乗り出して答えた。

「スフィンクスならこもえの所に預けたんだよ！それを言うなら貴方の肩に乗っていた犬は？」

「コー太なら友達（佐天）の所に預けた。っつーか、後は綾だけか……」

海斗はそう言いつつ、ズボンのベルトに手を当てる。

彼のベルトの金具の部分には特殊な細工がされており、折りたたみ式ナイフを隠せるようにしてある。

金属探知機などを通過するとき、うまくいくようにといった海斗の細工だ。

まあ、ベルトは一旦外すしな……。

この細工にもかなり苦勞したし、大丈夫だろう。拳銃は持ってくるわけにはいかねえし……。

見た目的にも問題はなはず……。それにしても、綾の奴遅えな……。

そんなことを考えている海斗の目の前にいる上条が向こうを指差した。

そちらのほうを見ると、笑顔でかけてくる秋野が居た。

その右手はキャリーケースの取っ手を持っている。

「あれって秋野じゃあねえか？」

「まったく時間ギリギリだぞ綾……！」

「おーいあや……！」

『ゴメンゴメン……いやーまさか寝坊するとは……テヘッ』

「ビシッ!」『じゅじゅじゅ』

「誤魔化すな」

息を切らしながらも頭をコツンと叩き、舌を出し、片目をつぶる仕事をした秋野の額に軽くチョップした。

自分のバッグを肩からかけると、上条の横に出る。

上条は海斗と同じように自分の荷物を確認し終わると全員にこう促した。

「全員揃ったことだし、行こうぜ?もうそんなに時間がないだろ?」

イギリス、ロンドンにて。

どこかのホテルの個室に四人の人物は集まっていた。

一番小柄でセミロングの髪の少女はテーブルに座っている人物に向けて問う。

「兄貴、ほんとにいいの？イギリスせいきよーの人殺しちゃうよー？」

「構わないよ……僕は人の生き死にそんなにこだわらないからね……」

「いや、正確には興味がないといった所か……」  
「世の中は面白く動いてくれないとね」

「兄貴は妹である私が死のうがお構いなし、ってどこかにやーん？  
ありゃりゃ！そりゃひどいんじゃあないですか！？」

不気味な笑みを浮かべる青年に対して少女は頬を膨らませて言う。

彼らは日本人で、育ちはイギリスといった感じなのだが、日本語もペラペラである。

「おおおお、あたしはいつでも動けるよ！！」

不敵な笑みを浮かべる金髪の少女が話に割ってはいる。

容姿からして彼女の年齢は先ほどの少女よりも年齢が上なのだろう。

「あー大将報告だ。イギリス清教さんが数名の実力者を使って俺たちを潰そうとしているらしいぞ？」

体のごつく、大将と呼ばれた青年よりも遙かに大将らしい黒服の男は携帯をしまいながら言った。

どこにでも居そうな青年は、どこにでも居る子供のように笑顔にな

る。

「ふふふ！！はははははははははは！！！！いいじゃあないか！！最高  
の舞台を整えてくれたね？イギリス清教さん？」

さあ、動き出すとしようじゃあないか！！！！」



同時刻、イギリスにて……………。

二枚の写真を片手に、天川が前を歩く土御門に声をかける。

「そつひなきれいじ創崎怜二……………とそつよきまな創崎愛と他二名。

とくに主犯格の中でもこの二人……………この写真を見る限り・  
・かなり普通ですね」

相変わらずの落ち着いた優しい口調で話す天川に対し、土御門は近くの壁に背をもたれさせると

「ああ、だがとくに兄貴のほうは危険だ。気を付けといて損をすることはない」

すると二人の近くで目を瞑り、話に集中していた180cmくらいある赤髪の神父さんは

タバコをふかしながら目を開くと横目で土御門を見る。

「とりあえず、まずは情報収集から始めようか?」

「だにやー。行くぞステイル、天川」

土御門は背を壁から離すとゆっくりと歩き出す。

天川とステイルは土御門の後ろをついていくように歩き出す。

「わかりました土御門さん」

「了解した」

## ガイド

ここはイギリスのとある空港。

飛行機から降りた四人は人ごみの中を歩いていた。

周りは当然のことだが、外国人だらけでインデックス以外は少しだけなれない様子でいた。

上条は頭をかきながらあたりを見回す。

「しかし外国ってのはいつになっても慣れねえもんだなあ」

「とうまの場合はいつも事件ばかりで、そんなの気にしてられないからかも」

「上条さんってそんなに外国行ってるの？意外と金持ち？」

上条、インデックス、秋野の順で話す中、海斗は頭を抑えて無言でいる。

それに気付いた上条が海斗に声をかけた。

「どうした天地？どこか具合が悪いのか？」

「死にそうだ」

首を傾げる上条に、秋野は横から苦笑いで言った。

「さっき機内で、なんか怪しい飲み物を飲んでからずっとそうだよ  
ね……………」

「確か、アレの名前は『超健康！野菜コーラ！』だったね！意外  
とおいしかったのに……………」

「インデックスさん……………それなんでせう？」

上条はインデックスが両手に持っている、緑ラベルに茶色の液体が入っている怪しげなペットボトルを指差す。

ああこれ？そう言いながらインデックスはそのペットボトルを掲げる。

「これね！さっきあやにおごってもらったんだよ！とつまも飲んでみる？おいしいよー！」

「嘘つけ！何だよそれ！！思いつきり『超健康！野菜コーラ！！』なんて書かれてるじゃあねえか！！？」

それで天地が死にそうになっちまったんだろ！？誰が飲むかッ！！」

「インデックスちゃん・・・よく飲めるよね〜」

「クソッ・・・俺に無理矢理飲ませたのはお前だろ・・・」

歩きながら四人は空港の出口に差し掛かった。

人ゴミから抜けて、涼しい空気が吹き込んでくるのがわかるとやっ  
と着いたかという気分になる。

海斗は風を受けて少し気分がマシになったのか、口を開いた。

「・・・確か、現地ガイドとはここで待ち合わせだったよな？」

「そつだよ！あつてるよね？インデックスちゃん！！」

「間違いないよ！！」こゝであつてる」

「また前みたいに置き去りくらうわけにはいかないよな」

「例えそうなつてもインデックスがいるし大丈夫なはずだ……  
・まだ気持ち悪い……」

「なんだか上条さんの不幸センサーが嫌な予感がすると告げているんですよ」

四人が立ち止まって話し合っていると、外のほうからタツタツタツと誰かがかけてくる音が聞こえた。

四人はその音に釣られてそちらを見る。

「お待たせしましたあ—————！！ガイドをさせていただく創崎愛ちゃんです！！」

私も日本人なので、気軽に話しかけてね」

容姿からしておそらく海斗や秋野と同年代と思えるセミロングの髪の少女に対し、四人はポカンとすることしかできなかつた。

何なんだ？えっと日本人！？ってガイド！？？俺たちとそんなに変わらなくねえか？

それなのに働いているってどういうことだ？

それ以前にこんな奴にガイドをまかせていいのか？

しんどい中、頭をフルに働かせて目の前の少女について考える海斗。

「……綾みたいだ」

ポコッ！！

「よろしくね！愛ちゃん！！私はね、秋野綾！！」

「私はインデックスっていうんだよ！！」

頭を抑えながら海斗は三人に背を向けて上条とヒソヒソ話し合う。

「……………どうリアクションすべきなんだ？」

「(さあ？普通でいいんじゃないか？)」

クルリツと二人は振り返るとコホンツと咳払いした後、自己紹介する。

「俺は上条当麻っていうんだ！よろしくな！」

「俺は天地海斗だ」

「秋野さんにインデックスさんに当麻さんに海斗さんですね？よろしく〜！」

「なぜ俺たちは下の名前なんだ？」

「気にしちゃ負けですよー？」



昨夜、イギリスの空港にて。

誰もあたりには見当たらない深夜、

髪の色は黒でファッションからしても特におかしくない青年がコンテナの上に腰をかけていた。

青年が見下ろす先には神裂火織という、イギリス清教ネセザリウス必要悪所属の魔術師がいた。

「そう怖い顔しないでよ……神裂火織さん？僕は君と戦いに来たわけじゃあないんだ」

「そちらにその気がなかるうとも、こちらにはあります」

「君のしてきたことは確かに凄い。だけどいまいち面白味に欠けるんだよ……」

神裂は青年を見上げながら敵意をあらわにした視線で問う。

彼女の左手には、七天七刀が握られている。

「……貴方の考え方は理解できません」

「だからと言って普通で普通な青年を攻撃するのかい？

君の魔法名の意味こそ理解しがたいねえ。

救われぬものに救いの手を……だっけ？ 実に傲慢な魔法名だよ……自分は救われてますってこと？」

「その通りの意味です。私たちは救われぬものに手を差し伸べるだけです」

「君は世界についてどう思う？」

「は？」

唐突な質問の意味がわからず、目を細める神裂に対し、青年は空を見上げて続ける。

「僕はね、この世界は舞台上、この世界で起きることは一種のシヨ―だと思っているんだ……」

だからこそ面白いことを出来る限り近くで、ゆっくり鑑賞したい……まあ「

トツツと軽く青年はコンテナの上から神裂と同じ地面に降り立った。

そして顔を上げるとかすかに笑う。

「君には理解できないかな？理解して欲しいわけじゃあないけどさ」

神裂は武器を構えると青年  
う。  
いや、創崎怜二の出方を伺

創崎は手を動かした瞬間、魔法名を名乗る。

それにつられるように神裂も魔法名を名乗った。

『Curiousar666（探求し続けるための力を）！！』

『Salvare000（救われぬ者に救いの手を）！！』

突。

イギリスの真夜中に起きた二人の衝

どのような戦いになり、どう終結したかは本人たち以外、誰も知らなかった。

## ガイド2

見慣れない町並みを歩く中、海斗たちは一つのビルの前で立ち止まった。

見慣れない町並みと言っても学園都市のような大量のビルや最新鋭の機器がないだけで

あまり日本の都会と変わらぬ景色だった。若干、それでも日本よりはなんとも言えぬすっきり感があった。

色合いからなのかなあ？そんなことを考えている上条の耳にある声が届く。

「ここが貴方達が泊まることになるホテルです!!」

ふりむくと現地ガイドの創崎愛が持っていた小さい旗をブンブン振っている。

「とりあえず部屋に行こうぜ？皆も早く荷物置きたいだろ？」

「とうま！私は食べたいものがあるんだよ!!」

「とりあえず入ろうぜ？なあ秋野に天地？」

「うん、確かに疲れちゃった」

「……………（まだ気分悪いし、眠い）」

四人は部屋の前に来ると、チラリと自分達についてきている愛を見た。

「……………なんで？」



「いや〜なんだか私も泊まりたいなと思ったのかな!？」

大丈夫!!私、三人でもOKだから!!」

そう言いつつ愛は二人の前の二室の部屋を見つめる。

四人の部屋は上条&インデックス、海斗&秋野の二室に分かれていた。

ようやく状況を理解した上条と海斗と秋野は顔を引きつらせる。

「なんでそうなるんでせう?だいたい、ガイドってそういうものじゃあないだろ!？」

「じゃあメイド兼ねガイドさんってことを新たに売りにさせてもらうね!!」

それより、どうするのー?私今日寝る場所ないよ?まさかかわいい女の子をほったらかしにする気?

襲われちゃうよ!?!きゃー助けてー」

「上条！！頼む！！なあ綾？」

「そ、そうね！上条さん！！」

インデックスは話が理解できていないのかついていけないだけなのか、ポカンとしながら会話を眺めている。

「いや、ここは同い年であろう天地や秋野に任せる！！そもそもこっちはインデックスだけでも大変なのに！！」

「そう言うけど、年上だからこそじゃあないのか？」

「そ、それに愛ちゃんの言っていることは少し私達には早いつて言うか……あつっ」

秋野は先ほどの愛の言葉を思い出し、顔を赤らめて縮こまると口元でぶつぶつ何か呟きます。

海斗はそれを見て勝機はないと感じたのか、最後の賭けに出た。

「創崎！お前が決める」

「えー私ー？どーしよ？どーしよ？じゃあねー……………」

「ゴクッ」

愛はじつくりと二人を観察した後、海斗のほうに向き直った。

なんだろうこの人？

性格も容姿もすべて違うのに、兄貴と同じ感覚がする……………雰囲気とか、そういうのが……………。

兄貴みたいに狂ってるわけじゃあないの？じゃあどうして？

まさか、もともとの環境はこんな平和な環境じゃあなかったっていの？

「私はこっちに泊まることにするね　だって海斗さん、うちの家族と似てるから！！」

「……………喜ぶな上条」

「」愁傷様・・・」

愛は突然身をクネクネしだすと片手を口にあてて頬を赤らめる。

「や、やさしくしてね?・・・」

「・・・なんで俺の周りには変人しか寄って来ないんだ?」

海斗は死んだ目で頭に手を当てることしか出来なかった。

「いやっほーフカフカだー!」

ポフッ！

部屋に入った愛はさっそく二つあるうちのベッドの一つにダイブする。

海斗は少しおしゃれな雰囲気をかもしだす部屋の隅にポストンバッグを置くと近くにあったソファに腰をかけた。

秋野はもう一つのベッドにダイブしている。

(・・・俺、ここで寝るのか・・・)

ため息をつく海斗に秋野は呆れた様子で肩を上下に動かした。

「せっかくの旅行だっていうのに海斗はなんでそつため息をつくのかなあ？」

フッフ！二人の美少女に囲まれているんだから、もっとこつ？テンション上がらないの！？」

「さっきまで顔を赤らめてあうあう言ってた奴は黙ってる」

チツ、すっかり忘れてたけど、魔術について調べとくべきか……

まあ焦ることじゃあないし、明日にしよう……。

そんなことを考えてる海斗に、開けっ放しの部屋のドア付近から声がかけられた。

「おい天地ー秋野ー創崎ー。とりあえずどっか行かねえか？」

「もうおなかペコペコなんだよ！」

部屋の外に目をやると、上条とインデックスがドアのそばに立っていた。

「行くっ行っ行っ！ー！レッシュゴー！」

秋野は即座に立ち上がると上条とインデックスの元まで駆けていく。

秋野は海斗と愛が動かないことに気付くと振り返り頬を膨らます。

「二人とも行かないの！？せっかくの旅行なのにコロコロする気！？」

「私はいい……………」

「キャラ変わってんぞ……………」

「スイッチがあるの……………」

「その頭にか？」

「心」

ベッドに顔をこすりつけながら気持ちよさそうに寝る愛を見た海斗は少し呆れたように肩を落とす。

「俺もパスだ。疲れたからここで寝ていたい」

その言葉を聞いた愛はガバツ！と体を起こし、キラキラした瞳を海斗に向ける。

「まさかまさかまさか……!! 私を襲う気!? いやだな……!!」

いくら部屋に二人きりになるとはいえ、そういうのは夜にするべきなんじゃあない!?!」

「……簡単に切り替わるスイッチだな」

海斗はゆっくりとソファから立ち上がると秋野たちのいるほうに足を動かし始めた。

「やっぱり俺も行く」





## 非日常への兆し

「もうおなかいっぱいなんだよ!」

「インデックスは食いすぎじゃあないのか?」

「ちよつとすごかったよね・・・」

「あれくらい普通なんだよ!」

インデックスは先ほどより少し膨れた腹部を撫でながら満足げな顔をしている。

「確かに、おいしかったしこの洋風な町並みも見ごたえあるな。  
来れてよかった」

上条も頭の後ろで腕を組みながら話に加わる。

「だな」

今四人がいる場所は先ほど歩いていた所と違い、年季の入った色合

いの建物がズラリと街道にそうように並んでいる。

マンガでしか見たことがない洋風のレトロな外灯や赤いバスなどといったおしゃれな感じが漂う中、四人はゆっくりと足を進める。

「わーすっごい綺麗」

秋野はあたりを見回しながら言う。

それにつられて他の三人もあたりを見回した。

現在は夕方であり、オレンジ色の空が広がっている。

それとうまくおしゃれな町並みが組み込まれ、一枚の風景画のように見えた。

「凄いんだよ……」

「確かに日本じゃあ見れねえな。今日の天気もあるだろうけど……」

「

「前に来たときはそれどころじゃあなかったしなあ」

「なんか上条さんって苦労人なのかな？」

「とうまは事件が起きると、いつも私を置いてどこかに行っちゃうんだよ!!」

「だからいつも苦労するんだよ!!」

「いつもそれぐらい大変っつーことだろ!？」

「うっ!・・・そう根に持たないでください・・・インデックスさん」

インデックスに睨まれた上条は身の危険を察知したのか、すぐに顔を引きつらせながら謝る。

だがインデックスの不機嫌そうな表情は変わらない。

その様子を見ていた海斗は上条を助けるべく、別の話を切り出した。

「あのポンコツガイドが待ちわびてるだろっからサッサと帰ろっぜ  
」？」

「海斗……………変に優しい……………」

「あ？」

ボソツと呟いた秋野に海斗は頭に？マークを浮かべて問いかける。

だが秋野は口をとんがらせたままプイツとそっぽを向いてしまった。

海斗はポツケに手を突っ込むと自分の財布がないことに気付いた。

「店に忘れ物した。先にホテルに行つててくれ」

「ふーんだ！」

「俺たちも探そうか？そういうのインデックスなら得意だぞ？」

「私は一度見たことなら忘れないからね！」

「いや、確か財布だけでも少ししか入れてないほうだ。念のために複数に分けといたし、

たしかテーブルの上に置いてきただけだ」

ダッ！！

海斗は来た道を走って戻っていった。

(気が緩んでるな・・・)

テーブルの上に置き去りにされていた財布を取った海斗はゆっくりとホテルに向かっていた。

もうすっかり日も沈み、辺りは外灯により照らされ、どこか幻想的な雰囲気がかもし出されている。

ドンッ！！

海斗は道行く人に肩をぶつけた。

「あ、大丈夫かい？」

海斗はすぐに振り返り、相手を見た。

（日本人？）

ぶつかった相手の青年はどこにでも居そうな普通の青年だった。

太っているわけでもなく、そんなにやせてるわけでもなく、普通に背の高い青年に対し、

どう反応しようか考えている海斗に青年は穏やかな笑みで海斗に声をかける。

「ぶつかってごめんよ？よく人にぶつかっちゃうんだ・・・。」

僕はそのレストランで働いているんだ。良ければまたきておくれよ」

「・・・胡散臭え野郎だ」

「そう感じたのなら謝るよ。具体的に教えてくれないかな？今後気をつけたいからさ」

「お前の発言じゃあねえよ」

海斗の言葉を聞いた青年は少し不適な笑みを浮かべると

「へー・・・興味深いね」

「勘だ・・・お前のその態度が上っ面だけじゃあねえことだけだ



が・・・」

青年は柔和な笑みになると続ける。

「やっぱり似た者同士にしかわからない所があるみたいだねえ・・・  
・君の名前は？僕は創崎怜二」

「天地海斗・・・創崎だと？まさか妹が居ますとかいうんじ  
やあ・・・」

「おや？どつやら僕の妹の知り合いのようだね？」

いや、イギリスは初めてだと言ったから妹が世話になっ  
ているのかな？」

「ああ、そんな所だ。あのポンコツガイドには振り回されてばかり  
だ」

愛のことを思い出して海斗はため息をつく。

それを見た怜二は表情を変えずに海斗に背を向けると右手をひらひ  
らさせる。

「じゃあ僕は用があるから。妹によろしく」

「忙しいのか？」

「ああ、予定が立て込んでね」

怜二は一度も振り返ることなくその場を去った。

海斗と秋野の泊まる部屋で上条とインデックスと秋野と愛はいた。

四人はトランプをしているようで片手には全員トランプを持っていた。

ツツツ頭の少年、上条当麻は顔を上げると呟く。

「天地の奴遅いな」

インデックスは両手にあるトランプから目を離さずに告げる。

「そろそろ帰ってくると思っつよ?」

インデックスの言葉を聞いた秋野は頬を膨らませると不機嫌そうな顔になる。

「……ふーっーんだ!! 帰ってこなくてもいいよーだ」

「何があつたの? まさか!! 秋野さんにいかがわしいことをツツ!

「？」

「んなわけねえだろ」

部屋の入り口にたどり着いた海斗は愛の言葉に即答した。

皆の視線が海斗に集中する。

「天地！」

「かいと！」

「ふーんだ」

「（ニヤニヤ）」

「はあ、なんで綾はこっちを向かねえんだ？」

海斗はため息をつきながら部屋に入っていく。

上条は勝てないと思ったのだろうか？

トランプを投げ出すと海斗に問いかける。

「遅かったな」

「ゆっくり歩いてきたってのもあるが・・・」

海斗は横目でチラリと愛を見ると、チツと舌打ちした。

「そのポンコツガイドの兄貴と出会った」

「マジでせつ?」

「ねえねえ!!兄貴と会ったって!?!?私のことをなんていった!?!」

身を乗り出して聞いてくる愛に対し、海斗は冷静に続ける。



上条は全力でインデックスを振りほどこうとするが、噛み付きの威力が凄いのか、一向に離れる気配はない。

「……こりゃあ確かに苦労するな」

「不……幸……だ……」

頭から血を流しながら上条は倒れこんだ。

## 静寂

海斗達が何事もなく旅行の一日目を堪能？した深夜、人気のない街中をある三人組は歩いていた。

昼間と違い、やけに静かで不気味な感じすらした。

そのうちの一人、サングラスをかけた金髪の少年、

土御門元春は頭の後ろで腕を組みながら疲れた様子で呟いた。

「何にもつかめないにゃー・・・」

「そもそも本当にコイツが敵なのかい？一般人にしか見えないけど？」

180cm以上もの身長、赤髪の神父さん、スタイル＝マグヌスはため息をつく土御門に尋ねる。

「それは確実なんだにゃー」



土御門は折り紙らしきものを取り出すと、それをヒラヒラさせながら  
呟く。

「何か魔術を使った後でもあれば……」

「あ……」

土御門は声のした方向を見た。

そこには黒く長い髪の少女、天川真紀が真剣な表情で右手の掌の中  
で白い光を発しながら言う。

正確には天川の手が光を発しているのではなく、掌の少し上に浮か  
んでいる小さな小さな魔方陣からだ。

「今頃になってようやく反応したんです……空港のほうに反応  
しています」

「何!?!」

「くッ!今まで結界か何かで守られていたのか!?!とりあえず行こ  
う!?!」

「空港・・・・・・・・の倉庫か・・・・・・・・」

土御門たちの三人は空港の柵を乗り越え、

天川のナビにより大量のコンテナがしまわれている巨大な倉庫の前にたどり着いた。

今までの道中には、積み上げられていたコンテナが崩れているものもあった。

「どつやらここで何かあったのは間違いないな」

「この中から人の気配がします」

「敵の可能性は？」

「あります。ですけど……え？」

右手の掌の光を見つめながら天川が驚いた表情で目を大きく見開いた。

光の変化は本人にしかわからないのか、土御門たちが気付いていないのかはわからないが、

天川に土御門たちは身を乗り出して聞く。

「どつしたんだ？天川？」

「どうしたんだい？」

「……中にいる人はかなり衰弱しています！…すぐに治療しないと……！」

「「ツツ……！」」

土御門は下を向いて考える。

もし、味方が敵を倒し損ねたなら、連絡が来るはず……。

しかも結界……。

まさか……！

「まさか中にいるのは……味方か……!!」

土御門は顔を即座に上げて巨大倉庫の鍵を壊すと、中に入っていく。

「チイツ……まずいことになった……!!」

「急ぎましょう……!!」

ステイルと天川は土御門を追うように、駆け足で倉庫に入っていた。

天川は掌の光を消して走ることに集中する。

「こっちだ……!!」

土御門の声が奥のほうからした。

薄暗い倉庫の中を開けっ放しの入り口から月明かりが照らし、視界

は狭くなかった。

積み上げられたコンテナの間を走り、二人は土御門のもとにたどり着いた。

土御門は倒れている人物の様子を見ているのか、屈みこんでいる。

「まさか……ねーちゃんがやられるとはな……」

「神裂！？どういうことだ！？土御門！」

「見ての通りだ……ねーちゃんがやられたんだ」

顔に冷や汗を流しながらも土御門は冷静に対応する。

その視線の先には目立つ外傷はないが、倒れている神裂火織がいる。

彼女の左手には彼女の武器である七天七刀が握られていた。

「確か……聖人……ですよ？」

「ああ、そのねーちゃんを撃破するだ！？これは相当なやり手だ」

ステイルは少しその場から後ずさりするとタバコを取り出して火をつける。

「僕たちはどうする？」

「とりあえずねーちゃんを連れてどこかに一旦隠れるべきだ。天川！」

「ここである程度治療します。少し離れてください」

「頼むよ」

巨大倉庫の近くのコンテナの上で、創崎怜二はさわやかな顔で立っていた。

土御門たちがコンテナの中に入っていったのを確認すると、少しだけ口元を緩める。



遅すぎだよ。

もう少しで彼女が死ぬかもしれないかったじゃあないか……まあ  
聖人だからそう簡単には死なないだろうけど……。

まあ、あの三人に警戒する必要はないな。

敵を潰すとかは『アイツ』に任せとけばいいか。

実質、リーダーはアイツだしな……僕は眺めたいし、あの勝  
手な妹は気分で動くだろうし……。

僕の娯楽のために巻き込まれてもらうよ………例え、誰  
でもね。

怜二はいまだ中に、土御門たちがいるであろう倉庫に背を向けると  
最後にこう呟いた。

「止めねるものなら止めてみるよ。それもそれで見物だ」

「ふああ・・・起きちゃった・・・」

海斗はソファから起き上がると、近くのベッドに寝ている秋野に目をやった。

「むにゃむにゃ・・・もう食べられないよお・・・」

（ぐっすり気持ちよさそうに寝てやがる・・・）

海斗は秋野から視線を足元のバッグに移す。

（財布・・・自販機は確か・・・廊下のつきあたりにあったな）

海斗は手探りでバッグの中の財布を取り出すと、起こさぬようにゆっくりとベッドの横を移動した。

ギュッ

だが、そのとき、不意に服の端をつかまれ、海斗は少し驚いた様子  
でつかんだ人物を見る。

「綾？」

自分の服の端をつかんだのは秋野だった。

「海斗お………」

秋野はギュッと海斗の服の端をつかむと、かよわい声でささやくよ  
うに呟く。

「もう………どこにも行かないで………」

「？」

海斗は秋野の顔を見た。

海斗は秋野の言っていることが寝言だとようやく気付く。

（寝言・・・か）

「お願いだから・・・」

・・・また一人で・・・無茶しないで・・・

もう……私を……置いて行かないでよお……」

秋野の手は言葉とともに力が入る。

顔を水滴が流れおちる。

その手は海斗を引き止めるように、また、自分も連れて行け  
というようにもとれた。

いままで自分のことを心配してくれたり、自分に優しくしてくれた  
秋野綾という人物を海斗は改めて認識する。

（今思えば……こいつのおかげだよ……俺が木原になら  
なかったのも……）

窓から青白い月明かりが差し込む中、海斗は静かに記憶をたどる。

『関係ないよ!!海斗はずっと私の幼馴染だもん!!どんなことがあっても嫌いになんてならないよ!!』

海斗はかつて自分にそう言い聞かせてくれた目の前の人物対し、口元を緩める。

「どこにも行かねえよ……だから安心しろ」

その声を聞いた秋野は安堵の笑みを浮かべると、スースーと寝息を立てて静かに再び深い眠りについた。

優しい笑顔で秋野に聞こえるように呟いた後、

海斗はゆっくりと秋野の寝ているベッドに腰をかけると、自分の服の端をつかむ手を見た。

（……しばらくは捕まっとしてやるか……）

静かにゆっくりと、平穏で優しい時間は過ぎていった。





## 旅行二日目〜朝〜

旅行二日目、朝早く目を覚ました海斗はゆっくりとソファから身を起す。

まだそこまで日は昇っていないようで、窓からはかすかにしか日差しが差し込んでいない。

海斗はすぐに服を着替えると、ドアを開けて静かに出て行った。

魔術。

海斗はそのことを調べるために少しだけ探ろうと思い、街に出た。

人気はなく、予想通りといった感じで海斗は足を進める。

(・・・宗教関係から調べるか・・・)

その行動が、全てを左右することも知らずに……。

「んっ……朝……かっ。なんか早く起きちまったなっ」

同時刻、上条当麻はベッドの上にて目を覚ました。

インデックスの寝ているほうに目をやるが、起きる気配はない。

横の部屋にいる秋野たちも寝ているだろうと考えた上条はどうしようかと考える。

(・・・そういやイギリスには必要悪ネセサリウスのやつらが居るはずだよな・・・また昼にでも会いに行くか！)

それより今は・・・。

(とりあえず飲み物でも・・・)

上条はすぐに着替えると廊下の自販機の前まで来た。

(全部売り切れッ!?なんで!?)

自販機の飲み物はすべて売り切れとなっていた。

信じられずにポカんと口を開けた後、ようやく状況を理解した上条はその場でうなだれる。

ズーンという効果音が似合いそうな背中だった。

上条はとりあえず外の自販機で飲み物を購入することに決めた。

外の空気を味わいたいというのもあったが、それはこの際置いておくことにする。

（外ならあるはず！！）

上条の考えは正しかった……………ここが日本ならば。

(聖堂・・・か)

海斗は今、とある聖堂の前に居た。

聖堂はいかにも神聖で、協会のような建物よりも清潔感があふれていた。

海斗のような宗教に疎いものでもここが宗教が関係していると思えた。

魔術は学園都市でいう超能力のような扱い・・・

つまり機密事項と考えた海斗はとりあえず普通に観光目的で訪れたというふうにして入る気である。

そこから先はどうにかして調べるしかない。

コツコツと足音を立てて聖堂の扉の前まで移動する。

しまったな。

こんな早く来ても意味がなかったか？

そもそもどうやって入るんだ？お邪魔します、か？勝手に入っていいのか？

そんなことを考えながら海斗は押し開けるタイプの扉に手をかけた。

ガチャッ！

開いた？ってことは中に入ってもいいのか？

海斗は恐る恐る扉に力を込めていく。

扉はギツと木製独特のきしむ音を鳴らしながら開かれていった。

(そ、外にもねえ！？ってか自販機すら！！)

上条は自分達が泊まっていたホテルがある通りの真ん中で頭を抱えている。



そもそもここはイギリスであって、日本ほど自販機はないのだ。

そのようなことも忘れている上条はとりあえずベンチに腰を下ろす。

（日本とは違うな）

上条はボーッと遠くを見つめていたが、その視界を見覚えのある人物が通った瞬間、

目を丸くして思わず立ち上がる。

見間違えるはずはない。あの内側に着た緑のアロハシャツ、そして金髪にサングラス。

クラスメイトである友人を上条は指差し、叫んだ。

「土御門！……！！？」

土御門と呼ばれた少年は声に驚くように振り返り、ベンチから立ったままの状態の上条に駆け寄る。

「カミちゃん!?!?どうしてお前がここにいる?」

「旅行だよ。お前こそどうして?」

「俺は必要悪ネセザリウスの魔術師だったこと忘れてないかにゃー」

「全く……君はなんでこんな所にいるんだい?」

「ステイル!」

上条は不機嫌そうな顔のステイルを見て、少しだけ、何かが始めていることに気付く。

「何か……起きてるのか?」

「少々、やっかいなことがな……」

「面白そうだね〜兄貴〜。でもこんなかわいい妹をほったらかしにするなんて信じられない！」

怜二はふくれつつらの愛に対し、冷静に返す。

「君は強いだろ？僕が心配する必要がどこにあるんだい？しかも今まで君好き勝手にたじやあないか・・・」

「それが実の兄の言うこと！？ひどい！」

「それぐらいにしときなよ・・・」

金髪の女性が愛を諭すように割ってはいる。

それを苦笑いで体格の言い男は見ている。

ここはイギリスのロンドンのとある建物の屋上。

まだ日が完全に昇っていないので、風も全くない状況だ。

「戦いに関してはすべてムルドゥベイボルグに任せるよ」

「了解！大将！！」

ムルドと呼ばれた男は好戦的な笑みを浮かべながらうなずく。

「エルダゥウエルダントはその補佐。愛は僕の言うタイミングで動け」

「了解」

「りょーかい」

ポケットに手を突っ込みながら、朝日を眺める怜二。

世の中には必然がたくさんある。

だが、真実、偶然は必然よりも多い。

地球が誕生したように。サルから人へ進化したように。

普通の家庭に生まれる奴とそうでない奴がいるように。

僕は普通の環境で育った。だけどこんな性格になった。

それは必然か、はたまた偶然か……。

怜二は思考を中断する。

この考えが終わることのないものだとは自覚しているからだ。

## 逃走劇〜開始〜

聖堂の扉を大きく開いた海斗はそこで信じられない光景を目にした。

「・・・何が起きてる？」

赤い水溜りが聖堂の中央あたりに出来ている。

三人のシスターさんであった肉の人形は

その水溜りの上に無残な姿で転がっている。

海斗は少しだけ聖堂の中に踏み込んで三人の死因を確認する。

一人は刺殺。体の急所を数箇所刺され、死んでいる。

二人目は斬殺。胴体を真っ二つにされて即死した  
ようだ。

三人目は手足を切り落とされ、出血多量に  
よって死んでいる。

三人に共通する点は刀によって殺されたということだけだった。

海斗が一般人であったならば発狂していたかもしれない。

それほど惨劇というのにふさわしい光景だった。

とりあえず警察に連絡しねえとな……。

海斗はそう思い、ポケットの携帯を取り出した瞬間、あることに気付いた。

待てよ？何かがおかしい……。

なんでここでこんな惨劇が起きてたのに、誰も気付かない？

そもそも凶器がなんで刀なんだ？しかも死んでから俺が来た今と、時差はほとんどない。

『あ、あ、あ……あ……な！？何をしているんですか！！！！！！  
？？？』

突然、後ろのほうから声により、海斗の思考が中断させられる。

後ろを振り向くと、入り口のほうには修道服を着た少女が腰を抜かして立っていた。

英語を脳内で和訳するのに一瞬戸惑った海斗だったがすぐに状況を理解できた。

と。  
嵌められた



『あれ？いな・・・い？』

修道女の少女が気付いた時には聖堂内にいた海斗の姿が消えていた。

ゆ、夢？

そう願いながら再び聖堂内を見るが、聖堂の中心あたりに死体があることにはわりはない。

じゃあ、あの少年は？

聖堂内を見渡した少女は割られた窓を発見した。

そこから聖堂内にようやく昇った明るい日差しと吹き始めた少し涼しい、朝独特の風が吹き込んでくる。

「どっしちまったんですか？」

そこに数名の少女がいまだ腰を抜かしている修道女に声をかけた。

入り口越しに聖堂内の死体を確認すると、目を丸くして全員その場で硬直した。

「こ、これはどういふことですか!?!」

赤髪の修道女が戸惑いながら腰を抜かしている修道女に尋ねた。

修道女は海斗の姿を思い出し、告げる。

『茶髪の東洋人が!?!その窓から逃げて行きました!?!!』

「ツツ!?!?!?!?!」

海斗は街中を走りぬけながら今の自分の状況を理解する。

言い訳しても俺が捕まることに変わりはない。

あの惨劇を思わせる殺され方からしても、あの場所が魔術と関係している可能性は高い。

そうならば学園都市などという特殊な場所出身の俺は……。

確か、第三次世界大戦でも学園都市はどっかの宗教団体とぶつかったっー話だ。

死体にあった刀による斬り傷……ここはイギリス……何も刀でなくてもいいはずだ。

また、あの修道女の来るタイミング。

そして何より……『偶然』にも惨劇の直後の場所に俺が訪れたということ。

「出来すぎてる………クソツたれが!!ふざけやがってッ!……!」

海斗は昔、木原から逃げ出して以来の大きな逃走劇に再び、かり出されるのであった。

土御門は上条に今のイギリス内での状況を教えていた。

話も後半にはいり、上条も深刻な表情になる。

プルルルッ

「ちょっとすまない。カミちゃん」

土御門の胸ポケットから携帯電話の電子音が鳴り響く。

携帯を取り出し、少し上条から離れ、背を向けた土御門は携帯に耳を当てる。

『 『

「そいつは間違いないのか!？」

『 学園都市に問い合わせた結果、能力と傷跡が一致しました。さらには目撃者もいます』

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかった」

パタンツと携帯を閉じた土御門の表情が険しくなる。

そのまま振り返り、顔を上げて上条を正面から見ると、言い辛そうに口を開いた。

「どうしたんだ？」

「落ち着いて聞けよ・・・カミヤん」

「？」

首を傾げる上条に土御門は言葉を続ける。

「お前と一緒に来た『天地海斗』が・・・」

必要悪ネセサリウスのメンバーを数名殺害した容疑で必要悪内で指名手配されたらしい」

「なッッ!?!?どういうことだよ!?!土御門ッッ!?!?!」

「僕のほうにも連絡が来たよ・・・どうやら、ほぼ確定だそうじゃないか・・・」

スタイルもパタリツと携帯を閉じながら土御門と上条の間に入ってくると不機嫌そうな口調で言う。

二人の様子からしても真実なのだろう。

嘘・・・だろ？

あいつが？いや違う  
！！

何かの間違いに決まってる

なら

俺がすることは一つだ。

「土御門！スタイル！！」

その場をサツサと立ち去ろうとする二人を引き止める。

引き止められた土御門とスタイルは次に上条がどんなことを言うのかわかっているように、

肩をすくめてやれやれといった感じにいる。

「俺は、アイツがそんなことする人間なんかには見えなかった。



もしかしたら、何か他の事に巻き込まれているのかもしれない  
!!

だから、俺も、何か手伝えわせてくれ!!!」

「・・・相変わらずだね」

「わかったぜ、カミヤン・・・だけどこのことは、残り旅行者二人にも伝える。もちろん、インデックスにもだ」

逃走劇〜開始〜（後書き）

その頃・・・

アクセラレータ  
一方通行「なんで俺が飯を作らねエといけねエんだ・・・」

一方通行は不機嫌そうに呟いた。

その手は何かを揚げているようで、ジューという音があたりに響いている。

そんな一方通行は黄色いファンシーなエプロンを装着していた。

一方通行の機嫌を見る限り、毒でも盛られそうだった。

ミサカワースト  
番外個体「結構にあってるじゃあない？いや〜これは得した」

一方通行「黙ってる」

番外個体はニヤニヤしながら一方通行を横目で見る。

一見、一方通行一人がそういった目にあってるように見えるが、

番外個体もきつちりピンクのエプロンを装着していた。

台所に黄泉川愛穂がずかずかと入ってくる。

フライパンで料理している一方通行を横目で見ると、意外そうな顔になる。

黄泉川「何じゃんよ？炊飯器は使わないのか？」

「・・・テメエはもう一度料理を勉強しなおせ」

番外個体はある視線に気が付き、そちらを見た。

「ラストオーダー最終信号・・・なんでこっちをジロジロ見るのかにゃーん？・・・」

ラストオーダー  
打ち止め「いやー予想以上に似合ってるな〜ってミサカはミサカは  
目をキラキラ輝かせながら感心してみたり」

台所にいつの間にか現れた打ち止めは目をキラキラさせながら番外  
個体を見つめている。

「あ、あの・・・そんな視線を向けなくてくれないかな〜」

番外個体もあまり触れられたくないのか、珍しく狼狽している。

「ハッ！いいざまだなア」

「くッ！貴方にそう言われるとはね……………」

……………続く……………可能性あり。

逃走劇々

「海斗が！！？でもなんで連絡とかしてこないんだろう？」

「多分、居場所を特定される可能性を考えているからじゃあないのか？」

「じゃあ今かいとは逃げ回っているんだね？」

「ああ」

上条はインデックスと秋野に事情を説明した。

なぜか、部屋に居たはずのガイドが居ないが、それを気にしている間もないので上条は気にしないことにした。

「俺たちはとりあえず、アイツの無実を証明するために動こうと思っ  
っているんだ」

「わかったよ！とつまー！」

「ありがとう……上条さん……」

「アイクビショップ  
最大宗教……」

『いきなり何のようかしらん？』

創崎怜二は右手で携帯電話を持ち、ビルの上から逃げている最中の海斗を見下ろす。

不適に笑うと、電話の相手に向かってこう告げた。

「取引……しないかい？」

『取引？一体どういふものでありけるのかしら？』

電話の向こう側の相手の表情が曇るのがわかった怜二は少し面白そうな顔になる。

「ははは！何？簡単なことだよ！引き金をあげよう」

『引き金？』

「君はアレイスターのことを口実に、学園都市の技術を掌握するつもりだろうか？」

でも大義名分はあっても争いの引き金はない。そこで機会をあ  
げようと僕は思ったんだ」  
チャンス

『こっちは何をすればいいのかわかりけるのだけど……』

「僕があげるのは、あくまで機会だ……。僕たちが動けば、すぐにもみ消しに出来るんだからねえ」

『……』

電話の向こう側に居るローラースチュワートは考えを張り巡らせる。

この男の意図は理解できない。

だが、利用できるのであれば、利用するまで。

そんな考えをまとめているイギリス清教トップに怜二は続ける。

「僕たちは機会をあげるけど、それでも学園都市が勘づく前に僕たちは動く……」

『用件は何でありけるの?』



「ないよ。正確にはこれは取引じゃあないんだよ。戦争でも起こしてくれればうれしいなあ。」

戦争が起きたら僕は隠れておくよ。組織ももう少ししたら解散させるし・・・そっちのリスクはゼロだ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「無言ってことは了承したってことかい？じゃあね」

プツンッ！！

これでいい。

どんなことが起きようとも、僕が楽しめたらそれでいい。

だから楽しませてくれよ？旅行者諸君？

風にあおられながら獣のような不適な笑みを浮かべる怜二。

ただ、楽しむ。

自らの娯楽のためならば彼は地獄に行くことすら望む。

(つつたく……つつちは街のことなんかわかんねえぞ?)

海斗はたくさんさんの修道服の集団に追われながら、イギリスの路地裏を走り回っていた。

追われるということは相手をいかに撒くかで勝敗が決まる。

こっちが地形に詳しくれば、逃げ慣れている海斗は確実に相手を撒ける。

だが、今は逆の状況。

あきらかに不利だった。

反撃で能力を使用すれば、もう言い訳は利かなくなる。

己の肉体のみで逃げ回ることしかできない海斗は息を切らしながらあたりを確認する。

今走っている所は人三人が走れるほどの幅の路地裏で、地面は土。

横に立っている建物は洋風の建築で凸凹がたくさんあった。

（地形で不利である以上……待ち伏せされたらキツイ！なら  
！）

海斗は走りながら曲がり角を数メートル先に確認すると、走っている速度をさらに上げて曲がり角を曲がった。

追っ手の一人、アニーゼⅡサンクティスは海斗を追っていた。

あんな惨劇をおこした人物・・・何をするかわかりませんね。

そんな考えを胸に秘めつつ、海斗が曲がりこんだ角を曲がる。

直後、集団の皆が驚きの声をあげた。

（き、消えた！？警戒のあまり、距離を置きすぎたっていうんですか？）

「とりあえず！この辺りにある路地裏の出口を塞いじまってください！！」

アニーゼ自身も何が起きたか理解できていなかった。

相手が、逃げ回ることに慣れているなどと思っていなかったために・・・。

(とりあえず・・・撒いたな)

海斗は散らばっていくアニエーゼ達の姿を路地の真横の建物の屋上から確認すると、落ち着いたように座り込んだ。

海斗は曲がり角を曲がったその勢いで一気に凸凹が一番多かった建物の壁を蹴ったのだ。

蹴った勢いと今までの勢いとアニエーゼ達を引き離れた時間を利用して、建物をよじ登ったのだ。

火事場のクソ力とはよく言ったものだ。

そんなことを考えると海斗は再び立ち上がり、他の建物との屋上の高さの差を確認した。

（屋上から屋上へ飛び移っていけばみつからねえな・・・）

かつての逃走術が皮肉にも海斗を味方しているのだった。

とあるマンションの部屋に天川はいた。

部屋のベッドには神裂が寝ている。

その後ろから金髪の少年、土御門と赤髪の神父、ステイルが部屋に入ってきた。

「ねーちゃんの様子は？」

「もう大丈夫です・・・今は寝ているだけです」

「・・・連絡は届いているだろうか？」

「・・・はい」



天川はステイルの言葉に少しだけうなずくと、どこか悲しげな顔になる。

そんな天川を見た土御門は真剣な眼差しで告げる。

「この件、変だと思わないか？」

「え？」

「確かに……最大宗教らしくない……というべきだね」

「どづいづつ……ことですか!？」

「あの女狐が、冤罪なんかをするわけないだろうっ？」

「だな」

「私も……」

天川は精一杯声を上げて身を乗り出し、二人に告げた。

「私も手伝わせてください!!」

## 逃走劇(式)

海斗は周囲を確認して隣の建物の屋上に飛んで移動する。

タンッ！

靴底が音を立てるがそれほど大きい音ではないので、海斗は周りのことなど気にしない。

(さて、これからどうするか……)

一瞬、空港から日本へ逃げるという手が思いついたが、それは出来ない。即座に否定した。

コンクリートの床を歩き、次の飛び移る場所を探しながら海斗は不機嫌そうな顔になる。

「見つけちゃいましたよ!!」

「ッッ!!」

後ろから声がしたと思って振り返った瞬間、海斗の腹部に衝撃が走った。

ドンッ！！！！！

「かッ！！！？」

何が起きたかわからずコンクリートの床に崩れるように倒れた。

「よくも仲間を……」

痛みを耐えながら起き上がり、海斗は正面を見た。

赤い髪の修道女がいて、その少女は何か蓮の花のような形状をした杖を持っている。

逃げるしかねえな。動き出そうとした海斗の背中に衝撃が走った。

ドゴッ！

よく少女を見れば、杖を振ったと同時に自分に攻撃が届いている。

「……………くっだらねえ……………」

怒りに満ちた声で海斗は倒れずに持ちこたえる。

「ツツツ！……！！！」

キッ！と少女は海斗を睨むと杖を振るう。

ドゴッ！！バギッ！！ドンツツ！！！！

「……………」

歯を食いしばり、衝撃に耐え続ける海斗は無事ではなかった。

口の中で鉄の味がした。

ふぎげやがって!!

ドガッ!!!!!!

(やった!!)

「が……はッ!!」

ゴボッと口から血を吐き出した海斗は前のめりに倒れていく。

だが、少女は目を目を見開いて、驚いた。

倒れそうになった海斗は右足を前に踏み出すと倒れかけた体を強引に支えると

「……ちょっとだけ寝ててくれ」



轟音が炸裂した。

少女は殴られた勢いで屋上の金属製の柵に勢いよく衝突した。

「あッ! ! ! !」

少女はそのままズルズルと体から力をなくし、その場で気絶した。

「・・・・・・・・」

肩で息をしながら海斗はすぐに別の建物の屋上に飛び移った。

どうやら他に追っ手はまだ来ていないらしく、海斗としてもこれ以上体力を削られたくなかった。

（怒りで少し冷静じゃあなかった分助かった・・・・・・・・まあこれ以上はあいつ等と戦いたくねえ）



口元の血を袖で拭くと、覚悟を決めた瞳で呟いた。

「俺を嵌めたことを後悔させてやる」

いや〜予想以上にうまく逃げ回っているみたいだね？

いいショーだ。

「そろそろお前が動くころだ」

怜二は近くに居るセミロングの少女に向かって言い放った。

対してセミロングの少女、愛はニヤリと笑うと手に持っていたサバイバルナイフをクルクルと回転させながら

「兄貴は人使い荒い荒いよねと思うな〜だつてさ!?!? 実の妹をすぐに戦闘にかり出すんだよ!?!?」

私に変なことされたらどうするつもり!?!?」

「そいつはお前に殺されて死ぬだろうさ」

「冷たッッ! 兄貴はこの期に及んでまだ放置主義とかいうつもりなの!?!?」

「そもそも気にする気すらない」

「まあいいや」

舌をいたずらっ子のように出すと満面の笑みで愛は微笑む。

「所詮、そんなものでしょ？じゃあ言ってくるね。」

（相変わらず厄介な奴だ）

うんざりした様子で怜二はため息をつくことしか出来なかった。

上条、秋野、インデックスは三人で固まって路地裏で海斗を探し回

っていた。

三人で分かれて探したほうが効率的なのだが、もしもの時のために上条は三人で動くことを提案した。

海斗が逃げ回っていた痕跡は見つかったが、どこにどう逃げたかわからずに居る。

その場に留まるのもあまりいいことではないので、とりあえず上条はインデックスと秋野に移動するように促した。

「他の場所を探そうぜ・・・ここに留まっているのも何かと危険だろうしな」

「そうよね」

「そうだ・・・」

インデックスも普通に返事をしようとした瞬間、表情を変えて上を見る。

そして突然大声を出した。

「とうまー!!前に飛んで!!」

「どづいづ……ッッ!!?」

自分のいる場所だけ、なぜか影が出来て暗くなっているのがわかった。

しかもその影は少しずつ大きくなっている。

上条も身の危険を察知してインデックスや秋野のいるほうと反対側に飛んだ。

ガッ!!

先ほど上条がいた場所に長い槍が音を立てて突き刺さった。

その槍の上には金髪の女が立っている。

金髪の女は槍から降りると、振り返り、上条に声をかける。

「あんたが幻想殺し？」  
イマジンプレイカー

透き通るような声の女は槍を地面から引き抜くとインデックスを横目で見る。

「スベルインターセプト強制詠唱だっけ？あれされると厄介なのよね」

だから、先に殺しとくわね？冥土の土産に教えてあげるわ、私の名前はエルダ<sup>II</sup>ウェルダント」

インデックスは身構えたが、エルダは気にせず突っ込む。

「ッッ！！（魔術なしで攻撃を！？）」

「インデックス！！！」

クソッ！！間に合わない！！！！

上条も駆け出すが、エルダの攻撃は止められない。

槍がインデックスの腹部を貫くか否かといった瞬間、突然、炎の波がエルダを襲った。

「なッ!？」

エルダはなんらかの魔術で防いだのか、熱風で吹き飛ばされただけですんだようで、

上条の頭上を越えて5、6メートルほど先の場所に着地した。

上条はインデックスと秋野の後ろにいる人物に目を丸くする。

「その子に手を出すって言うのなら………容赦はしないよ」

先ほどの炎を放った人物はインデックスと秋野を押しつけてエルダと向かい合わせになった。

赤い髪にくわえタバコ、そして180センチ以上の身長を持つ人物は三人に目を配り、その場を立ち去るように促す。

「無理するなよ！！ステイル！！」

三人が立ち去ったことを確認するとステイルはルーンのカードを取り出す。

「僕が相手だ。……とはいってもこちらも忙しいんでね。すぐに終わらせてもらおうぞ」

「面白い。敵にとって不足ないわ」

直後、女を中心に風が舞い込んだ。

それを見たステイルは興味ないといった調子で呟く。

「予想よりやりづらそうだ」





逃走劇(式)(後書き)

その頃……。

「予想以上においしいかも!? ってミサカはミサカは感激してみたり!!」

そういうと、ラストオーダー打ち止めはおかずの一つであるから揚げを口にほおばる。

「揚げるだけだろオが……バカバカしい」

それを呆れたように横目でみるアクセラレータ一方通行に黄泉川、芳川が横から声をかけた。

「確かに、これはおいしいじゃんよ!! なあ? そう思っじゃない?」

「確かにこれはいけるわね……」

「黙ってる」

二人に不機嫌そうに呟く一方通行に真横の席に座るミサカワースト番外個体は意地悪いそんな笑みで肘で一方通行をつつきながら

「お嫁に行けると思うよ　よかったねえ念願の願いがかなって」

番外個体はコレだけの平和を手に入れられたことが叶ったといいたいのだろうが、

彼女の性質上、嫌味のような別の言葉になってしまう。

さらにそれは悪い方向に……。

「何い！？一方通行ってまさかそっち系の人だったの！？ってミサカはミサカは初めて突きつけられた真実に驚きを隠せ切れずにいたり！！！」

「言い返さないってことは真実だったのか。」

「いや、ミサカは今までロリコンだとばかり思ってた」

「テメエらの脳内でオレを勝手に変態にするんじゃないか！！！」

「「きゃー怖ーい」」

わざとらしく身を寄せ合う二人に一方通行は体を怒りからかフルフルと振るわせる。

いつもなら軽く流すだろうが、今日は、いや、ここところはエプロンの件などで

怒りが蓄積されていた。

「いい加減にしろオ!!」

ドンツと一方通行がテーブルを叩いて立ち上がる。

それにつられて、二人はそそくさとテーブルから離れ、走って逃げ出した。

「鬼さんこちら」

「はたして捕まえられるかなってミサカはミサカは威張ってみたり!!」

この後、食べ物をひっくり返し、黄泉川に全員怒られることになるのだが、

それはまた別の話。

逃走劇々参々(前書き)

短い・・・。

逃走劇々参々

エルダは身構えたかと思うと、槍を何も無い空間を突き刺した。

「!!!」

地面を抉りながら風の塊がステイルに向かって向かって向かってくる。

(速い!)

ステイルはとっさにルーンのカードに魔力を注ぎ、炎剣を作り出して風の塊を斬りつけて、軌道をずらした。

軌道をずらされた風の塊はステイルの真横の地面にクレーターを作り、砂埃を巻き上げた。

「くっちよ!!!」

砂埃から出たエルダが空中から切りかかってくる。

「くッ!」

槍には魔術的な風の装甲がつけられているようで、炎剣が通じるとは思えなかった。

ステイルは右手に炎を掲げると

「巨人に苦痛の贈り物を！！（P u r i s a z N a u p i z G e b o）」

それを思いつきりエルダに向かって振るい、エルダに向かって炎が放たれた。

（炎！？・・・だが！）

「甘い！」

エルダは槍を縦に振り、突風を生み出すと、炎を突き破る。

「なッツ！！！」

その余波がステイルに当たったため、ステイルはルーンのカードを

ばら撒きながら後方に転がった。

「まだまだ!!」

(天草式と同じように、動作に隠して魔術を!!)

エルダは追撃しようと地面を蹴ってさらにステイルに迫る。

「灰は灰に！塵は塵に！」

ステイルはすぐに起き上がると、両手に炎を掲げてそれを交差させて放とうとする。

「させないわよ！」

そこにエルダは踏み込み、槍による突きを繰り出した。

だが、魔術の発動を中止してそれを間一髪でステイルはかわす。

(ほぅ……やるわね。でも!)



エルダは槍を地面に突き刺したかと思うと、槍の取っ手に手をかけて大きく地面を蹴って、遠心力を利用し

ステイルの腹部に蹴りを入れた。

「ぐツッ!」

それを受けたステイルは5、6メートルほどさらに後方に仰向けになって倒れる。

おそらく、先ほどの蹴りにもなにか魔術が組み込まれていたのだろう。

口の中の血の味を確認しながら、ステイルは敵のことを分析する。

やれやれ、参ったね……僕と相性が悪すぎる。

「そこ!」

エルダは槍を勢いよくステイルの腹部目掛けて振り下ろした。

ガッッ！！！！！！！！

槍の突き刺す音があたりに鳴り響いた。

(俺を嵌めるとしたら誰が?・・・綾やインデックス、上条は無理だ・・・疑ってもねえが)

海斗は犯人を冷静に考えながら建物の屋上を飛び移っている。

海斗にも心あたりはないが、自分を嵌めた相手が自分を知らないわけではないと思うと、どうしても知り合いを疑ってしまった。

(・・・まったく犯人もこんな忙しそうなことをよく思いつくना・  
・あれ?忙しい?)

海斗はここ最近の記憶を探りはじめる。

『忙しいのか?』

『立って込んでね』

総崎怜二との会話。

今思えば不自然だった。

俺はじっと見てたけど、あいつは働いているはずのレストランに帰らなかった。

忙しいって私用でか？それに……不思議な感じがした。

調べるだけの価値はあると思った海斗は近くのビルの屋上に移動した。

ビルといっても、それほど高くなく、風も強くなかった。

「隙あり〜」

ゴツッ！！

頭上から声があったことに驚き、反射的に顔を上げようとした海斗の後頭部に衝撃が走った。

蹴られたということに気づくのに、少し遅れたようだ。

「ツツ!!!!?」

飛びそうになった意識を強引に取り戻した海斗は即座に振り返り、裏拳を繰り出す。

ガツツ!!

「かッ!」

だが、それが空を切ったかと思った瞬間、今度は溝に蹴りが入った。

(魔術じゃあ……ない?)

海斗は後ろに下がり、攻撃を仕掛けてきた者と距離を取った。

「………テメエか、総崎愛!!」

「ふふふ〜ん そろそろ気づいてるだろうと思ってね〜」

海斗の正面には余裕の笑みを浮かべる愛がいる。

おそらく、今の攻撃も愛がしたものだとすぐにわかった。

だが、海斗は疑問に思った。

こんな奴の体のどこから力が出てるんだ？と。

愛の足は普通の少女の足で、細く、先ほどの蹴りを放てるようには見えない。

(魔術ってやつなのか?)

考え込む海斗を見て、愛は両手を腰に当てて自慢げに胸を張った。

「残念でしたー私はただの一般人で魔術師ではありませんーん」

「あ？どういうことだ？」

「私はただ体術が優れているだけだよん。まあ………」

愛は目を細めると、先ほどと桁違いの殺気を放った。

それを受けた海斗は凄まじい悪寒を感じた。

(隙を見せたら……死ぬ!!!)

「ほんき……だす……」

ダツッ!!

コンクリートの地面を蹴って愛と海斗は駆け出した。





逃走劇〜四〜（前書き）

遅くなりました・・・。

## 逃走劇〜四〜

愛の右足による蹴りが海斗に叩きこまれる。

海斗はそれを一步後ろに下がりがわすと、隠し持っている折りたたみ式ナイフを取り出した。

( 一旦、気絶させるしかねえな )

能力を使おうと意識を右手のナイフに集中させようとした。

海斗としてもあまり長い間戦いたくなかったというのが一番の理由だ。

だが、

「・・・させない」

蹴りの勢いで体を一回転させた愛は膝を軽く曲げたかと思うと、ト  
ンツツと地面を蹴って

海斗の顔面に蹴りを放った。

「ッ！？（こいつッッ！？なんて体術だ！！）」

海斗は折りたたみ式ナイフを持っていない左腕で蹴りを受け止めたが、

愛はそのまま足の甲を左腕に引っ掛けるようにして、左腕を利用して海斗の頭上を縦に一回転した。

ドゴオッッ！！

その瞬間に海斗の頭部に凄まじい衝撃が走った。

「がッ！？」

海斗は額に流れてくる液体を確認すると、足を一步踏み出して、倒れそうになった体を強引に支えた。

だが、倒れずにいることで精一杯だった海斗の手から力が抜け、ナイフが転がり落ちる。

「災厄となりうる者……ここで……たおす」

「いつ、何言ってるやがる？」

呟くような愛の一言を海斗は疑問に思ったが、それどころでない今は思考を中断する。

後方に降り立った愛のほうに海斗は向き直った。

「お前が来るってことはやっぱり犯人はお前の兄か？」

「勝てばおしえてあげる……」

不適な笑みを浮かべながら額を袖で拭き、愛を見据える。

だが、言葉が返ってくる前に愛は再び走り出し、海斗の正面に出た瞬間、両腕を前に突き出した。

正確には両手は袖から出たサバイバルナイフをそれぞれの手で持つと、斬りかかるように次々と腕を振り回す。

海斗は冷や汗をかきながらそれをかわしていくが、反撃の機会は見当たらず、ナイフが腕や肩、頬をかすっていく。

総崎愛の強さは軽い体重を駆使した体術であって、本人は運動神経以外は普通の少女と変わらないかった。

それぐらいは海斗も理解できていたが、勝てる気がしなかった。

愛はおそらく、魔術を使うものも相手にしてきたはずであって、

相手に魔術といったものを使わせないような、隙を与えないような戦術だろう。

超能力であろうが他の何かであろうが、能力であるかぎり大差はない。

だが、

それでも勝つしかない。

シュッッ！！！

717

そう思った海斗の首に向かって、愛の左手のサバイバルナイフが伸びていった。

「ッッ！！！」

海斗はとっさに右足を蹴り上げて愛の左腕を蹴り、攻撃の軌道をずらそうとしたが相手のほうが速いためあたらぬ。

海斗の一連の行動に愛はとくに反応することなく首目掛けてナイフを突いた。

スッ！

海斗の首筋をサバイバルナイフが掠る。

皮一枚が切れただけのようで、血はほとんどでない。

確実に倒したと確信していた愛は

先ほどまで細めていた目を見開き、不思議そうに呟く。

「……なぜ……？」

ガッッ！！

直後、海斗の蹴りが床のほうから放たれ、反応しきれなかった愛は蹴り飛ばされ、宙を舞った。

蹴りといっても、今海斗が放った蹴りは、喧嘩キックなどといわれる足の裏で蹴る蹴りだった。

空中にしながら、愛は海斗の体勢を見て即座に理解した。

(わざと……体勢を一旦崩して……)

「能力だけに頼って生きてきたわけじゃあねえんだよ」

空中の愛の左手に握られていたサバイバルナイフが零れ落ちる。

海斗は追撃を与えるために、床を蹴り、走り出す。

愛はすぐに体勢を空中で立て直し、走ってきた海斗目掛けて右手のサバイバルナイフを振り下ろした。

ガキイイインツッ!!!!!!

金属同士のぶつかり合う音が辺りに鳴り響いた。



海斗は先ほど愛が落としたサバイバルナイフを走ってくる際に拾っていたらしく、

右手に持っているサバイバルナイフで愛のサバイバルナイフによる攻撃を防いでいた。

すじい。

愛の思ったことはこれだけだった。

口元を少し緩めると、床の上に降り立ち、サバイバルナイフを高速で振るう。

それに対し、海斗も応戦した。

ガキイン！！キンツ！！ガキイツ！！

静かな空間に金属音だけが何度も何度も響いていく。

ガキンッ！！キンッ！！

激しい斬り合いの中で海斗は左から右に薙ぐようにナイフを振るった。

それを上半身を後ろに逸らすことでストレスで避けた愛は左足で海斗の横腹を蹴った後、

「かつッ！！」

肺の空気を吐き出し、さらに蹴りによって仰向けに倒れ、苦しむ海斗にまたがると、

首筋を狙ってナイフを振り下りおろした。

だが、そのナイフも海斗の首に当たるか否かという、スレスレの位置でピタリッと止まった。

「  
」  
「  
」  
「  
」  
「  
」

彼女の首筋には海斗の右手のサバイバルナイフが突きつけられていた。

お互い、息を切らしながら、相手をにらみつける。

海斗の首筋には愛のナイフが、愛の首筋には海斗のナイフが突きつけられているという、

一瞬でも気を抜けば殺されるかもしれない状況で二人はそんな考えを持たず、疲れたようにため息をついた。

「引き分けつてとこか……ちツ！なまってやがる……」

「ちがうわたしの……負け」

静かな口調で呟いたかと思うと、ナイフを袖にしまい、海斗の上から降りて顔を下に向けた。

そして、再び顔を上げたかと思うと、先ほどとは正反対の満面の笑みになる。

「いや〜見事見事〜私の完敗です　じゃあ約束どおり、兄貴についての情報を教えてしんぜよう〜」

「あ？なぜ教える？テメエは兄貴の仲間じゃあねえのか？」

眉をひそめる海斗に対し、愛は予想外の答えを告げた。

「海斗さんに負けた時点で私はもうあの組織じゃあなくなっただ

！」

もはや、訳がわからない。

「どづいづことだ？」

「兄貴の目的は自身の娯楽だからね」

悲しむ様子もなく、寂しそうな素振りも見せず、淡々と告げる愛を海斗は心配そうな目で見た。

その視線に気づいたのか、愛はキョトンとした顔で海斗を見つめる。

「……で、お前はこれからどづいづする？」

「好きに生きるよ。それこそ、兄貴みたいだね！」

無言になる海斗に向かって、愛は腰に手を当てると得意げな顔になって言った。

「じゃあ教えるよ？」

逃走劇〜四〜（後書き）

次回、ステイルVSエルダ、決着！

早く更新できるといいな・・・。

## 逃走劇〜五〜

エルダは槍伝いにくる手の感触に違和感を覚えた。

目の前のステイルの腹部を槍は確実に貫いているのに、何も手こたえが感じられなかった。

まるで空を斬ったような感覚に陥っているエルダを前にステイルはルーンのカードを取り出すと

「まんまとはまってくれたようだね」

炎を放つ。

「なッ！」

エルダはとっさに反応して槍を持ったまま後ろに飛び退き、かわす。

そして起き上がるステイルを見ると、静かに呟くように言う。

「まさか魔術的に屋気楼を発生させることも出来るとはね・・・」



「炎を発生させてからの普通の屋気楼だと、使いどころも色々に限られるんだ」

「出し惜しみ？」

「まあね」

ガッツ！！

「くッ！？」

淡々と告げるステイルの腹部に次の瞬間、衝撃が走った。

「余裕ね」

風の衝撃波がステイルを襲ったらしく、口から血を吐きながらステイルは右手から炎を放った。

炎が攻撃直後のエルダを襲うが、エルダに炎が届くことはなかった。

エルダが体を回転させて槍を振るうと、エルダをとりまくように風が発生し、炎を消し飛ばした。

意識を保とうとフラフラしながらも立っているステイルにエルダは足音を立てながら歩いて近づく。

これなら勝った。そうエルダは確信しつつも油断はしなかった。

また相手が何を仕掛けてくるか、わからないからだ。

確実に、一撃で、倒す。

ステイルはかすかに口を動かして、呟いた。

「世界を構築する五大元素の一つ。(MTWOTF  
FTO)偉大なる始まりの炎よ(IIGOIIOF)」

「！」

魔術！？そう思い、エルダはステイルの周りを見渡す。

彼の足元には大量のルーンのカードが敷き詰められていた。

おそらく魔術を使う上で必要な物なのだろう。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり」  
I I B O L A I I A O E )

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり ( I I M H A I I B O D ) 「

危機感を感じ取ったエルダは、槍を横に薙ぐように振るい、衝撃波をステイルの足元に放った。

ゴッー！！

地面の土がめくりあがり、貼り付けられていたルーンのカードがはがれ、破れていく。

ステイルはそれを飛ぶことでかわしていた。

そこに。

「そこッ！！！」

エルダははまだ空中にいるステイルに向かって走り出した。

魔術の発動条件は潰した。潰すなら、今がチャンス！！

だが、エルダの予想に反して、ステイルは冷静だった。

右手に持っているルーンのカードを手放さずにいる。

エルダは一気に距離をつめていき、ステイルに止めをさす体勢に入った。

槍を振りかぶり、風を槍にまとわせた。

（貫く！！）

「その名は炎、その役は剣。 ( I I N F I I M S )

「 P  
「 顕現せよ、我が身喰らいて力と為せ!! ( I C R M M B G

ゴウッッ!!!

エルダは槍を突き刺したが、その槍がステイルに届くことはなかった。

「イノケンティウス 魔女狩りの王!!」

突如現れた炎の塊が、腕らしき形となって槍を受け止めていた。

槍が先端とその付近が一瞬にして溶けるようにして消え去る。

この間、約3秒。

炎の塊は巨人となってステイルを守るように立ちふさがる。

「ば、ばかなッッ!!!」

地面に降り立ったステイルは驚くエルダを見ると、熱風に衣服をなびかせながら言う。

「いくら風をまとわせていようとも、

『インケンティウス魔女狩りの王』の前では無力だ……」

「な、なぜ……カードはないのに!?!」

うろたえながら、何も出来ずに立ち尽くすエルダを見ながら、ステイルは忌々しそうに頭をかいた。

「君の後ろ……だ」

「ッ!!!!!!!!!!」

後ろを見ると、通路を埋め尽くすように、大量のルーンのカードが

貼り付けられていた。

戦い始める前はなかったことを思い出し、今までのステイルの行動を思い返す。

ステイルはずっと一方的に自分に負けていたはずだ。

そこでふと、自分がステイルを蹴り飛ばしていた瞬間を思い出した。

「ま、まさか、蹴り飛ばされた瞬間にはら撒いたのか!？」

蹴り飛ばされた際にステイルは大量のルーンのカードをばら撒いていた。

不自然に感じられぬように、攻撃が中断させられたように見せかけて。

「君が油断してくれなくて助かったよ。僕の行動に注意しているからこそ、裏をかけた」

普段のステイルならこういった策は取らないだろう。

ステイルが不機嫌そうな理由はその作戦が、自身だけで考えた作戦ではないからだ。

土御門元春。彼によって相手の裏をかくコツをアドバイスしてもらった。

スパイである彼にとっては得意なことだったのだろう。とステイルは舌打ちしながら土御門の姿をを思い浮かべる。

「……私のまけだ」

エルダは力なく答えた。

摂氏3000度の炎の巨人を前にして、膝から崩れ落ちる。

ステイルは懐からタバコを一本取り出すと、口にくわえ、ライターで火をつける。



「なら、君はこっちで捕らえさせてもらっよ……異論はないね  
?」

「ああ……」

上条たち三人はムルド「ゲイボルグと名乗る、ガタイのいい男と相  
対していた。

ムルドの腰の鞘には一本の剣が収められていた。

「大将からの命令でな……戦って来いだとさ」

「大将……だと?」

疑問に思ったことをそのまま告げる上条に対し、ムルドはケロツと  
した顔で答えた。

「総崎怜二っていうんだけどよ」

「ばらすんかい!!ばらすの!?!ばらしてるんだよ!!」

三人の言葉を受けたムルドは豪快に笑うと

「はっはっは!!言えって言われてんだよ!!」

「そ、そうさきつてもしかして……まなのお兄さんってこと!」  
「?」

ムルドは首を鳴らしながら、好戦的な笑みを浮かべた。

もうインデックスの話など聞いてすらいなかった。

「さて、っと俺の相手してもらおうか!」

「下がってる!」

上条は秋野とインデックスの二人を腕で制し、前が出る。

「あ、ちなみに言っとくぜ?」

忘れた物を思い出したような、緊張感のない声でムルドは言い放った。

「俺は聖人だから」

「なツツ!」

逃走劇(五)(後書き)

ムルド強そうw

逃走劇(六)(前書き)

口調・・・変ですがご勘弁を・・・。

## 逃走劇(六)

ローラースチュワートは大聖堂の奥にいた。

総崎怜二が何を考えているか、じっくり考えているが、いまだ、わからなかった。

ステイルの報告によると、エルダという敵は捕まえられたらしいが、怜二の意思はわからない。

戦争をさせてやるという考えには裏があるはずだ。

そう考えてみたが、以前わからないことだらけである。

(・・・どうしたりけるの?)

不意に、大聖堂の扉が開いた。

ギイツ

「アークビショップ  
最大主教・・・ね」

必要悪ネセサリウスの者でないことはすぐにわかった。

ローラ＝スチュワートは警戒しながら入ってきた少女を見つめる。

すると少女のほうから口を開いた。

「はじめまして。私は天川真紀・・・能力者で魔術師なんです」

「天川・・・例の魔術師が私に何の用がありて？」

「・・・天地海斗がなぜ指名手配されているのですか？」

「奴が犯人でありけるからよ」

ローラ＝スチュワートは冷静に天川に言い返した。

天地海斗の知り合いだったのか？

そんなことを考えるローラ＝スチュワートに天川は眉をひそめると

「貴方ほどの人が間違えるなんて思いません」

「根拠はありけるのかしら？」

「はい……取引でも……したんですね？」

天川のそれは賭けだった。

土御門の推測だが、ローラ＝スチュワートが黙り込んだ様子を見ると、どうやらあたっているらしかった。

ローラ＝スチュワートは一度目をつぶり、考えた。

まさか、総崎怜二は情報をもたらしたのか？

ますます何をしたいのかわからなくなる。

どの道、ここから逃がすわけにはいかなくなった。



ローラ＝スチユワートは横目で聖堂内を見回すと

「……まだ必要悪でない人間がここに入ってきてもいいと？」

手を動かした。

ザツという音がしたかと思うと、大量の修道女が武器を構えて天川を取り囲んだ。

「私を、殺す気ですか？」

辺りを見回しながら冷静に呟く天川にジリジリと修道女たちが近づいてくる。

天川は攻撃する魔術を持ち合わせていなかった。

それを知っているローラ＝スチユワートは淡々とした様子で続けた。

「命乞いすれば助けてやらないこともなくてよ？」

だが、天川の答えはローラ＝スチユワートの予想とは違った。

「私でも……」

掌に小さな青白い魔方陣を作り出すと、その手を突き出し、真剣なまなざしのまま呟いた。

「大切な人のためなら、戦えるんです!!」

魔方陣が輝きはじめた瞬間、ローラ「スチュワートの合図とともに

修道女たちは天川に向かって駆け出した。

「お前の兄貴は何を考えてる？」

「私にわかると思う!？」

小首をかしげて振り返る愛に海斗は呆れることしか出来なかった。

真意もわからずに協力していたとなると、理解できない。

二人は今、地上に降りて街を歩いていた。

一度逃げ切ったので、地上に戻るほうが動きやすいからである。

「さっきお前……妙なこと言ってたよな？」

戦闘中のことを思い出すと手で折りたたみ式ナイフをいじりながら問う。

「妙なこと？」

「ああ・・・災厄とかなんとか」

「・・・」

一息置いてから、愛はサバイバルナイフを右手に持ち、海斗に突きつけるとニヤリと笑う。

突きつけられた海斗は全く焦っていないかった。

刺す気がないことくらい、わかっていたからだ。

気だるそうに愛を見ると、ため息をつく。

愛はそれを見ると、袖にナイフをしまい言う。

「当麻さんの幻想殺しはその性質故に災厄を呼ぶ。」

イマジンブレイカー

海斗さんの力はそのもの自身が災厄となりうる者となる力」

「何が言いたい？なぜお前が俺の力を知っている？」

「兄貴が呟いてた」

「それ以上知ってそうだったが・・・」

「知らないもん！！」

海斗は舌打ちすると、折りたたみ式ナイフをしまい、愛を見た。

見たところ嘘をついてる様子はない。

「性格が変わってたのは？」

「・・・・・・・・」

愛は急に黙り込むと、うつむいて少し迷ったような顔をする。

「あの様子じゃあ二重人格ってところか……」

「あは ばれちゃったか……人を殺そうとか思ったりした時とか、

入れ替わったりするんだ……何もなくても時々入れ替わる

よ?。」

頭をかきながら舌をチロリと出す愛に対し、海斗は考えを進めた。

やっぱり全てはコイツの兄貴が知っているんだな……だが、

幻想殺しはともかく、なぜ俺の力を知っている?しかもかなり詳しく  
そうだ。

しかし、海斗はそこで考えることを止めた。

二人の周りをいつの間にかたくさんの修道女たちが囲んでいたから  
だ。

「そろそろ暴れてもいいか？もちろん、肉弾戦で」

拳をパキパキと鳴らしながらため息をつく。

「私にも戦わせよう？やっるじゃん！兄貴と変わんないね」

「気絶させるだけにしとけ」

好戦的な笑みを浮かべる愛の行動に注意を払うべきだな、などと考えながらも呟いた。

「さあって、と……二分で終わらせてやる」

ムルドの攻撃は単調だった。

駆け出したかと思うと凄まじい速さで迫ってくる。

そして、急に地面を蹴って飛び跳ね、握り拳を作ると落下するよう  
に近づいてきた。

それにギリギリ反応できた上条はムルドの拳を避ける。

バキバキツツ!!!

アスファルトの地面が音を立ててクレーターを作った。

その衝撃により、上条も少しだけ後ろに転がった。

「がツツ!!!」



「ほ〜今のに反応するとはやるね〜」

うれしそうにムルドは眩く。

上条はすぐに起き上がり、相手の出方を伺う。

(相手は聖人だ・・・一瞬足りとでも気を抜けない!!!)

「なら、これはどうかな!?!」

ムルドはその太い腕で足元にあったアスファルトの塊を持ち上げたかと思いつと、

「うおおおおおおおおッ!!--!!」

それを上条に向けて投げた。

ゴウッ!!--!!!--!!



もわかった。

だからこそ上条もただで突っ込んだわけではなかった。

(相手の勢いを利用できたら!!!)

突然、足を止めてブレーキをかかどで踏み、勢いよく後ろにジャンプした。

ズキリツと膝に負荷がかかり、激痛を発するが、歯を食いしばり堪えて目の前の敵に意識を集中する。

ムルドもそれに反応して勢いよく地面を蹴り、上条の正面に突進する形で今度こそと拳を繰り出した。

(のってきた!!!いまだ!!!)

空中で体を強引にひねり、右向きに一回転し拳をかわした後、その腕をつかみ、そつと受け流す形でムルドを投げ飛ばした。

「おおッ!!!?うおお!!!」

自身の勢いと上条の決死の行動により、通りのビルにムルドは叩き込まれた。

ドゴオツッ！！！！！

（……………やったか？）

今更自分のした行動に冷や汗をかきながら上条は砂埃の中にいるであろうムルドを見た。

これで決着がついていてくれることを祈りつつ、その場をにらんでいたが、その希望はあっけなく碎かれることとなる。

「おーいててて……………やるじゃねえか。びっくりしちまったぜ」

ガラガラと崩れるビルの中からムルドが出てきた。

少し衣服が汚れているだけで、外傷も大きくない。

心が折れるかと上条は思った。

そんな上条の様子も気にせず、ムルドは腰の剣を手にとると笑う。

「これなら本気だしてもいいよな？」



逃走劇〜七〜（前書き）

後書きを読んでいただけたらと・・・。

この作品に関わることで・・・。

## 逃走劇〜七〜

ここはとあるビルの上。

特に人気もなく、魔術に関係なさそうな場所で土御門は血まみれになって倒れていた。

血まみれと言っても致命傷はないようで意識はしっかりとあった。

その土御門は顔を上げ、正面に立つ青年をにらんでいた。

睨まれていた青年、総崎怜二はなんともいえない表情のまま口を開いた。

「僕は君がそんなに無謀だとは思わなかったよ」

「……」

「取引についてもこんなに早く見破られるとはね……」

「……簡単なことだ。あのローラ・スチュワートが犯人を間違え



るわけがないし、俺の目はごまかせない」

不適な笑みを浮かべる土御門。

そのサングラスの奥の瞳は揺らいではない。

「仲間たちだけに無茶はさせないとも？わからないな」

「ここに来たのは俺の個人的な意思だ。お前が気に食わなくてな」

「まあいいよ。おかげで退屈しなかった」

右手を差し出すと、怜二はその手に剣を出した。

そのまま右手を振りかぶる。

土御門と怜二の距離は2、3メートルあった。

おそらく剣を投げつける気だろう。

土御門はそれをどうにかしようと思いの道具をあさる。

(あれ一発ならどうにか避けられそうだ)

「あ、それとだけどね・・・」

何か思い出した口調で怜二は呟き、剣を投げるべく右腕を大きく振り下ろした。

「僕のこの魔術はあくまでおまけなんだ」

「なッッ!!! (しまった!!! 反応が遅れた!!!)」

驚いて反応を遅れてしまい、自身が串刺しになる姿を想像した。

ここまでか。

剣は土御門目掛けて一直線に飛ぶ。

だが、剣が土御門を貫くことはなかった。

ガキンツッ！！

金属がぶつかり合う音が響いたかと思うと、視界に赤い刀が入った。

何がおきたかわからない土御門は思考を張り巡らせて状況を理解しようとする。

それよりも先に怜二が口元を緩めて話し出した。

「随分と早いじゃあないか。天地海斗君？」

(こいつが！！天地海斗！！?)

土御門は目を大きく見開き、天地海斗と呼ばれた少年を見た。

海斗は怜二と土御門の間に土御門を背にして立っていた。

右手には赤い刀を持っている。

「似た者同士……か、反吐が出る」

「お互い育った環境と正反対の性格に育ったんだ。似た者同士ってやつじゃあないのかい？」

「ハッ違えねえ!!」

海斗は鼻で笑うと刀の切っ先を怜二に向ける。

「色々聞きたいことがある……今は一つ聞かせろ」

「いゝよ」

「俺の能力の何をどこまで知っている？」

「半分くらい……かな？魔術でも科学でもはかれないしね」

「教える」

「無理だね」

怜二は即答した。

先ほどまでとまどっていた空気が変わったかと思うと呟くように言った。

「君の力は本来生まれるはずがなかった力………言わゆる副産物」

「あ？」

「そっだね」

一息つくくと右手に剣を作り出す。

「語り継がれなかった物語………とでも称するか」

(ッ!?)

ヒュンッ!!

直後、剣が投げ飛ばされた。

海斗はそれを弾くと、屋上への入り口に向かって叫んだ。

「総崎愛!!!そいつを連れて離れとけ!!!」

「あいあいさー」

愛はヒュンッとして現れたかと思うと、土御門を引きずるように屋上の端まで移動した。

「これで戦える」

「僕は君と戦う気はなかったんだよ?」

「知るかよ!」

海斗は赤い刀の刀身に赤い光を纏わせると、高速で怜二に向かって駆け出した。

ムルドが刀を振るったのを間一髪で上条はかわした。

かわせたのは奇跡と言っても過言ではない。

反撃するチャンスは今しかない。

そう思った上条は拳を握り締めると力強くムルドの懐に飛び込んだ。

だが、

「おらあー!!!」

ムルドがもう一線、強引に剣を振り回し、上条を切ろうとした。



避けられないと思い、上条は立ち尽くすことしか出来なかったが、  
剣は上条に当たらずにその真横を

通り過ぎた。

（なんだと!?!）

「うわッッ!?!（な、なにが!?!）」

その風圧により、上条の体は宙を舞い、近くの地面に叩きつけられた。

「かはッ!?!」

全身を激痛とともに凄まじい衝撃が駆け抜ける。

意識が一瞬飛ぶかと思った。

（動け!?!早く動くんだ!?!）

上条は体に言い聞かせながらユラリと起き上がるとムルドを見た。

ムルド自身も未だ何が起きたかわからないようだ。

「何が起きた？今の変な感覚は……まさか!！」

睨むように上条から少し離れたところを見た。

ムルドは手をかざしている秋野を見ると

「お前さんか……」

「あ、秋野？」

「あや？」

つられたようにインデックスまでもが秋野を見た。

秋野は少し表情をこわばらせたまま、冷や汗をかきながら言う。

「私の貧弱な能力でも役に立てたみたい・・・」

上条はすぐに理解した。

秋野のレベルは低いが、ムルドの攻撃の軌道を微かにずらす事ぐら  
いは出来たのだろう。

上条が斬られなかったのも、秋野の能力によるものだった。

「邪魔するなよお嬢ちゃん」

不適な笑みを浮かべたかと思うと、秋野に向かって駆け出した。

「秋野！！！！！！」

上条も駆け出すが、ムルドのスピードには全くついていけなかった。

ムルドは秋野の正面に出ると剣を構える。

(えっ)

突然のことに反応出来ずに秋野は恐怖に体を振るわせる。

目を閉じることすら忘れて、全身に悪寒が走る。

「怪我するぜ！..！」

ムルドは思いっきり秋野の胸に剣をつきたてようと攻撃を繰り返した。

「秋野おおおおおおお！..！」

「あや！..！..！」

ガキインツツ!!!!!!

「……もう動いていいのか？」

「私が相手になります」

ムルドの剣を長い刀を持った女が刀を抜いて受け止めていた。

秋野は理解出来ずに目をパチクリしている。

上条は驚いたようにその人物に向かって叫んだ。

「か、神裂!!!!!!!!!!!!!!」

インデックスは少しホッと安堵の表情を浮かべると、その場に座り込んだ。

「お久しぶりですね・・・上条当麻」

神裂は横目で上条を見るとそっと微笑んだ。

ギギギという音を立てながら互いの武器を己の武器で受け止めている。

ムルドはそれを見るとニヤリと笑う。

「おいおい。アンタが出てくるのは反則じゃあねえか」

「お互い様です」

ムルドは一旦後ろに飛んで、神裂と少し距離をとる。

相手も聖人となった以上、油断は出来ない。

神裂は上条とインデックスと秋野を順番に見ると

「行ってください！この道の突き当たりのビルの屋上に！今回の黒幕がいます！！」

「でも神裂！！！！」

神裂が一度やられた事は上条も知っていた。

となると今の神裂は病み上がりだろう。

とても無茶はさせられない。

そう考えた上条を急かすべく、神裂は彼の性格を把握した上でこう促した。

「急いでください!!!土御門の姿が見えません!!!おそらく敵の所に!!!」

「なッ!!!で、でも!!!」

「あの敵は!!!貴方がいないと倒せない!!!だから行ってください!!!」

上条は少しの間戸惑ったが、すぐに自身の中で決断をするとインデックスと秋野を手招きして呼ぶ。

そして神裂のほうに向くところ言い放った。

「わかった!!!無理だけはするなよ!!!!!!」

再び神裂に背を向けると三人は走り出した。

ムルドはそれを見ると、三人の元に向かって駆け出す。

「させるか!!!」



ガキイツッ!!!

「貴方の相手は私だと言ったはずです！」

神裂はムルドに切りかかり、ムルドの行き手をを阻んだ。

(頼みましたよ……上条当麻)

## 逃走劇〜七〜（後書き）

この章で一旦この作品を終わらせて、  
主人公等変えずに続編を出そうかと考えています。

理由はまあ・・・もともとそのつもりなんですけどね・・・。  
もっといい作品にしたいので、またよろしく願います。  
後、続編のほうには世紀末帝王出す予定。  
もう少し原作キャラを活躍させたいので。

今の作品 海斗が居場所を発見、少しずつ性格が・・・。  
続編 ネタバレなのでw

わかりにくかった所をわかりやすくしたいのもありますし。

今後とも、これを今読んでいただいている方、応援よろしく願います！

逃走劇と合流（前書き）

だ、駄文w

## 逃走劇〜合流〜

天川の体を魔方陣が覆ったかと思うと、天川は一斉に襲い掛かってきた修道女たちの

攻撃を簡単にかわしていく。

紙一重で、かすることすらなく。

(まさか!!)

天川の避け方を見てローラースチュワートは考えを張り巡らせる。

「今の私にそんな攻撃は効きません」

修道女たちが一斉に攻撃を繰り出したのを2、3回転して避ける  
手にもう一個の魔方陣を作り出すと

真剣な目で辺りを見回した。

「無駄です」

「まさか、神経をいじくったとでもいいけるの!？」

ローラ「スチュワートは目を疑った。

天川は魔術で神経をいじくることで、反射神経などを強化しているのだ。

攻撃系魔術を持っていないにしても十分脅威だった。

それを知ってか否か、少しだけ眉を潜めるローラ「スチュワートを見て天川はこう呟いた。

「私は戦いに来たものではありません」

高速で駆ける海斗に向かって怜二は余裕の笑みで呟いた。

「感電死」

直後、怜二の正面の何も無い空間から電撃が放たれた。

バチバチと音を立てながら迫ってくる高圧電流に、

海斗は床に向かって思いっきり刀を振り下ろし、斬られて剥き出しになった床のコンクリートの瓦礫を盾にして

対応した。

ドゴオンー……！！！！

瓦礫は破壊され、砂埃が舞い散る。

「クソッ！」

顔についている砂を袖で拭きながら海斗は怜二から目を離さずにいる。

海斗は駆け出すと怜二に向かって赤い斬撃を放つ。

斬撃はかなりの勢いで怜二に迫っていく。

だが、怜二は慌てることもなく静かに呟いた。

「消え失せる」

バアンツ！！

弾け飛ぶように斬撃が怜二の正面で消えうせたかと思うと

「切り刻まれる」

怜二の頭上に五つほど短剣が出現したかと思うとその短剣の一つが海斗に向かって飛んでくる。

ヒュンツツ！！

海斗はとっさに刀を振るい、それを弾く。

ガキンツツ！！

海斗が刀を振り切った瞬間、残りの短剣が一斉に海斗に向かって一直線に飛んでいく。

「これで終わりだよ」

(防ぎきれねえ！！！！！！)



二つまでなら彼は防げると確信していた。

だが、放たれた剣は四つで一つ目はこのままだと絶対に防げない。

ガガガガガガガガッ！！！！

一斉に短剣が海斗ごとビルの屋上の床を削りとった。

辺りに砂埃や粉塵が舞い上がり、怜二の視界を覆いつくした。

つまらないといわんばかりの目でどこか遠くを見る怜二。

彼が振り返り、その場を去ろうとした瞬間

「まだだ」

ゴオツツ!!!

ある声とともに、粉塵が吹き飛ばされた。

「！」

怜二はバツと勢いよく振り替わり海斗を見た。

どこにも傷はなく、足元には弾かれた短剣が転がっている。

「……鞘を出せるとは知らなかったよ……（この段階まで目覚めるとはね……）」

海斗の左手には先ほどまでなかった真紅の鞘が握り締められていた。

そして右手に握っている刀は纏っていた赤い光を取り込んだかと思うと、

赤かった刀身は今までより鋭く、まさに真紅といえる色になっていた。

(コイツと戦ってるって体の奥から力が湧き出してくる……)

海斗は鞘をベルトに通し、左側に固定すると静かに腰を低くして構えた。

「行くぞ」

怜二はその声を聞いた瞬間、余裕の笑みを浮かべた。

ダッッ!!!

高速で怜二の懐に入り、赤い光を纏わせた刀を下から上へ振るう。

だが、怜二の表情が変わることはなかった。

ガキンッ！！！！！

怜二の手前で刀が何かにさえぎられる。

「何ッ」

「潰れる」

怜二の声がしたかと思うと、上から恐ろしいほどの力が体にかかった。

バコオッッ！！

海斗の足元の床が陥没し、クレーターが出来る。

「ッッ！！」

何とか屈むことで持ちこたえている海斗だが、メリメリと体中が悲

鳴を上げている。

何が起きているか聞きたいことだらけだった。

体を必死に立ち上がらせようとする海斗に怜二は右手に剣を出現させること

「止めだよ……僕はあまり君と正面からぶつかりたくないんだよ」

「何……だ……と？」

「色々あるんだ。じゃあね」

怜二はそう呟くと思いつきり海斗の頭目掛けて剣を振るった。

バキンッ！！！！！

「ッ！！！」

「！」

何か打ち消されるような音とともに、怜二の手から剣が消えつせ  
た。

ガッツ！！

何が起きたか理解出来ない海斗の前の怜二は何者かに殴り飛ばされる。

怜二は何が起きたか理解していたようで、あまり驚くことはなく、すんなりと起き上がった。

そして殴り飛ばした人物を正面から見つめる。

「お早いご登場で」

海斗は自分の前に現れた上条当麻の姿を見ると驚いたように目を見開いた。

「上条……なんでここが？」

「大丈夫か？天地！」

上条はそっと海斗に触れ、海斗にかかっていた圧力を取り除いた。

ヨロヨロと起き上がると海斗は上条とともに肩を並べた。

それを見た怜二は不適な笑みを浮かべたまま叫んだ。

「拘束せよ」

ガッツ！！！

「「きゃッツ！！！！！？」」

屋上の入り口辺りから声がしたかと思うと、インデックスと秋野綾の二人の足元から檻が現れ、

一瞬にして二人を閉じ込めた。

「ッツ！！！！！」



「二人ともッッ！……！」

駆け寄ろうとした上条と海斗の前に怜二が立ちふさがった。

それを見た二人は顔をしかめながら立ち止まる。

怜二は言う。

「あの二人を助けたいなら僕を倒すんだね」

「とうま……！」

インデックスの叫び声を聞いた上条はとっさにインデックスのほうに向いた。

彼女は檻に捕まりながら一生懸命な様子で叫ぶ。

「とうま……！その人の魔術は多分！アルスリマクナ黄金練成だよ……！」

考えたことをなんでも現実に出るちゃっ魔法だよ!!!」

「なッッ!？」

海斗はそれを聞いて驚いた。

考えたことを現実に出る能力など無敵ではないか、などと考える  
海斗に対し

(アウレオルスと同じ魔法か！)

上条は覚悟を決めた様子で右手の握りこぶしを握り締めている。

怜二は余裕の表情で右手に剣を作り出すと告げる。

「全て僕の思い通りだ。今までも、これからも」

一同全員が息を吞んで冷や汗を流した。

だが、ある人物の一言がその沈黙を破った。

「いいぜ・・・」

力強い声が響く。

「てめえがなんでも思い通りに出来るって言うんなら」

ヒュンッッ!!

怜二は剣を投げつけた。

だが、上条はすばやく右手を突き出し、剣に当てた。

バギンッッ!!!

彼の右手に当たった瞬間、剣は消えつせる。

「  
まずはそのふざけた幻想をぶち殺す!!」

## 総崎怜二

上条は総崎に向かって駆け出した。

海斗も上条の後ろに続いた。

怜二はとくに慌てることもなく上条たちを見ながら呟いた。

「焼殺」

ポオツツ！！という音とともに業火が一直線に二人を包み込むように襲う。

「うおおおおおおお！！」

右手を振るい、炎を吹き飛ばす。

イマジンプレイカー  
（幻想殺し……）

海斗は上条の右手を見て違和感を感じた。

あの右手の『奥』に何かがある？

確信はないが、彼の右手は何か秘密があると思えて仕方がなかった。

彼すらも知りえない『何か』が……。

感情や思考による予想ではなく、体から沸きあがるような本能的なものに近かった。

上条はそのまま怜二のもとにかけていく。

怜二が軽く左手を振るうと上条の頭上からいくつもの電柱が出現した。

上条の視界の端の越しに見える道路から電柱が数本消えていた。

(まさか！？本物を移動させて！？)

上条は一瞬右手を構えてしまったために立ち止まってしまっている。

(しまっ！)

数本の電柱が上条に直撃するか否かという瞬間に、刀を鞘から引き抜いたような無機質な音が聞こえた。

カチンッ！

直後、音もなく電柱が真っ二つに斬られて上条を避けるように床に落ちる。

タンッ

次の瞬間、上条の真横に刀を鞘に納めた状態の海斗が降り立った。

「あ、天地……」

彼は上条を横目で見た後正面の怜二を見ると腰を低くして左側の刀の柄に手をかける。

「一人で無茶すんじゃないやあねえよ」

「ああ、わかった。・・・二人で勝つぞ!」

「ハハッ! 覚悟はいいな総崎怜二!」

ダッ!と海斗は思いっきり床を蹴って怜二に突っ込んでいく。

怜二は突如両手に長剣を出現させると、海斗に高速で接近して剣を振り下ろした。

ガキインツツ!!!

海斗は刀を鞘から引き抜き、それを受け止める。

鏝迫り合いの状況下、海斗は怜二を静かに睨みつける。



（右手が動かねえ）

「圧殺」

少しずつ押されていく海斗の頭上に突如、トラックが現れた。

「ツツ！！」

そこら辺に走っているトラックとは違い、サイズがかなり大きかった。

おそらく魔術で生成した物だろう。

このままでは押しつぶされる。

海斗は後ろから聞こえる足音の主に向かって叫んだ。

「俺の肩を使え！！上条！」

「っおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！！」

上条は海斗の左肩を蹴って海斗の頭上に出ると巨大トラックのタイヤに右手を触れさせた。

触れたというより掠ったに近かったが、それでもトラックは一瞬にして弾け飛ぶ。

直後、上条は体を半回転させ、大きく右手を振りかぶってまだ海斗と斬りあっている怜二に向かって拳を繰り出した。

「甘いよ」

シュンツと音もなく怜二が海斗の前から消えうせた。

海斗の正面に剣だけがカランツと音を立てながら床に落ちる。

「「ッッ！……！」「」

(ギョ、ギョッ)

ドトオッ……

「か……はあッ……」

上条が辺りを見回した瞬間腹部に衝撃が走った。

よく見ると、怜二のものと思われる足が腹部にあった。

体からメシメシと骨のきしむ音が聞こえる。

口の中いっぱい血の味がする。

おそらく蹴られたのだろうと思いをようやく追いつかせた上条は

そのまま蹴り飛ばされて床に背中から落ちた。

「ぐッ！ッッ！ー！」

「なッ！？」

よく見ると怜二は何もない空間に立っている。

海斗が驚いた瞬間、怜二の姿が彼の視界から消えた。

ドオンッ

「ちツッ!」

風の塊のような物が海斗を突き飛ばした。

ゆっくりと立ち上がる上条の横まで飛ばされた海斗は、床に体を打ちつけながら転がる。

体に走る激痛を無視して、強引に踏みとどまると、すぐに起き上がった。

そのまま二人はもう一度怜二に向かって駆け出した。

怜二が足踏みしたかと思うと、床の亀裂から凄まじい衝撃波が二人を襲う。

「」  
「」  
「」

「威勢が良くて勝てないよ？」

二人は正面から謎の爆風に襲われた。

上条も反応しきれずに二人とも端にある柵まで吹き飛ばされて体を柵に叩きつけられる。

「かッ!!」

「がッ!!」

肺の空気が一気に吐き出され、一瞬呼吸すら出来なくなつた。

だが、二人は柵に手を掛けながらも起き上がる。

海斗は口元についた血を拭きながら悔しそうに怜二を睨む。

「クソッたれが・・・」

「はぁー……」

怜二はため息をつくると二人を正面から見た。

「面白くないよ」

「あ？」

「何だと」

怜二は不適な笑みを浮かべると右手に剣を出現させてクルクルと掌で回しながら続ける。

「教えといてあげるよ……その力の本質の一つは『掌握』だ。

君が一番使っているモノさ。他にもあるけどね……」

「一体何を言っているんだ!？」

「いつか知ることになるぞ」

それより、と今度は怜二のほうから駆け出した。

「僕を楽しませてよ」

再び爆風が二人を襲う。

だが、上条は海斗の一步手前に出たかと思うと右手を振りかざし、爆風を振り払った。

「ふざけんじゃあねえよ……」

上条は爆風を振り払いながら叫んだ。

「てめえが楽しむためだけにこんな騒ぎを起こしたって言うのかよ  
！！！」

怜二は二人のもとに向かって駆けながら答える。

とくに表情を示さずに、当たり前といった表情で。

「そうさ！僕の娯楽のためさ！！だが、それがどうしたんだい！？」

「てめえ!!」

「クソ野郎が!!」

二人も怜二に向かって駆け出した。

走りながら怜二は左手に剣を作り出すとそれを投げつけた。

キンッ!!

海斗によってそれは難なく弾かれる。

二人の正面に移動すると、そのまま剣を横に薙ぐように振るった。

バギンッッ!

何かを打ち消すような音がしたと同時に剣が消え去った。



上条が右手で剣に触れたのだった。

だが、怜二の放った烈風により床に叩きつけられ、上条の体は2、3メートルノーリバウンドで飛ぶ。

彼は飛ばされながらも海斗に向かって叫んだ。

「今だ！！・・・・・・天地！！」

「　　ああ」

カチンッ！

海斗は刀を鞘に収める。



再び攻撃を何も無い空間で止められた海斗の腹部に怜二の拳が入った。

ドゴオオツツ！！！！

「しっつはっ！！！！！！！！」

顔をしかめる海斗を見て、

「君の攻撃僕に届くことはない」

怜二は再び右手に剣を作り出すとそれを振り下ろした。

バシィィッ！！！！！！

怜二は目を見張った。

剣を持っていた右手の手首が、海斗の刀を持っていたはずの左手に受け止められていたのだ。

海斗の腰を見れば、いつの間にか刀は鞘に収められている。

海斗は口元から血を流しながら思いつきり叫んだ。

「俺の攻撃が届かないのなら……上条おおおおお！！！！！！」

直後、海斗後ろから上条が右手に握りこぶしを構えて飛び込んできた。

怜二の顔面を見据えて拳を構えている。

上条は歯を食いしばって拳に力をこめながら怜二の一言を思い出す。

『全て僕の思い通りだ。今までも、これからも』





「だから戦いたくなかったんだよ」

バサアツツ！！！！

怜二の背中から突如大きく真つ白な翼が生えた。

白というより、どちらかというと黄金に輝く羽を持つ翼。

神々しい光を放つ翼生やした怜二はやる気のない様子で呟いた。

「僕の負けだよ」

〜終結〜(前書き)

次作一話・・・もう書きちゃったんですねw



〜終結〜

「何だよ！？何が起きてんだ？」

上条は総崎怜二の姿を見て驚いている。

「とつまー!!」

「インデックス!!」

上条は駆け寄ってくるインデックスと秋野の傍によると、怜二のほうに振り返り、尋ねる。

「何が起きてるんだ!?!」

「異常な天使テレスマの力をあの人が発しているんだよ！」

怜二は翼を羽ばたかせて空中で静止したかと思うと、四人を見下す形で口を開いた。

「この力が目覚めてしまった以上、僕はもう魔術は使えなくなった。僕の負けだよ」

強大な力を目の当たりにした上条とインデックスと秋野は身を伏せた。

気を抜けば、取り込まれそうな、そんな感覚に陥った。

(どどどするー!?)

「海………斗?」

上条は動揺する秋野の声を聞き、すぐに秋野の視線の先に顔を向けた。

そこには呆然と立ち尽くす海斗がいた。

チカラヲ感ジル

(何・・・・・・・・だ)

脳内に直接響く声。

相反スル存在ヲ感ジル

(この感じ・・・・・・・・俺自身の・・・・・・・・)

自分の中に別の意識があるのかと今まで海斗は何度か疑ったことがあったが、それは違った。

自分自身の意識だと海斗は確信する。

### 殲滅セヨ

(……………またか……………よ)

刹那、まるで引きずり出されるように、海斗の右腕には赤い装甲が現れ、

刀と鞘が消えたかと思うと、赤い大剣が右手に握られていた。

目は瞳孔が赤く染まり、その瞳は怜二を捕らえている。

(アイツと俺の力……………何か関係あるのか?)

海斗が意識を保っていること自体、異例だった。

今のままでも十分かつての恐ろしい一撃を放てるはずだ。

もし暴走すれば惨劇を生むことは予想できた。

モット高み二

。

真ノチカラヲ

バキバキバキバキバキツツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

赤い大剣と赤い装甲が突如碎け散ったかと思うと、

それらの破片は赤黒い光となって海斗の体に吸い込まれていった。

ドバアツツ!!!!!!!!!!!!!!

直後、俯いている海斗の背中から、赤黒い血のような色の噴射の翼が生えた。

空気を切り裂き、圧倒的存在感を放ちながら海斗は顔を上げて怜二の方を見る。

すると、怜二はつまらなそうに呟いた。

「この力が目覚めるのは僕としてもうれしいけどね……つまらないんだよ」

「？」

「まあここでお開きにしようか。これ以上同じ場所に居続けたくないからね」

そう告げると怜二は翼を広げたまま両腕を突き出し、光の塊を作り出した。

思わず見とれてしまうような、美しい光の塊。

だが、それを見た海斗は思わず息を呑んだ。

あんな物がここに落とされれば一溜まりもない。

おそらく自分や上条以外は全員死ぬだろう。

ゴォツという音とともに海斗の背中に生えている赤黒い翼を大きく広げると右手を前に突き出した。





二人は同時に腕を振り下ろした。

海斗が赤黒い刀を振り下ろした瞬間、刀から凄まじい斬撃が空気を切り裂き、

轟音を出しながら怜二の元に突き進む。

対して、怜二の放った光の塊も海斗目掛けて飛んでいった。

ドッッ………！！！！！！！！！！

強大な力と力が激突した。

その余波で海斗たちの立っているビルの屋上の床が所々崩れ始める。

上条たちはどうすることも出来ずに立っていることしか出来なかった。

「天地！！！！」

「かいと！！」

「海斗！！！！」

三人は叫ぶが、海斗には聞こえていないようで振り返りすらしなかった。

海斗の後ろ姿を見た上条は少しだけどこか知っているような感覚に陥った。

天地・・・・・・・・お前は一体、何者なんだよ？

しかし彼の心の中での問いに誰も答えることはなかった。

衝撃の余波により発生した光が辺りを包み込んだ。

あれから数時間が経過した。

イギリスのとあるビルの屋上を歩いている総崎怜二に体格のごつい男が声をかけた。

「大将！只今戻りやした」

「ムルドか」

「あの女撒くのに苦労しやした」

ムルドは状況の報告をした後、怜二のボロボロの服を見ると心配そうにたずねた。

「随分とボロボロのようですが・・・」

「ああ・・・」

怜二は自身の服を見ながら、最後の激突を思い出して呟いた。

「こんなの怪我にも入らないさ」

「そ、そうでしたか・・・」

「それより、少し待機しててくれないか？」

「は？」

「ちょっとお客さんが来たみたいだ」

ムルドは頭の上に？マークを浮かべながらもその場を一旦去ることにした。

海斗が目を覚ますと、そこは見慣れた病室だった。

自身がベッドの上で寝ていることに気がつき、ゆっくりと体を起す。

(学園都市……の病院……戻ってきたのか?)

全身がズキズキと痛む割に怪我は軽傷だった。

何が起きたか思い出そうとするとこめかみがズキズキと痛む。

思い出すということを一且放置して窓の外を見た海斗は一瞬はツとなった。

(他の三人は?)

ガラツッ!! 次の瞬間、病室の扉が開いた。

バツとそちらを勢いよく見た海斗に向かって入ってきた人物はこう告げた。

「どつやら目を覚ましたようだね」

「テメエか」

「全く、よく今回は軽傷だったね。後、君の罪は冤罪って認められたそうじゃあないか」

カエル顔の医者 of 皮肉まじりの言葉に海斗は一瞬眉を動かしたが、すぐにそれについて言及することをやめ、

残りの三人の旅行者のことを尋ねた。

「三人はどうなった？」

カエル顔の医者は少し呆れたという感じのため息をつく

「二人は無傷らしいんだがね。彼……どこまであの病室が好きなんだか……」

「上条は無事か？」

「……何を勘違いしているんだい？」

「？」

カエル顔の医者は少しだけ俯くと、困ったような顔で言い放った。



「彼の怪我の原因は君と一緒に帰国する時に階段から転がり落ちたのが原因だ」

「・・・は」

思わず海斗は口を開けたままポカンとしてしまった。

拍子抜けした様子 of 海斗を見てカエル顔は続ける。

「二人ともこうなるのは目に見えてたんだがね・・・こつちとしてはずっとヒヤヒヤしていたよ。」

まあ二人とも大した怪我じゃあなくて良かったねえ・・・  
ほら彼女も待つてるよ」

カエル顔が病室の扉を指差すとそこには秋野綾が少し頬を膨らませて立っていた。

じゃあ僕は・・・とカエル顔は病室から出て行く。

カエル顔と入れ替わるようにスタスタと入ってきた秋野は



「久しぶり？かなアレイスター」

怜二の振り返った先には男性にも女性にも、大人にも子供にも、聖人にも罪人にも見える雰囲気纏った

銀髪の魔術師が立っていた。

「僕を殺しに来たのかい？」

「私が何かをした所で、君を殺せるとは思えなんだがな」

怜二の問いに、アレイスターは静かに答えた。

お互いに敵意はない。

「……流石アレイスター。クロウリー……僕の正体に少しだけ気がついたか？」

「当たり前だ……教えてもらおうか？あの解析不能<sup>レッドフレイト</sup>について……」

「やっぱり聖書にも載っていない事の中には君も知らない事があったりするんだね」

「……やはり」

か

「鋭いね」

怜二はビルの屋上の柵の部分まで移動すると静かに笑いながら街を見下ろすように降り立った。

「一旦僕は身を潜めるよ。あまり彼と接触したくないしね」

「……………何のためだ？」

「もちろん……………」

バサアツツ!!

怜二は間を少しだけ空けると翼を背中から出してこう答えた。

「僕の娯楽のためさ!!…ふふ、ははははははははははははッ!!…!!」

解析不能と科学、そして魔術が再び交差するとき、本当の物語は始まる

!!







〜終結〜（後書き）

少し中途半端でしたかね？

まあ、途中ですしw

続編をいい作品に出来るようにがんばりますのでご勘弁を！  
文章力のスランプを脱出しなければ！

え？元々でしたっけ？w

とりあえずすぐに続編出すと思うので・・・w

今まで読んで頂いた方、ありがとうございます！！

少々グダグダな終わり方ですいませんでした！！

ではまた！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9713q/>

---

とある一族の解析不能《レッドブレイド》

2011年8月29日03時47分発行